

令和 7 年 度
県立学校教務主任研究協議会
研究協議に係る資料
(全日制)

愛媛県教育委員会

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程編成の工夫・改善について

ア ホームルーム編成について

第1学年では学習の習熟度別に2段階（今年度はA1学級、B3学級）に分け、入学時点での学力上位層に対して手厚い指導を行うと同時に、進路実現に向けて努力する生徒を全ての学級に配置して全体の底上げを図っている。また、第2学年より3つの類型を設定し、それぞれの進路に応じた類型選択ができるようにしている。

I 類型…文科系で国公立大学・私立大学・看護系専門学校等への進学に適した類型

II 類型…文科系で短期大学・専門学校等への進学及び就職に適した類型

III 類型…理科系で国公立大学・私立大学等への進学に適した類型

イ 学習意欲向上のための工夫・改善点について

国語・数学・英語の習熟度に大きな開きがある類型（I・III類型）については習熟度別の授業を同時開講によって行い、学習効果を高めるよう配慮している。また令和4年度より『スタディサプリ』を導入し、習熟度に応じた自主学習ができるようにした。第3学年II類型では、生徒の興味・関心に対応した科目をより深く探究的に学習することができるように、最大5つの選択科目・学校設定科目を同時開講している。

(2) 学習評価の在り方について

本校では年3回（4月・9月・1月）教育課程研究委員会を開いており、その際に評価についても検討を行っている。教科・科目のシラバスについては、「学習のねらい」という形で評価規準の一部を記載している。なお、本校の学習評価は、原則として評点を基に総括しており、習熟度別に基準点を設けることで、習熟度が低い学級の上位層における観点別評価が「A」ばかりにならないようにしている。観点別評価においては、「AAAで評定4」とならないように到達度75%以上を「A」、39%以下を「C」として評価を行うこととした。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 習熟度別授業や第3学年II類型での選択科目などにより同時開講の講座が多くなっており、時間割が全体に硬直化している。
- (2) 心身の不調により出勤できなくなった教員の担当授業を他の教員で分担するため、一人当たりの授業時数が増え、新学期を迎えてから急遽開講を止めた選択科目がある。
- (3) 芸術、家庭科の教員は定時制での授業も担当しており、担当教員の負担が大きい。

3 入学生確保に向けて工夫していること

進路説明会、中学生一日体験入学における本校のPR以外に次のような取組を行っている。

(1) ホームページ及びInstagramによる情報発信

本校生徒の活動の様子を、写真や動画で見られるようにしている。Instagramについては昨年度から本格的に運用を開始し、4月現在でフォロワー4.4万人となっている。

(2) 「川之江先輩塾」及び「橘 Summer School」の実施

現在大学等の教育研究機関や地元企業で活躍する本校卒業生が、若い世代を応援するために講演や体験活動等を企画・実施する「川之江先輩塾」や、令和5年度から始まったPTA主催で地元出身の大学生等を招いて夏休みに学習指導を行う「橘 Summer School」は、教員以外の手厚い支援を示す活動であり、今年度は地元中学生を招くことも企画中である。

(3) 旧川之江市内の中学校への働き掛け

令和2年度より、本校生徒の取組を中学校で発表する場を設けている。また、中学校で行われている「ふれ愛地域体験講座」に講師として参加したり、中学生と合同練習を行ったりしている部活動もある。こうした場で先輩の成長を見て本校を選んだ新入生もいる。

令和 7 年度 県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方について

(1) 普通科の教育課程の工夫・改善

本校の普通科は 6 学級で、1 年次は共通の教育課程である。生徒の学習意欲や能力に大きな幅があり、進路希望も多様である。1 年次は学習習熟度別に 3 段階（A B C）に分けて学級を編成することにより、生徒の多様性に対応している。2 年次からは進路希望等に応じて次の四つの類型から選択できるようにしている。

- ・Ⅰ類型 私立文科系大学、短期大学、専門学校等進学希望者と就職希望者
- ・Ⅱ類型 国公立文科系大学進学希望者（一部看護系進学希望者も含む）
- ・Ⅲ類型 私立理科系大学、医療系専門学校等進学希望者
- ・Ⅳ類型 国公立理科系大学進学希望者

ア Ⅰ類型

2～3 年次に学校設定科目「総合芸術表現Ⅰ・Ⅱ」を設けた。芸術的な見方・考え方をを用いて発想したり構想したりする生徒の協働による表現活動を通して、協働における身体性の獲得や芸術に親しみ、豊かな感性を高める態度を育成することを目的としている。

3 年次の選択科目枠では、進路希望等に応じた科目を、生徒が選択履修できるようにしている。進学希望者を対象とした、「国語研究」「数学研究Ⅰ」（ともに学校設定科目）「総合英語Ⅰ」と、就職希望者を対象とした「簿記」が開講され、実践的な指導を行っている。

イ Ⅱ類型

国公立文系大学進学希望者向けに、6 教科 8 科目をバランスよく履修できる教育課程を編成している。2 学級設けているが、学力の幅が大きく、国公立文系大学以外へ進学する生徒も実際には多いため、習熟度と進路希望によりクラスを分けて対応している。数学では、3 年次に学校設定科目「数学研究Ⅱ」を設けている。理科についても学校設定科目「生物探究」「地学探究」を設けている。

ウ Ⅲ類型

私立理系大学進学希望者向けに、数学・理科に重点を置いた教育課程を編成している。数学では、3 年次に学校設定科目「数学研究Ⅲ」を設け、進路希望別・習熟度別授業を行っている。また、国語の学校設定科目「古典研究」を、「数学研究Ⅰ」「情報Ⅱ」と選択履修する形で設け、共通テストの受験等で古典を必要とする 3 年生が学習できるようにしている。

エ Ⅳ類型

国公立理系大学進学希望者がほとんどであり、6 教科 8 科目をバランスよく履修できる教育課程を編成している。数学では、3 年次に学校設定科目「数学研究Ⅳ」を設け、進路希望別・習熟度別授業を行っている。理科では「物理」「生物」を 2 年次から履修できるように配慮している。

(2) 商業科の教育課程の工夫・改善

現在、商業科は各学年 1 クラスという小規模な特性を活かし、生徒一人ひとりに寄り添ったきめ細やかな指導を展開している。今年度より、1 年次に「ビジネス・コミュニケーション」を設定した。社会人として必要不可欠なコミュニケーション能力の基礎を早期に育成し、他者との円滑な連携や自己表現力を高めることで、その後の専門科目の学びをより効果的に進めることを狙いとした。

2 年次より展開する二つの類型のうち、商業類型においては、商業活動全般および事務・経理に関する知識と技術を基礎から応用まで段階的に習得できる教育課程を編成している。

また、今年度の1年生から従来の情報デザイン類型から情報マネジメント類型へと改編となる。新類型では、「プログラミング」を核とした情報系の科目を重点的に配置し、現代社会で不可欠な知識・技術を習得する。さらに、授業においては積極的にICT機器を活用し、実践的なスキルを育成と、ITパスポート試験や情報処理検定など資格取得に向けた学びを実現するねらいがある。大学の情報学部や情報系の専門学校等への進学と、企業の情報部門に携わる職に対応できる実務的な力の養成を目指す教育課程となっている。

(3) 学習評価の在り方について

一昨年度まで紙媒体で学習シラバスを配布していたが、昨年度からはTeams内で生徒に提示する形式としている。生徒たちに各科目の評価の観点や評価方法を確認させるとともに、各科目において何を学ぶべきか具体的に記している。特に、観点別評価の在り方については、令和4年度からの取組を継続しつつ、各教科・科目で研究、検討を重ねている。

2 教務関係実務に関する問題点について

- (1) 四国中央市は愛媛県の最も東に位置しているため、講師の確保が困難である。非常勤講師が見つからない状況においては、待遇を常勤講師に変更していただくなど、状況の改善につながる措置をお願いしたい。
- (2) 各教科から単位数の増加等の要望があるが、標準単位数以下で実施している科目もあり、定められた時間数の中に全ての希望を納めることは難しい。また、教員一人当たりの持ち時間数が多いため開講が困難な講座もある。
- (3) 商業科の情報デザイン科は現在廃止され、2年次から二つの類型に分かれるため、講座数は以前とほとんど変わっていない。令和7年度入学生から、「情報デザイン類型」が「情報マネジメント類型」に代わるため、開設準備に多くの時間を割いている。
- (4) 情報の授業に関しては、一部の教員に負担が偏っている。共通テストの科目に導入されているため、受験指導に向けた連携体制の充実を図りたい。
- (5) 校務系システムの導入により、担任の業務は一部軽減されているものの、教務課の業務はかなり増加した。

3 入学生確保に向けて工夫していること

- (1) 中学生は、ホームページよりもInstagramをよく使用している現状を踏まえ、令和6年1月に「三島高校公式 Instagram」を開設した。学校の日常の様子や雰囲気を知ってもらうため、生徒会役員の生徒を中心として、学校内の授業風景や部活動の様子、学校行事の取組などを発信している。ホームページの情報もこまめに更新し、保護者や地域に対して最新の情報を発信している。
- (2) 柔道部やフェンシング部、ラグビー部、卓球部など、地域の中で小・中学生と合同練習等を行い、交流を図っている。
- (3) 書道部は、地域のみならず県内外のイベントに参加し、学校のPRにもなっている。
- (4) 情報デザイン類型の卒業制作展と同時に、美術部、書道部、華道部、茶道部、自然科学部、食物部、被服手芸部の作品展を校外の会場で開催し、一般にも公開している。コロナ禍で対面での交流が難しかった数年間は、WEBによる展示も行った。
- (5) VYS部やインターアクト部などが、ボランティア活動に参加したり、イベントのスタッフを務めたりして、地域との交流を図っている。
- (6) 夏休みに中学生一日体験入学を実施し、授業や部活動が体験できる機会を設けている。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程編成の工夫・改善

本校は普通科で、1、2学年2クラス、3学年3クラスの計7クラスの小規模校である。地元企業への就職希望者が6～7割と多いものの、国公立大学進学を目指す生徒もいるなど、進路希望も学習習熟度も極めて多様な生徒が入学してくる高校である。生徒の多様なニーズに応えるため、2つの類型と4つのコースを選択できるようにしている。1年次は、全員共通の教科科目を履修するが、2年次からは、それぞれ進路希望や学びたいことに応じて、アグリカルチャーコース、ビジネスコース、スポーツ&カルチャーコース、紙のまちづくりコースを選択できる。また、4つのコースに加えⅠ型、Ⅱ型の2つの類型を選択できるようにしている。(Ⅰ型：基礎基本を徹底して学ぶ類型、Ⅱ型：発展的内容まで学ぶことができる類型)

(2) 学習評価の在り方

学習指導計画表には観点別評価の欄を設け、単元ごとにどの観点を重点的に評価するか明記している。考查問題は、設問ごとにどの観点を評価するのか明示し、通常の得点集計の他に観点別の得点集計を行っている。シラバスと学習指導計画表の観点別評価の欄は統一しており、各教科の授業において生徒に観点別評価の仕方について伝えとともに、シラバスをホームページに掲載し、保護者への周知も図っている。成果としては、多面的な評価規準により、意欲・関心のある生徒を高く評価することができるので、授業における生徒の活動が活発になってきている。

(3) 学習意欲向上のための工夫・改善点

本校では、2つの類型と4つのコースを取り入れ生徒が自分の学力や興味・進路に合ったコースを選び、意欲をもって授業を受けることができるようにしている。また、選択科目を利用した少人数授業を多く設定することで意欲が向上するよう工夫している。

本校に入学してくる生徒の中には学力的に不安を感じている生徒が多いので2年生では、Benesseの「マナトレ」、1年生では、RECRUITの「スタディサプリ」を学び直しの教材として導入している。これにより生徒の学習的な不安を解消し、授業での学習意欲向上につなげている。

令和7年度より通級による指導が本校で導入されることになり、本校に在籍する学習上・生活上困難さのある生徒に、個に応じたきめ細かい指導・支援が可能となった。このことにより、個別、または小集団で特別支援学校の科目「自立活動」を実施することで、学習意欲や自己肯定感を高め、自立や社会参加を図るために必要な能力の育成、通常の学級における授業の理解促進や生活上の課題の解決につながることを期待できる。

2 教務関係実務に関する問題点

(1) 本校は2年次よりコース制を行っているため複数のコースの授業を同時開講の帯科目としている。

そのため、教員の出張・休暇に伴う授業変更を教務課で行っているが、ほぼ毎週時間割変更を行わなければならない、教務課員の負担は少なくない。

(2) 本校は小規模校で教員の数も少ない。また、教員の年齢層が2極化しているため、初任者の先生が校務支援システムの主になることが多い。そのため、校務支援システムの業務引継ぎが難しい。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) 地元の中学校との連携を密にし、土居中学校のみを対象とした体験入学を実施している。地元の中学生に本校の魅力を積極的にアピールしている。

(2) 令和6年度は、土居高校の魅力を発信するために、本校初のYouTube動画を作成しインターネット上に公開した。この動画を中学校主催の進路説明会で用い、本校生の様子や土居高の魅力により中学生に伝えることができた。

(3) 生徒の活動の様子が地域の方々に伝わるようホームページを適宜更新し、新聞やテレビによる情報発信も積極的に行っている。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

- (1) 本校は普通科（3年生7クラス、2年生6クラス、1年生5クラス）に加え、本年度の入学生から体育科（1クラス）が新設されている。普通科1年生は習熟度別にクラスを編成し、習熟度の高いクラスを2つ置いている。習熟度の高いクラスは、数学と英語の授業は全て2クラスを2講座にしている。また、体育科も数学と英語の授業は全て2講座にして学力の定着を図っている。

普通科2年生（6クラス）と3年生（7クラス）は次の4つのコースに分けている。

- ・文Aコース：私立大学・短期大学・各種学校への進学や就職希望者向け
- ・文Bコース：国公立・私立大学への進学希望者向け
- ・理数コース：国公立・私立大学、各種学校への進学希望者向け
- ・健康・スポーツコース：体育系の大学、専門学校への進学希望者向け

文Bコースは主に私立大学を目指す文BⅠコースと主に国公立大学を目指す文BⅡコースに分けている。2年生については、文BⅡと理数のコースを1クラスにまとめることで学習意欲の高い集団を作り、大学受験に向けた授業が展開できるようにしている。

- (2) 文Aコースでは、多様な進路希望を持つ生徒の希望に応えるために幅広い選択科目を設定している。
- (3) 健康・スポーツコースでは、競技力の向上や地域との連携を図りながら社会性のある人間力を育むために、家庭科の「スポーツ栄養実践」や体育科の「ニュースポーツ実践」などの学校設定科目を含む合計6科目の専門科目を設置している。
- (4) 学校設定科目として、地域の歴史や文化、土地の利用方法などの郷土についての知識を深める「郷土探究」、英会話や英訳のテクニックを学ぶことで表現力を向上させるとともに、英語に対する興味・関心を高める「実践英語」や「English Workshop」といった科目を設定している。また、2年生の選択科目には「保育基礎」を設定している。この科目の選択生徒全員が保育技術検定3級取得を目指す指導をしている。
- (5) 新設された体育科では、多様な進路希望に応えるため、3年次から「アカデミックコース」「マネジメントコース」「アスリートコース」の3つのコースに分ける予定である。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 新課程の成績処理に関しては、各教科担当も慣れてきた部分もあるが、やはり観点別学習状況の評価をもとに評定を決定していく手順が煩雑で負担が多いためである。昨年度も一昨年度と同じく、期末考査後の授業時間を数日短縮して成績の間違いが起こらないよう配慮した。
- (2) 産休、育休、病休の教員が複数おり、それに伴って非常勤講師や再任教員が比較的多い上、昨年度は新規採用教員が4人おり、勤務時間や担当時数に制約のある教員が多かった。そのため、バランスの良い時間割を編成するのが大変難しくなっている。また、上記のような習熟度別授業や選択科目による複数クラス同時開講の講座も多く、時間割変更が困難になっている。
- (3) 空き教室はあるが、Wi-Fiが整備されていない、Wi-Fiがあってもホワイトボードが整備されていない、エアコンが設置されていないなど、HR教室や授業用の教室として使用できない部屋が複数ある。そのため、HR教室の配置がいびつになっている。

3 入学生確保に向けて工夫していること

- (1) 中学生一日体験入学の内容を充実させ、より多くの中学生やその保護者、中学校の教員に本校の魅力を知ってもらうよう努力している。昨年度の体験入学では学校紹介動画の視聴、体験授業、本校生徒との座談会、部活動の見学を行った。
- (2) 生徒、教職員の日々の取組をホームページで分かりやすく公開したり、一部部活動の紹介動画をYouTubeに投稿したりして、本校の魅力が伝わるように工夫している。
- (3) 新居浜市内の中学校を中心に、進路説明会を行っている。本校の教育課程、進路状況、部活動の情報や学校行事の様子などを、動画を交えながら説明し、本校の良さが伝わるように工夫している。
- (4) 新学科紹介ポスターを、近隣の小中学校や公民館、各種店舗に貼らせていただき、新設された体育科の広報活動に努めた。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程全般について

ア 50分33時間授業（月木6時間・火水金7時間）を実施し、基礎学力の定着と発展的な学習への展開を可能にするための授業時間を確保する。

生徒への毎朝の連絡事項をPDFにしてTeamsへアップし、生徒は1人1台端末で事前に内容を把握し、SHRの時間短縮を図る。

イ 「総合的な探究の時間」の充実を図り、生徒が興味のある分野において、課題の発見からその解決に向けて、主体的に探究活動に取り組めるよう環境を整えている。大学入試の総合型選抜などの出願の際、志望理由書に記載できる事柄を自分たちで用意して、進路実現に向けての意識を高めている。

(2) 学級編成・習熟度別授業について

ア 1年次1学期末頃から、それぞれの類型の特徴や過年度の進路実績に関する資料を配布するなどし、類型選択について真剣に考える機会を促す。学年集会・ホームルーム活動・類型選択説明会・保護者懇談会などで生徒及び保護者を対象に詳しく説明する。

イ 2年次から人文社会類型と理数医療類型の2つの類型に分かれ、それぞれの進路希望に対応した授業を実施する。3年次には、それぞれの類型内で1クラスのみ習熟度の高いクラスを編成し、難関大学を志望する生徒に対応した指導をしている。クラス編成は進路希望と学習成績を総合的に考慮して行う。

ウ 2年次の数学Ⅱ・数学B・数学Cと英語コミュニケーションⅡ、3年次人文社会類型の論理・表現Ⅲ、3年次理数医療類型の数学Ⅲ・応用数学、数学研究B・数学研究Cにおいて進路希望別の授業を実施する。

(3) 学習評価の在り方について

「学習評価の手引き」を参考にして、指導目標に沿った適切な評価規準を定めている。定期考査の出題に関しては、各教科で事前に検討会を実施し、本校生徒の実態に合うとともに評価の観点で踏まえた出題になるよう配慮している。教科の單元ごとに「新居浜西高10 GOALS」に基づいたルーブリックを作成し、生徒に配布する。評価基準を示すことで、日々の学習活動の中で「今自分がどの項目をどの程度できているか」と自己評価をしやすくし、その自己評価を参考に、指導者が3つの観点別に評価をして成績の根拠とする。

「観点別学習状況の評価」により、各教科の学習状況を分析する。生徒がそれぞれの教科学習において、どの観点で望ましい学習状況が認められ、どの観点に課題が認められるのかを明らかにすることにより、教員側の指導の工夫改善や生徒側の学習の改善に結び付けていく。評点をつけてそれで終わり、ではなく評価した後、課題が残る場合は、その改善に向けて教員と生徒が互いに改善点を見つけていく取組が必要である。

2 教務関係実務に関する問題点

(1) 時間割編成・変更について

生徒の学習効率を考慮し、バランスの良い時間割を編成するよう努力している。しかし、非常勤講師・再任用教員・新規採用教員・時短勤務など勤務時間や担当時数に制約のある教員が多い。2年次の数学と英語において実施している習熟度別授業（人文社会類型3クラス3講座、理数医療類型2クラス2講座×2）は同時開講のため、出張・休

暇の際の時間割変更が難しく、自習になるケースがある。

(2) 支援を要する生徒の増加

移動に松葉杖を使う身体的な支援を要する生徒や、吃音や緘黙のため配慮を要する生徒が増えてきた。教務的には教室の配置も含めて、移動に時間を要する生徒のいるクラスの授業を昼休みや放課後を絡めるように組むことで、余裕を持って安全に教室移動ができるよう工夫している。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) 中学生一日体験入学について

同じ市内の国立新居浜高専は、大学への編入学にも就職にも強く、校則も自由なため、毎年のように理系希望の中学生が数多く進学している。中には本校に出願したものの、高専の入試時期が若干早いため、間際で「受検取り下げ」とする生徒も非常に多い。そこで、以前から実施している体験入学(模擬授業と学校紹介ビデオ)の他に、同日に「西高数理コンテスト」を3年前から開催している。理系分野に興味のある中学生に何か刺激となるものを、という思いで企画した。個人戦ではなく、3人1組によるチーム対戦形式を取り、数学と理科の本校自作のユニークな問題に、仲間と協議しながら解き進み、勝ち残りで優勝者を決めていくというスタイルにした。8月末とはいえ残暑の厳しい体育館に、第3回は144名48組(過去最多)もの応募者が集まり、熱戦を繰り広げてくれた。おかげで、観戦していた中学校の先生方からも好評価を得ることができた。体育館にクーラーなど空調設備が整えば、さらに参加者を募ることができそうだ。

授業参加型の体験入学と、力試しの挑戦型コンテストというタイプの異なる催しで、今後も目標を持った意識の高い中学生の志願者増につながるものにしたいと考えている。

(2) 進路説明会について

新居浜市・四国中央市・旧西条市の全ての中学校に、学校案内のパンフレットと資料を送付し、各中学校で実施される進路説明会にも積極的に参加させてもらっている。今年度から放送部、インターアクト部を魅Can部として申請しており、地域との連携や国際理解教育、ボランティア活動にも力を入れていることを中学生にアピールしていきたい。

一方で、市内の中学生の減少と、松山市内や県外へと抜けていく現状では、入学定員を確保することは困難である。それよりも、入学してくれた生徒が、不登校となり通信制などへ転学することなく、卒業させることが高校の使命であると考えている。説明会では「西高に入学したら、西高を卒業しよう」、「どの環境(高校)が自分を伸ばせるか考えよう」、そして「仲間と互いに切磋琢磨する学校」として選択して欲しいと伝えている。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程編成の工夫・改善

ア 学校設定科目について

- (ア) 共通科目と専門科目に学校設定科目を28科目設置し、生徒の興味・関心や進路に応じた科目選択を可能にしている。
- (イ) 芸術に「音楽基礎」「美術基礎」「実用の書」「音楽表現」「美術表現」「書道表現」「音楽探究」「美術探究」「書道探究」を設置し、基礎から発展まで幅広い学習を可能としている。
- (ウ) 外国語に「中国語」「朝鮮語（ハングル）」「グローバル論」を設置し、ネイティブが担当し文字の習得や基本的な日常会話、母国語とする国の文化が学べる。グローバル論は地域の魅力を英語で発信することを目標に、情報伝達に必要な語彙や文法を学習する。
- (エ) 平成22年から毎年ユネスコスクールに認定され、ESDを推進した教育とSDG's達成を目指した地域学習に力点を置き、地理・歴史「ふるさと愛媛学」、理科「ESD環境論」、外国語「グローバル論」、家庭「地域共創実習」、工業「にいはま学Ⅰ・Ⅱ」を設置している。

イ 科目選択

(ア) 八つの系列の設置

科目選択の指針となる科目群として八つの系列「人文科学」「国際教養」「地域共創」「自然科学」「工業」「商業」「スポーツ科学」「福祉サービス」を設置している。

(イ) 少人数制講座

2年次が17～18単位、3年次が21単位を選択としており、受講講座人数は平均13人弱と少数である。1人でも開講するため、きめ細かな指導が生徒一人一人に行き届く。

(2) 学習評価の在り方

ア 本校の評価は、三つの観点別評価（ABCの3段階）、評定（1～5の5段階）、評点（100点法）の3点を行っている。

イ 各教科評価基準を作成して評価する。評定のみ学校全体で統一した基準を設定している。

ウ 定期考査は中間・期末共に実施する。中間の実施は学習の区切りとして位置付け、テストの素点を保護者へ通知して学習改善へつなげている。

2 教務関係実務に関する問題点

(1) 校務支援システムによる出欠・成績管理

システムへの入力により出欠・出欠管理が容易になった反面、入力時の人的ミスが目立つ。通知表で生徒に確認させて判明することが毎年起こっている。

(2) 選択教室の配置

少人数講座から講座数が多く使用教室も多い。すべての講座をエアコン設置教室に割り振ることができない。

(3) 教員の時間割と変更

選択科目の授業は受講生徒がそれぞれ異なることが多く、出張等で時間変更ができず自習になってしまう。教員の時間割に3時間以上連続が頻発する。単位制の総合学科ではどうしようないため教科担任の理解を得られなければいけない。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) 5月と10月に中学校訪問、7月に中高連絡会を実施している。

(2) 8月にオープンスクール（体験入学、部活動見学）を実施している。

(3) 1月に3年次の課題研究発表会を一般公開（保護者、企業、地域、中学校対象）で実施している。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 習熟度別・選択制の授業編成

数学では、1年生の一部の学科において、習熟度別に教科指導を行っている。また、今年度は2年生において、数学A及び論理・表現Ⅰを選択している生徒がおり、進路希望に応じた、少人数制での教科指導も行っている。

(2) インターンシップ・企業見学の充実

2年生では、課題研究の時間を割り当て、2学期に5日間インターンシップを実施している。また、全学年で企業見学を実施し、県内外の企業を訪問している。事前・事後を含め、キャリア形成に必要な自己理解や職業観の育成などの指導を充実させている。

(3) 情報電子科の教育課程再編の成果

昨年度より実習時間を1時間増加させたことで、生徒が授業で得た知識を実際に活用し、ものづくりに必要な技術を習得することにつながることができた。また、レポートの整理や事後指導にも十分に時間を割け、生徒の取組の成果を学習評価に還元することができた。

(4) 環境化学科の教育課程再編の成果

昨年度より、1・2年次の工業化学の授業時数を3から4時間に増やしたことで、小テストやワークを定期的に実施し、化学に関する基礎知識を生徒に身に付けさせることができた。理解度が向上したことで、学習意欲も向上した。今年度も、同様の成果が期待でき、生徒の取組の成果を学習評価につなげることができると考える。

2 教務関係実務に関する問題点

(1) 時間割作成上の問題点

実習や課題研究等、連続して入れなければならない授業が多い上、新規採用教諭、再任用講師、時間講師の割合も高く、授業を組み込む時間に制約がかかってしまう場合が多い。また、本年度は選択科目も開講しているため、時間割の作成に例年以上の時間と労力がかかった。

(2) 年度末・年度初めの業務

指導要録の点検や校務支援システムの年度末処理等、新年度の時間割作成や名列表の準備、出席簿の作成等を、少ない人員で短期間に行わなければならない、部活動の指導と合わせた休日出勤もやむを得ない状況である。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) 中高連絡会・学校説明会での学校の魅力発信

中学校での学校説明会において、各学科の部活動での取組等を動画で中学生とその保護者に説明し、学校の魅力発信に努めている。公式YouTubeチャンネルでも、様々な活動の様子を積極的に発信している。

(2) 一体験入学・ものづくり教室の実施

今年度は6月28日に一体験入学、8月6日にものづくり教室を実施し、参加する中学生が実際に機械を操作したり、パソコンを操作したりするなど、体験的に本校での学習活動に触れることのできる機会を設ける。一体験入学では、一部の部活動で、体験入部も行う。

(3) 東予ものづくり祭（フェス）への参加

近隣の商業施設で開催される東予ものづくり祭（フェス）に参加し、授業や実習等の時間に作成した作品を展示し、本校での学習活動とその成果を披露している。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 学習意欲向上のための工夫・改善点

ア 本校には、商業科（3クラス）、情報ビジネス科（1クラス）の2学科がある。小学科ごとに特色ある教育課程の編成に努めるとともに、生徒の学力や進路希望の多様化に対応するために、類型及び科目選択の幅を広げている。科目選択においては、適宜ガイダンスを設けて進路希望に応じた学習につながるよう個別指導を実施している。

イ 問題解決のための継続的な学習の一層の推進を図るため、専門的な知識と技術の深化・総合化の学習が必要となってくる。3年次の「課題研究」では、「総合的な探究の時間」の趣旨に則し生徒が自ら課題を見出し、解決を図るための指導内容の工夫を行っている。

ウ 生徒の学習習熟度別に講座編成を行うことで、“分かる授業”の実践と、学習意欲の向上や基礎学力の定着につなげている。また、個別指導を目的としたティーム・ティーチングや少人数講座編成により、多様な生徒に対応できるようにしている。

(2) 学習評価の在り方

ア 少人数講座やティーム・ティーチングを実施する科目では、公平な評価が行えるよう教員間の情報共有を拡充させるため、週1回は教科会の時間を取るようになっている。

イ 観点別学習状況の評価に基づき、評価後に学習及び指導の改善につなげるための課外指導を行う時間を設けている。生徒の特性に応じた目標達成までの道のりを示すことで、指導と評価の一体化を図っている。

2 教務関係実務に関する問題点

(1) 習熟度別の講座編成、選択授業の拡充及びティーム・ティーチングの授業形態を拡充させた結果、時間割が固定化し、変更や振替が困難になった。

(2) 商業科の各専門科目に応じた教室の確保と、少人数考査編成のための科目数を超える教室の割り振りのために時間割のアンバランスが生じている。また、時短勤務や変則的な勤務形態が増えたことによる曜日に対する科目の偏りが増えている。

(3) タブレットの活用によりリモートでの学習指導や課題提出が可能になったが、授業に代替するにはさらに指導内容の工夫検討が必要である。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) 学校説明会の開催

中学校への学校説明会では、商業高校独自の取組や学習内容について、分かりやすく説明することを心がけている。在校生の活動について、部活動や授業の様子動画をを用いることで、中学生・保護者が実感できるように工夫している。

(2) ホームページの活用

学校行事や部活動の活躍を、写真や動画記事にして日々更新することで充実した高校生活を送る生徒の姿をアピールしている。

(3) 進路実現

本校に入学してくる生徒の多くは地元での就職を希望している。また、多くの卒業生が地域の企業で活躍しており、学校への期待と信頼も大きい。毎年周辺地域を中心に多くの求人があり、就職率100%を維持することができている。

(4) 中学生一日体験入学の実施

体験入学では、商業科で学ぶ内容の体験授業を実施し、商業科目に対する興味・関心を高めることができている。また、在校生とのディスカッションや部活動見学など、授業以外の活動も多く取り入れることで、中学生にとって高校生活が実感できるように工夫している。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

本校はSSH指定校（本年度はⅡ期3年目）であり、その特徴は、普通科・国際文理科・商業科共通の学校設定教科「マルチサイエンス」（1年次3単位、2年次2単位、3年次1単位の計6単位）を設定し、全ての生徒が課題研究に取り組むことにある。そして、生徒が自ら設定した課題に対して探究学習を行うことにより、生徒の学びに対する意欲が向上し、進路実績にも好影響を与えている。教育課程においては、SSHの特例措置として、普通科と国際文理科では「情報Ⅰ」と「保健」を標準単位数から1単位削減し、商業科においても、「保健」を標準単位数から1単位削減している。また、「総合的な探究の時間」は「マルチサイエンス」で代替している。

令和6年度に「学習評価」推進校として研究指定を受け、11月に学校訪問研修を実施した。SSH指定校として培ったルーブリックに基づく評価を全ての教科に反映させ、学校全体として統一されたルーブリックを用いることで、学習評価の改善に取り組んだ。

2 教務関係実務に関する問題点

習熟度別講座編成や選択科目の増加、非常勤講師や他校との兼務による勤務の制限、使用教室の不足等の問題により、時間割編成や毎週の時間割変更が困難になっている。さらに、国際文理科の2・3年は国際科と理数科の混合クラスであったり、「マルチサイエンス」は、ほぼ全ての教員が指導を担当したりしているため、時間割編成や変更の困難さが増している。また、非常勤講師の先生方の勤務の曜日指定が年間の授業時数の均一化に大きな影響を及ぼしていること、校務支援システムでは日々の「出欠の入力」が徹底できていないために担当者が苦慮していること、勤務時間の関係で7限の曜日に会議が入った時は45分授業とすることが多く、生徒の授業時間の確保において課題が多いことなどが、問題点として挙げられる。

3 入学生確保に向けて工夫していること

- (1) 積極的な広報活動…中学生・保護者対象の説明会、学校HPの改善、公式Instagramの開設など（西条地区に加え、新居浜地区のほぼ全ての中学校の高校説明会に参加し、西条高校の魅力を伝えている。）
- (2) 中学生一日体験入学の改善…SSHの取組紹介・体験授業の講座数を追加・体験授業を一人が2講座受講・部活動体験実施など ※部活動体験のみの参加も可とした。
- (3) 校則等の見直し…校則検討委員会の設置、携帯電話等の校内持込み可、自転車通学全員許可、地方祭の日の休業、指定通学用バッグの廃止、制服（男女冬服・夏服・女子用スラックス）の変更など

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

- (1) 英語、数学において、少人数講座でのきめ細かい指導を目指して、1クラスを分割した習熟度別に講座を編成して授業を行っている。英語科では、編成を年間固定に変更し、進路希望別に応じて、計画的に教科指導ができるようにした。
- (2) 大学進学を希望している生徒のために、2、3年生で数学や英語、理科の科目を選択できるようにしている。特に、環境工学科と生活デザイン科ではコース制をとり、多様な進路に対応できるように選択科目を設けている。
- (3) 障がいによる学習上または生活上の困難を改善・克服していくことを期して、通級による指導「自立活動」（該当生徒のみ実施）を新設した。
- (4) 令和7年度からDXハイスクール事業に選定されたため、令和7年度入学生の教育課程では、情報教育の充実を図った。「農業情報活用」や「栽培と環境」、「課題研究」で情報教育に取り組んでいく。
- (5) 学習評価については、指導と評価の一体化を目指している。生徒観察による理解度の把握、生徒の質問や発言の質的評価、グループワークにおける役割遂行度や協調性の評価、ポートフォリオによる学習の変遷の評価など、多様な評価を取り入れ、生徒にもシラバスなどで事前に共有する。評価後は、生徒への個別指導やアドバイスを実施し、生徒自身が学習状況を振り返り、改善に繋げるための自己評価や振り返りの機会を設ける。また、生徒や教職員の意見を反映させる形で中間考査を再設した。定期考査では、教科書や授業で扱った内容の暗記や再生だけではなく、知識を活用して問題を解決する力、自分の考えを論理的に記述する力、資料を分析・解釈する力などを評価する問題を取り入れる。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 異動の際の引き継ぎが充分ではない場合があり、困ることがある。この問題の解消のために、前年度担当した者と、新たに担当する者のペアで業務にあたるように配慮している。また、引き継ぎ文書を作成するように努めている。
- (2) 教務課が業務過多になっていることがある。校務支援システムなど、処理しなければならないものも増えているので、業務が偏らないように努めている。また、管理職とも連携して、学校全体での業務の均一化や、ビルド&ビルドではなく、スクラップ&ビルドであるように努めている。

3 入学生確保に向けて工夫していること

本校では、中学生一日体験入学や中学校に出向いての進路説明会に加え、農業高校という特徴を生かして、中学生とその保護者を対象とした「西農ふれあい体験学級」という講座を年4回開催しており（下表参照）、毎回多くの申込みがある。

また、企業とコラボした商品開発や、西条市千町棚田保全活動、高校生レストランなど、各学科の特色を生かして、地域と連携した課題解決活動に取り組んでいる。その様子は、地元テレビのニュース番組や新聞、西条市広報、フリーペーパーなどでも紹介されている。

学校案内は、学習活動や学校行事の写真を中心に構成した。ホームページの学校紹介動画は、ドローンを使って撮影し、インパクトのあるものを作成した。

以上のような取組により、農業や西条農業高校に関心を持ったという生徒もいるので、入学生確保に貢献していると言える。地元西条市内からの入学生がさらに増えるように、今後も入学生確保へ向けて、中学生や保護者に対して情報発信していく必要性を感じる。

令和7年度ふれあい体験学級 実施計画

実 施 内 容 (予 定)	実施日	担当学科
農業×防災 ～かまどんで炊飯体験～	9/27(土)	食農・作物
ペーパーウェイト製作と測量体験		環工・土木
さくらもちを作ろう		生デ・食製
多肉植物の寄せ植えをしよう		生デ・草花
ミカンの理解を深めよう～スマート農業も体験！～	10/25(土)	食農・果樹
コケ（苔）を使った作品制作と製図体験		環工・造園
フラワーアレンジメント		生デ・フラワー
はぎれ布で小物を作ろう		生デ・被服
グローバルギャップ G G A Pについて学ぼう～うまいぞ菜の収穫体験～	11/22(土)	食農・野菜
竹を使い飯盒炊飯体験		環工・環科
西農御膳を作ろう		生デ・食物
食品の製造許可について学ぼう ～自分たちで焼き菓子を製造しよう～	12/6(土)	食農・食製
竹細工（竹灯ろう・竹風鈴製作）体験		環工・環科
冬野菜を収穫しよう		生デ・野菜
みたらし団子を作ろう		生デ・食製

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程編成の工夫・改善

ア 本校の概要

本校は、各学年普通科3クラス、家庭科1クラスの3学年12クラスで編成されている。全校生徒の約3分の1はJR通学である。他県からの入学者も各学年に数名おり、生徒の出身地・生活背景から、学習に関する能力、意欲、進路希望に至るまで、あらゆる点で多様な生徒が集まっており、その多様性に対応できる教育課程の編成に努めている。

イ 普通科

1年生は3クラス共通の教育課程で編成しており、数学と外国語の授業は、習熟度別にして、生徒の学力や適性に対応した学習を可能にしている。

2、3年生では、生徒の個性を生かす教育の充実を図るため、生徒の能力・適性、興味・関心、進路希望などに応じて「キャリア探究」と「文理探究」の2つのコースを設置した。「キャリア探究」は生徒の多様な進路希望を実現するため、進学や就職に対応した科目を、ビジネス系と総合系のそれぞれのコースから選択できるようにした。「文理探究」では、大学進学に必要な学力の向上を目指し、いわゆる文系・理系から選択できるようにした。学ぶことに興味や関心を持ち、粘り強く取り組む学習を目指して、「キャリア探究」では多様な選択科目を設定し、2、3年生の2年間で主体的に深く学べるようにしている。

ウ 家庭科

2年次より2つのコースを設定し、進路希望に応じて選択できるようにしている。ライフデザインコースは、衣・食・住・家庭等の生活課題について専門的に学習し、生活関連産業に従事できる技能の習得を目標とするコースであり、食物調理や被服製作などの実習や資格取得を重視している。ヒューマンサービスコースは、高齢者福祉・乳幼児保育等について深く学び、福祉関連のニーズに対応できる人材を育成するコースであり、保育体験学習や介護実習、資格取得に重点を置いている。また、地域に根差し、共生のまちづくりに貢献できる人材の育成を目指し、2・3年生において「課題研究」、ライフデザインコースでは学校設定科目「ライフデザイン」を設け、地域課題の研究と商品開発、普及活動など体験的・実践的に学習に取り組めるようにしている。

(2) 学習評価の在り方（学習意欲向上のための工夫・改善点）

ア 生徒への評価方法等の周知について

生徒による授業評価アンケートの中に、「評価について説明があった。（1学期）」「自分に対する評価は適切である。（2学期）」という項目を入れ、評価の方法やその妥当性に対する生徒の認識を教員が把握できるようにしている。

イ 授業評価について

年に2回、生徒による授業評価を実施し、1回目の評価結果を基に各教員が2回目の評価結果が向上するよう授業改善に取り組んでいる。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 生徒の学力差や多様な進路希望に対応するために習熟度別クラス編成や少人数指導、多様な選択科目等を取り入れているため、時間割の柔軟性が乏しい。出張時等の時間割変更が困難なケースも多く、自習で対応しなければならないことも少なくない。
- (2) 校務支援システムの担当者への業務が集中している。年度末、年度初めの設定、出欠の管理や時間割変更の対応、新入生へのタブレット端末準備等で一部の先生への負担が大きくなっていた。学習評価やTeams、EILS、ロイロノート等の運用業務も加わったため、教務課員全員がサポートできるような体制づくりをしている。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) 「ライフデザインだより」の発行

月に1回のペースで「ライフデザインだより」を発行し、市内の全中学校に配布、掲示をしてもらい、県内唯一の家庭科の専門学科であるライフデザイン科の学習活動や取組を紹介している。「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）」から継続して活動している内容についてホームページを通じて、その活動を発信した。また、伝統文化の普及のため、市内地域に出向きイベントを企画した際には、本校ライフデザイン科の入学を希望する中学生と交流する場となった。

(2) 学校紹介

中学生体験入学や進路説明会での学校紹介では、プレゼンテーションソフトによる文字や静止画による説明だけでなく、授業や行事、部活動の様子、生徒会役員からのメッセージなどをまとめた動画を用いて、本校生徒の生き生きとした表情を中学生や保護者に見てもらうようにしている。また、中学生一日体験入学等では在校生が説明を行い、親しみやすさや高校での生徒の成長を感じてもらうようにしている。

(3) ホームページによる情報発信

学校ホームページ「養正が丘日記」を更新し、学校行事や学校生活、授業の様子を発信している。毎日行うことで閲覧数が増加している。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 工夫・改善点について

ア 学校設定科目

多くの生徒が就職を希望しており、社会人として最低限必要な基礎的・基本的な知識・技能・素養を身に付けさせることを目標とし、1年次に学校設定教科「総合」・科目「総合基礎」(1単位)を設置している(4月から6月末までのまとめ取りで実施)。

1クラスに対して5名の教員によるチームティーチングの形で行い、個々の習熟度に合わせて個別指導を実施している。全クラスで週に4時間、「計算力」の基礎的・基本的な学力を充実させることを目的としている。

イ 工業科

電気システム科と建設工学科では、生徒の進路希望に合わせ、自らの適性・能力に応じた「型」で専門科目をより深く学ぶことを目標に、2年次より類型(2コース)選択を行っている。

電気システム科2・3年次のロボット型において、「通信技術」(4単位)を設定し、通信システムと相互に関連付けて学び、実践的・体験的な学習活動を行うことで、新たな価値を創造する通信技術を担う能力を育成できるようにしている。

ウ 課題研究

総合的な探究の時間の代替科目である2年次の「課題研究」(2単位)では、インターンシップを1単位分まとめ取りで1週間行っている。あとの1単位は、年間通して週1時間を工業教育担当課が中心となり、工業各科と協力して事前・事後指導や継続的なキャリア教育を実施している。

(2) 学習評価の在り方について

各教科の評価の観点に基づき、生徒の学習の成果や到達状況を適切に把握し、評価を行っている。学校評価アンケートにおいて、生徒の意欲・関心等を把握するだけでなく、教師自らの指導方法の改善にも努め、公開授業の際に外部の方々の意見をいただき、更に工夫・改善に努めている。

全学年で、各教科において3観点評価を評価規準に従って確実に実施することと、校務系グループウェアにおける成績処理をスムーズに運用できるように、全教職員で共通理解を図りたい。昨年度、「特別活動の評価」を見直したが、今年度も学校としての評価規準、評価方法をさらに明確にしていきたい。他校の取組も参考にしながら再検討を重ね、説明責任が果たせるような学習評価を研究・実践していきたい。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 複数教員による帯授業も多く、出張等での授業の振替が難しい場合がある。また、時間講師も多く、曜日の入替えができないので、曜日によって授業時数の差異が大きくなる場合がある。
- (2) 工業科では、実習等の連続したコマ割りや個々の生徒の多様な進路希望に対応するために、同時開講の授業が多い。普通科では、各教科の教員が全て同時に授業を行わないことを原則に時間割を作成しており、年度当初の時間割編成に労力を要する。
- (3) 支援が必要な生徒も年々増加していることから、授業での工夫が一層必要になっている。一斉授業後や定期考査前に個別補習を行うなど、個別対応が増え、各教員の負担も年々増加している。

3 入学生確保に向けて工夫していること

- (1) 本校への理解を深めてもらうために「中学生体験入学」を年2回実施し、6月に全科見学型、7月に希望学科体験型と部活動見学の形で実施した。西条市内の中学3年生全員に案内及び申込書を配布し、希望者の増加に努めている。
- (2) 「学校説明会」を6月に実施し、近隣の中学校の先生方に来校いただいて、各課の担当教員より学校の説明をした。また、実習施設の見学や公開授業を実施し、生徒の活動状況を見てもらった。
- (3) 広報活動の充実をより図るために、本校の学校紹介動画を作成し、中学校の進路説明会等で活用した。様々な場面で配布可能な、学校案内パンフレットもより本校を深く理解してもらえるように毎年工夫・改善を行っている。
- (4) 令和8年度開設準備中の「東予総合高校」については、準備委員会の教務部会と広報部会が連携し、より多くの生徒・保護者に新校の魅力を継続的に発信していく予定である。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程編成の工夫・改善

普通科は2年次より類型選択をさせ、国公立大学進学希望の文系・理系、私立大学・短大・専門学校進学又は就職希望に分けて、生徒の学力向上に結び付けている。

令和4年度入学生より選択科目を見直し、普通科2・3年次において芸術と商業の選択を設けることにより、教科横断的な学びをさせたいと考えている。また、多様な進路希望の実現に向け、3年次において、英語との選択として商業、家庭、音楽、美術を選択できるようにした。学校設定科目「理科探究」では生徒の関心や実態に応じて学校内外の様々なフィールドで実践的・体験的な学びができるようにした。

園芸科学科では、3年次に農業学習の集大成として専門的な知識と技術に関連付け、その深化・総合化を図るため、令和4年度より「課題研究」を1単位増やし、4単位とした。

(2) 学習評価の在り方

新課程においては、評点を基に総括し、各学期の観点ごとの点数の平均を学年末の観点ごとの点数とし、その平均を学年末の評点としている。

2 教務関係実務に関する問題点

(1) 園芸科学科において専門的な学びを充実させたいが、教員の確保が難しく、農業科教員一人あたりの授業時数が多くなっている。

(2) 校務支援システム担当者への負担が大きい。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) 7～8月に近隣の中学校で出張講座を実施した。本校の教員と生徒が中学校に出向き、1時間の授業をするもので、昨年度は理科と農業、総合的な探究の時間の3講座から選択できるようにし、実施した。

(2) 1日体験入学では、体験授業、本校生徒との交流会、保護者相談会を設け、本校生徒の様子が伝わるようにした。

(3) 令和4年度よりルールメイキングプロジェクトと題して、校則をはじめとしたさまざまな課題について、対話を重視した課題解決のプロセスを学ぶ活動をしており、本校生徒や中学生だけでなく地域に貢献できる学校を目指している。

(4) 園芸科学科では年に3回「わくわくサタデースクール」を実施し、中学生が本校生徒と一緒に農業の実習体験をする場としている。

(5) 総合的な探究の時間等で地域の方々を講師に招いたり、地域の行事にボランティアで参加したりすることで、地域に根ざした学校づくりに努めている。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程編成

生徒の進路希望に対応するため次の三つの類型を設け、類型ごとに特色ある教育課程を編成している。

Ⅰ類型：国公立大学文系学部（6教科型）への進学希望者

Ⅱ類型：国公立大学文系学部（3教科型）、私立大学文系学部及び芸術系学部への進学希望者

Ⅲ類型：国公立大学理系学部及び私立大学理系学部への進学希望者

1年次は共通の教育課程とし、2年次より文系（Ⅰ・Ⅱ類型）と理系（Ⅲ類型）に分かれる。また、文系のⅠ類型・Ⅱ類型への選択は3年次に行う。さらに、教科によっては2年次より習熟度別の講座を開いたり、3年次は習熟度別クラス編成を行ったりし、効果的に学習ができるような配慮も行っている。各科目の編成については、数学科および理科でまとめ取り方式を導入し、内容を段階的に学習することができるように工夫している。

(2) 学習評価

評定については、「三つの観点の評価の組合せ」を基にした評定と、「評点」を基にした評定が異なる場合は、「三つの観点の評価の組合せ」を基にした評定を優先するようにしている。作成した評価規準については、1年生については入学予定者説明会で配付を行い、他学年については年度当初に Classi を用いて配信を行い、学習評価の信頼度を高めるとともに、生徒自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるように学校全体で努めている。

2 教務関係実務に関する問題点

本校では、上記でも述べているが、観点別評価を総括し、100点法で行っている。観点別評価と評点が正しく入力できているかを確認する必要があるため、学校独自のファイルを用いて、確認作業を行っている。また、評定についても、「三つの観点の評価の組合せ」を基にした評定と、「評点」を基にした評定が異なる場合は、「三つの観点の評価の組合せ」を基にした評定を優先するようにしているため、校務支援システムでは自動計算ができない状態である。評定についても、学校独自のファイルを用いて、確認作業を行っている。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) 学校見学会

夏休み中に3日間の学校見学会を実施し、近隣の中学校の生徒が本校を訪れ、学校概要の説明を聞いたり、校舎・施設見学、部活動参観、本校生徒との座談会を行ったりしている。

(2) オープン授業ウィーク

例年9月に4日間程度の日程（令和7年度は4日間の日程）で、オープン授業ウィークを実施している。地域の中学校の運動会の代休日が日程の期間に含まれるようにしている。また、中学生はもとより、その保護者や地域の方々が数多く来校し、授業参観を中心に本校の見学を行っている。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

- (1) 生徒の多様な適性や進路希望に柔軟に対応できるよう、コース制を実施している。科目の配当時間及び選択科目の設定等の改善を行い、各コースにおいてそれぞれの特色を生かした学習ができるよう配慮している。さらに、学校設定科目（数学探究Ⅰ、Ⅱ）を開設することにより、生徒の実態に即した教育を実施している。

1年次には、共通科目で実施し（国・数・英・理・社はクラスを超えて習熟度別編成AB）、2年次からは、総合文理コース、国際文化コース、社会福祉基礎コース、情報ビジネスコースの4つのコースに分かれて学習している。生徒の興味・関心や進路希望に適切に応えとともに、生徒自身に選択をさせることにより、学ぶ意欲を更に高めるように配慮している。

- (2) 学習評価に関しては、定期考査を中心に行っているが、生徒の学習意欲を高めることを重視し、学習態度や指導過程を含めた総合評価を原則としている。学習指導要領の趣旨をよく理解し、評価の観点を改善していき、指導及び評価の中で、教員自身が指導方法の自己評価、改善ができるよう、研修研鑽を深めていく必要がある。また、コースによる不平等が生じないように考査平均点をコースごとに規定内におさめるように配慮している。学習指導計画表に観点別評価の項目を設け、計画的に観点別評価が実施されるよう配慮している。年度初めに評価とその方法についてプリントを配布し、教職員の意思統一を図った。
- (3) 教育課程委員会を開き、生徒・学校・地域の実態に即した教育課程が編成され、実施されているかを各教科、総合的な探究の時間、特別活動の面から検討している。
- (4) 年間2回の授業参観日を設け、本校保護者や地域の方にも見学してもらい、その授業評価を自らの授業に活かせるようにし、より適切な教育課程の実施ができるよう努めている。また、校内全教員が教科を超えて互いの授業を見学している。
- (5) 総合的な探究の時間を全学年が班に分かれて研究を行うなど、生徒の興味・関心に沿った取組ができるよう工夫している。

2 教務関係実務に関する問題点について

- (1) コース制のため授業時数の増加が、教師への負担を大きくしている。
- (2) 教員数が少ないことにより校務分掌を兼任しており、授業以外の負担が増えている。また、出張時の時間割変更等によりさらに負担が大きくなっている。
- (3) 少人数の4コース制により時間割が複雑で、変更が困難になっている。
- (4) 短期間で異動する講師は、部活動指導や担任、校務分掌での負担などの配慮が必要であり、小規模校では講師が1人増えるだけでも負担増を実感する。さらに芸術教諭の他校との兼務は、授業の面では問題ないが週に2日他校に出勤するため、担任の担当や部活動指導が十分にできないため、校務分掌の仕事量を配慮せざるを得ない。
- (5) 校務支援システムにおける諸帳簿の出力形式が画一化されており、より一層の研究が必要である。

3 入学生確保に向けて工夫していること

- (1) 島外からの通学生は朝が早いいため昼食補助（給食）を平成29年度から開始した。
- (2) 中学生向けの体験入学を土曜日に行い、参加が容易になるよう工夫している。
- (3) 令和元年度から全国募集を行い、各地域で本校をPRしている。
- (4) 伯方島で行われるサイクリングイベントにボランティアとして参加するなど、地域住民との交流を深めている。

令和年 7 度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 本校の教育課程

教養類型（文系大学、短期大学及び各種・専修学校進学希望者対象）では、多様な生徒の進路希望に対応するため、3年次に「芸術Ⅲ」や家庭科の専門科目である「保育基礎」「フードデザイン」を設定している。

探究類型（文系・理系を含めた国公立・私立大学進学希望者対象）では、1クラス内に文系・理系の生徒がいるため、一部の科目（3年次の例：政治・経済、体育、英コミⅢ、論表Ⅲ）以外は、全て文系・理系別の選択科目を履修している。

情報・ビジネス類型（就職や経済・経営系進学希望者）では、2年次から商業科目を履修し、授業や放課後の個別学習を通して、資格取得に積極的に取り組んでいる。

農業科（園芸クリエイト科）では、進学希望者が農業科目との選択で、数学Ⅱ（2、3年次）、論理・表現Ⅰ（2年次）、英コミⅡ（3年次）を履修できるようにした。また、学校設定科目（食と健康、フラワーデザイン、グリーンデザイン、園芸セラピー）も多く設定しており、農業に関する幅広い知識や技能を身に付けることができるようにしている。

(2) 評価

教科主任を中心とした教科指導委員会において、学年及び、類型ごとの学習評価の基準について検討している。各教科会では、観点別評価の評価規準の見直しを行い、適切な評価となるように教科担任間の連携を図っている。また、生徒に対しては、授業についてのアンケートを実施し、授業内容の理解度等を確認している。

2 教務関係実務に関する問題点

校務支援システムの初期設定はかなり複雑であり、研修を受けた教員が転勤となった場合など、引き継ぎ等の時間が十分に確保できない点が今後の課題である。また、エイリスについても年度当初の初期設定が必要であり、採点システムの操作についての質問も増え、教務関係実務の多忙化につながっている。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) 中高連絡協議会の開催

6月中旬に、在校生の出身中学校（学区内）の先生方を対象に中高連絡協議会を開催している。1時間の授業参観の後、高校側から現状の説明（教務課・農業科・1学年主任）、質疑応答を行っている。主に、1年生についての説明であるが、生徒の頑張りを伝えるよい機会となっており、今後も継続したいと考えている。

(2) 農業科で中学生1日体験入学と、年4回の農業体験「エンジョイアグリ」を実施

6月中旬に1日体験入学（園芸クリエイト科）及び、年4回の農業体験「エンジョイアグリ」を実施している。例年100名を超える中学生が参加しており、今後も中学生が興味・関心を持てる内容となるよう充実を図っていききたい。

(3) 普通科見学説明会

本校への受検実績がある中学校の生徒・教員・保護者を対象として、8月上旬に2日間、普通科見学説明会を実施している。在校生が中心となって運営しており、生徒会役員による学校概要の説明、3年生有志による部活動や施設の見学説明を行っている。在校生へのアンケート等を基に、本校の魅力を伝えることで、より身近に本校を感じてもらえる機会となっている。

(4) ホームページの更新を迅速に行い、YouTube動画も活用した情報発信に努めている。

特に、中学生が親しみを持てるような写真が中心となるよう配慮している。

令和 7 年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

本校は、普通科と商業科を有し、各学年とも普通科 5 学級、商業科 2 学級の 7 学級からなる。教育課程の編成においては、各学科の特色を生かすとともに、生徒の希望に弾力的に対応することで学習意欲が向上するように配慮している。学習評価は、各教科・科目ごとに定めており、各学期の学習成績は定期考査のほか適宜行うテスト、提出物、課題、実験・実習の成績、平素の学習状況、出席状況等を総合したものとしている。令和 4 年度入学生からは、観点別評価を導入している。また、生徒による授業評価、生徒・保護者・教職員による学校評価アンケート、学校関係者評価委員会なども活用し、授業の見直しや改善に生かしている。

〈普通科・商業科〉

新教育課程では、更なる高みを目指して、一層特色ある教科・科目を取り入れることにした。学校設定科目を導入する教科は、従来の 4 教科から 6 教科になった。

〈普通科〉

- (1) 教育課程の編成においては、第 1 学年は、履修教科・科目、単位数とも共通であり、第 2 学年以降は、生徒の適性や能力に応じた進路実現を図る目的で文系・理系の 2 類型に分けている。3 年次には更に科目選択数を拡大し、多様な生徒の適性や進路希望などに対応できるように配慮している。

また、(当時の) 新教育課程に対応するために、平成 24 年度から授業時間数を週 1 時間増やして週 33 時間とした。

- (2) 第 2 学年の類型選択に当たっては、学年集会、ホームルーム活動、保護者懇談会などにおいて、生徒だけでなく、保護者にも類型の内容や特色等をよく説明し、十分な理解を得た上で、生徒の適性や能力、学力、希望の進路などに応じた類型を選択させるように配慮している。
- (3) 限られたクラス数でありながら、生徒の進路は多様化しており、類型別クラス編成では対応しきれない現状にある。そのため、選択教科・科目に幅を持たせ、生徒の進路希望に応じて多様な選択が可能となるように配慮している。
- (4) 第 2・3 学年において習熟度別学級編成を実施している。

〈商業科〉

- (1) 教育課程の編成においては、各小学科の特性を生かせるように専門科目で配慮がなされている。

平成 25 年度入学生からは事務科と情報処理科が募集停止となり、代わって情報ビジネス科が設置された。その教育課程についても、生徒の興味や進路希望に応じて専門的な知識や技術を深く身に付けられるようにしている。

- (2) 進学希望者が 80%程度、就職希望者が 20%程度であり、進学にも就職にも対応できる教育課程として、多様な選択科目を設定している。また各種の資格検定取得を目指して学習が系統的、効果的に行われるように留意している。

昨年度は、商業科から全商主催の検定試験全 9 種目 1 級に 1 名（一昨年度は 5 名）の生徒が合格した。（愛媛県内で 7 名が合格）

- (3) 共通教科「情報」は専門科目「情報処理」で、「総合的な探究の時間」は専門科目「課題研究」で代替している。また、平成 16 年度からインターンシップを導入しており、さらに平成 25 年度からは、学校設定科目「キャリアデザイン」を設けて、コミュニケーション能力の向上やビジネスマナーの習得、企業や地域を知り将来の職業や生き方を設計できる力の育成を図っている。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 多様な生徒の進路実現のため選択教科・科目の数を増やした結果、同時開講の増加や使用教室等の指定などから、出張・年休等に伴う時間割変更等が困難になっている。また、学級減に伴って教員定数が大きく減少しており、時間講師の増加もあり、時間割編成上の条件が厳しくなっている。
- (2) 家庭学習時間の少ない生徒が増えてきている。学習に対する目的意識を持たせるとともに課題を効果的に与えて、予習・復習の時間の確保を図る必要がある。
- (3) 特別活動の充実、精選を図りながら授業時間を確保する方策が必要である。

3 入学生確保に向けて工夫していること

- (1) 学校ホームページについて、教員が日替わりで作成担当となり、日々の学校行事や部活動の様子や戦績、生徒の学校生活の状況や進路指導の状況など、毎日更新することで、常に新しい情報を発信している。
- (2) 6 月に中高連絡会、7 月に商業科体験入学（平成 30 年度から普通科も合わせた体験入学を 8 月に実施）、9 月から（昨年度は特色入試導入のため 6 月からとなった）11 月にかけて中学校を訪問しての学校説明会などを行い、生徒と保護者、そして中学校の教員に学校紹介を行っている。その中でも、学校独自の「リーダー養成短期海外研修事業」の紹介は、興味・関心を持たれている。

※中高連絡会、体験入学

令和 2・3 年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止した。

※リーダー養成短期海外研修事業

令和元・2・3・4 年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止した。

- (3) 平成 30 年度から、「商業科体験入学」を変更し、普通科の内容も加えて「今治北高体験入学」にリニューアルした。令和 6 年度は、中学生 586 名、中学校の先生を加えると 613 名が参加し、本校を大いにアピールできた。

※保護者は参加対象としていない。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

以下の点に留意しながら教育課程を編成している。

- (1) 幅広い学力層と多岐にわたる進路希望の生徒に対応した類型ごとの教育課程
- (2) 必履修科目や教科のバランスをとりながら、1年次から3年次まで段階的に学ぶことができる教育課程
- (3) 学校設定科目が適切に設定された教育課程

1年次は国語（現代の国語、言語文化）、数学（数学Ⅰ、数学A）、外国語（英語コミュニケーションⅠ、論理・表現Ⅰ）について習熟度別講座を編成し、少人数授業を行っている。中学時代の不登校や発達障害等の理由で基礎学力が十分身に付いていない生徒もいるが、習熟度の低い講座については授業担当者に加えて教育業務支援員も教室に入り、生徒10数名に対して大人二人の体制で手当てをしている。

2年次からは進路希望等に応じてⅠ型（就職、専門学校希望者）とⅡ型（4年制大学希望者）の二つの類型を選択できるようにしている。Ⅰ型では2・3年次で商業科目と家庭科目を履修できるようにしており、進路希望に応じた実践的な指導を行っている。Ⅱ型では令和5年度に2・3年次の教育課程について見直し、改善を図った。具体的には、理系において、大学受験のことを考えると地理探究を履修することが望ましいと判断し、地歴公民の履修科目の変更を行った。また、文系においても同じ理由で国語と公民に学校設定科目を設けた。

評価については、毎学期末に教務主任から成績の付け方に関する資料を授業担当者に配付する際、観点別学習評価についての説明も付記している。「評価についての共通理解」と題したこの資料は、観点別学習評価と評定を対照するためのものである。Excel等の計算機能を用いて機械的に成績を出すと、例えば観点別学習評価が「B B B」であるのに5段階の評定が「4」であるというようなことが起こる。授業担当者の自己チェック、教務課のチェックも含めて、人間のアナログ作業による手直しは必要である。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 講師の多さと年齢バランスの悪さに起因する諸問題

今年度、授業を担当する教員は17名（伯方分校在籍で大三島分校と兼務している音楽教員、分校長を含む）である。このうち6名が講師（常勤5名、非常勤1名）で、60歳以上が5名いる。いずれもよく動いてくださる方ばかりなのだが、週31時間勤務で金曜日は休みであるとか、学年主任や課長を持ってもらえないとかいう縛りが多い。また、新採教員が毎年のように配置され、担任の経験を積ませたい若い教員が多くいるが、担任の枠は三つしかない。一方で40代、50代の層が薄い。

その結果起こっていることとして、時間割の硬直化、若手教員育成のための人員不足、教諭の多忙化等が挙げられる。分校長や校長とも相談して業務内容を精選することと、教員が疲弊しないような仕事の割り振りを行うことが今後の課題であるが、現実的には非常に難しい。

(2) 事務作業の煩雑さ

入試に関しては、昨年度、校務系メッセージと書類での二重の報告が改善され、ありがたかった。しかし、必要な情報が細目に載っていたり要項に載っていたりと、ばらばらである状態は変わっていない。高校の教務では課長が大変であるし、県外の中学校の先生方が苦勞しておられるだろうことも容易に想像できる。県外中学校で初めて愛媛県の県立学校入試業務に携わる人が、一冊見たら間違いなく作業できるような要項もしくは細目を作成していただきたい。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) 地域資源を活用した教育活動による学校の魅力化

ア 学校のすぐそばの海で行うマリンスポーツ、ボート大会

イ 総合的な探究の時間における大見神楽の調査・研究

ウ 島デザイン部による大山祇神社参道ボランティアガイド

この他にも、「イ」の活動を通してつながりができた島根県立江津高等学校神楽愛好会を招いての伝統芸能共演会は、昨年度で3回目を迎えた。当日は分校生が地元の獅子舞を披露し、大見神楽の研究発表を行った。江津高生は石見神楽を披露してくれた。分校生だけでなく島民の皆様にも好評であった。

(2) 学校説明会の開催、個別相談の受け入れ

2024年度の実績は以下のとおりである。

6月22日（土）に学校説明会を開催

7月27日（土）にオープンスクールを開催

10月26日（土）に福山市生涯学習センターで学校説明会を開催

10月31日（木）に地元の大三島中学校3年生を対象に体験入学を開催

4月から2月の間に個別相談会を計17回実施

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価に在り方

(1) 教務課程編成の工夫・改善について

ア 教育課程全般

本校は、社会の第一線で活躍する専門的職業人の育成を目的とし、地域産業との連携体制の構築、各種取組についての実践的な研究を行い、各小学科における最適な教育課程の編成を目指している。具体的な教育課程編成に対しては、工業高校としての特色を打ち出すために、「ものづくり」教育やインターンシップなどに関係する「課題研究（「総合的な探究の時間」の代替）」の拡充に配慮した編成を行っている。さらに、機械造船科では学校設定科目「いまばり船学」（2単位）、環境化学科では学校設定科目「くらしの生化学」（3単位）を設け、自校学科の特色を打ち出す教育活動を目指している。

イ インターンシップ（就業体験）

2年生の「課題研究」において、1単位相当をまとめ取りでインターンシップに充て、キャリア教育の充実を図っている。本年度は、10月14日（火）から10月17日（金）までの4日間で実施する予定である。事前指導としては、受入れ先企業（昨年度より、生徒の希望により選定）の研究、外部講師によるマナー指導や安全指導などを実施している。また、事後指導のとして、同学科の後輩を対象にした「インターンシップ報告会」と学校行事「学習成果発表会」を実施し、生徒、保護者、受入れ先企業からも高く評価されている。

(2) 学習評価の在り方について

年間学習計画表には評価に関する項目を設け、シラバスには評価の観点や評価方法を掲載し、適切な評価ができるように努めている。また、生徒による授業評価アンケート、保護者・教職員による学校評価アンケートや、5月上旬、11月中旬の公開授業における参観者アンケート等の結果を分析するとともに、学校評議員及び学校関係者評価委員等から助言をいただきながら授業や学習評価の工夫・改善に努めている。

2 教務関係実務に関する問題点

(1) 校務支援システム

本校においては、教務課が校務支援システムの全般を担当しているが、システムの性質上、単独の担当者によって管理・操作・運用を行っている。したがって、システムに関係した業務の引継ぎが難しく、年度移行から年度初めの設定処理、平時の出欠管理、時間割管理、成績管理、生徒情報の管理等をすべて校務支援システムで行う以上、担当者の負担は過酷を極める状況が続いている。一方で、学校全体の教員の業務負担は軽減されている。観点別学習状況の評価に係る設定や変更もあるため、今後も担当者の負担が改善される見通しはない。

(2) 時間割編成・時間割変更

本校では、「実習」、「課題研究」等の授業が多いこと、また、施設・設備を複数学科で共有していることから、時間割編成段階から制約が多い。また、非常勤講師等の時間的制約のある教員や、体調不安による教室の制約がある教員に対する配慮が必要で、時間割変更にも苦慮している。

3 入学生確保に向けて工夫していること

一日体験入学や学校説明会の内容を更に充実させ、入学希望者の増加、不本意入学者の減少を図ってきた。出前授業や地域の文化祭・産業フェア等に携わり、ものづくりに興味を持ってもらえるようPRに努めている。また、学校紹介用リーフレットやホームページ（Instagram、YouTube）にも力点を置き、地域の中학생や保護者に対して本校の活動、特徴を積極的にアピールしてきた。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

本校は全校生徒88名の小規模校でありながら、学力や進路希望の幅が広いため、柔軟な教育課程を編成している。1年次は全員共通の教育課程で、国語・数学・英語での習熟度別授業を実施している。2年次からは進路希望等に応じ、Ⅰ型（就職・専門学校進学志望）とⅡ型（大学進学志望）の2類型に分かれる。Ⅰ型では商業や家庭科などの専門教科・科目の履修や、「音楽探究」、「体育探究」などの選択科目を設けている。Ⅱ型では大学入学共通テストに対応した文理バランスの取れた科目編成とし、遠隔授業を活用することで科目選択の幅を広げている。「総合的な探究の時間」では「仕事を創る」をテーマに、1～3年次を通じてビジネスプラン作成やコンテスト出場を目指し、起業家精神（アントレプレナーシップ）の育成や「7つの力」（思考力・表現力・進路実現力・創造力・課題解決力・企画・運営力・つながる力）の育成を図っている。

学習評価について、各教科・科目で評価規準はシラバスやホームページで周知している。観点別評価の改善にも継続的に取り組んでおり、昨年度より定期考査を年3回に減らし、代わりに単元別テストなどで評価の機会を充実させている。今年度は単元別テスト等の実施時期を明記し、計画的な評価を行うこととしている。

2 教務関係実務に関する問題点

選択科目や習熟度別授業・遠隔授業のために時間割の調整が難しく、理科・社会など一部教科に負担が集中している。特に大学入学共通テストで「情報」が加わったことから、情報科教員の不足が課題となっている。また、家庭学習の習慣が十分に身に付いていない生徒もあり、教員間の連携による学習支援の強化が求められる。

3 入学生確保に向けて工夫していること

入学者確保のため、7月（夏休み中）と11月（文化祭）に生徒主体の体験入学会を開催し、本校への進学検討のきっかけとしている。地域でのプロジェクト活動を通じて学校の魅力を発信し、個別説明会や文化祭でも保護者への広報を実施している。さらに、SNSやホームページ等で積極的に情報を発信している。

また、町からの支援（給食、補助金、ALTなど）を受け、平成30年度からは全国募集も開始した。オンライン説明会や「地域みらい留学」による志願者募集も行っている。さらに昨年度からは町営の「ゆめしま寮」が開寮し、今年度は24名の学区外生徒が生活している。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

- (1) 基礎学力の定着を図るとともに、個に応じた学力の伸長を目的として、基礎学力充実のための科目群を設置すると同時に、生徒の進路希望に応じた学力定着が図れるように科目ごとの指導目標を差異化している。特に、2・3年次において「実践数学」を履修させ、基本的な数理能力が身に付くように配慮している。また、数学において習熟度別講座編成を取り入れている。
- (2) シラバスを本校のホームページに掲載し、生徒が自由に閲覧できるようにした。さらに、シラバスをより簡易にした『科目選択ガイドブック』を全生徒に配布し、各科目に対する正しい理解を促している。10月には生徒・保護者対象の科目選択説明会を実施している。
- (3) 入学生数の減少に伴うクラス数減により、教員定数が削減され、開設科目の精選が急務であり、現在、同時開講科目や進学希望者対象の科目の精選を行っている。
- (4) 生徒対象の授業評価アンケートを1・2学期末に実施している。教員は、その結果を個々の授業改善に生かしている。また、10月の授業公開週間では、教員が空き時間を利用して自由に相互授業参観を行い、授業力向上を図っている。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 同時開講の授業が非常に多いことや近年の教員の定数減に伴い、時間割編成が大変難しく、教員の負担も増大している。
- (2) 年度により生徒の科目選択の傾向に偏りがあり、各教科の開講科目数に差が生じてしまう。そのため、各教科に必要な教員数を確定することが困難で、年度末には苦慮することが多い。生徒が科目選択をする際の意識付けが急務であり、しっかりと進路を見定めた科目選択へと導くための学校全体での取組が今後の大きな課題である。
- (3) 校務支援システムにより、校務の軽減・効率化を図ることができた。しかし、システムを管理・運用している一部の教員に負担が偏っていることが問題点である。

3 入学生確保に向けて工夫していること

- (1) 中学校訪問（6月～12月）
今治地区や松山地区の中学校に案内状を送り、要請があれば担当教員が出向き、対象生徒（希望者・中学3年生・全校生徒等）に学校説明を行う。担当者は、北条高校の教育活動等について、説明を約10～15分、質疑応答を約5～10分程度行う。
- (2) 一日体験入学（8月）
今治地区や松山地区の中学校に案内状とポスターを送って希望者を募り、本校を会場として2日間行う。学校説明及び体験発表15分（会議室：報道部・卒業生）、体験授業25分（各教室：担当教員・担当生徒）、部活動紹介及び見学25分（各活動場所：各部顧問・各部員）を行う。
- (3) その他
本校の吹奏楽部が、近隣中学校と合同練習会や定期演奏会などを実施している。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 特例による教育課程の工夫及び学校設定教科・科目の新設

本校は令和元年度から3年間「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」の指定校として、グローバルな視点を備えて地域課題の解決に貢献できるグローバル人材の育成に取り組んできた。令和4年度からは教育課程特例校の認可を受け、「松山東高グローバル事業」（以下、G L事業という。）として継続している。教育課程特例の本校独自の内容は以下のとおりである。

- ・「情報Ⅰ」（2単位）を1単位に削減（1年生全員）
- ・「保健」（2単位）を1単位に削減（2年生G Lコース選択生）
- ・「総合的な探究の時間」を、学校設定教科「総合」を設け、学校設定科目「明教探究基礎」（1年生）、「明教探究」「G L明教探究」（G Lコース選択生）として実施している。

単位を削減した科目は、「明教探究基礎」や「G L明教探究」の時間に、保健講話を取り入れたり、課題研究の中でのデータ収集やプレゼンテーション作成時において情報デザインの知識を活用したりするなどして、実践的に学ぶことで学習の補完を図っている。

(2) 新教育課程における工夫や問題点とその対応策

令和3年度までの教育課程では、3年次の地理歴史と理科において、教科書を学び終わるのが精一杯で、演習時間が不足するという問題点が指摘されていた。新教育課程では3年間で学ぶ総単位数をこの2教科において増やした。反面、総単位数が減った国語と英語では、これまで授業時間中に行っていた漢字テストを朝のSHRの時間を利用して行うなどの工夫をしている。本校は伝統的にSHRを生徒が主体的に運営しており、SHRで、小テストなどを実施していなかったが、国語の履修単位数減による基礎的な国語力の土台作りに危機感を抱いた国語科からの提案で、SHRで漢字テストを実施することになった。賛否両論はあるが、国語力は全ての教科の学習の根幹であり、該当の教科だけで対応するのではなく、学校全体として取り組む必要があるということで一定の理解を得て、令和4年度からスタートさせた。また昨年度から、文系の数学において、進路実現を最優先に考え、数学Cは1単元のみの学習とし、2年で数学Cを1単位実施することとした。

2 教務関係実務に関する問題点について

(1) 時間割編成と実施上の課題

多岐にわたる選択科目、複教科目の同時開講、習熟度別講座編成への対応、通信制課程（火曜スクーリング時）の時間割との調整、非常勤講師の先生方の勤務日等、時間割編成や変更の際に配慮すべき事柄が非常に多い。

(2) 校務支援システム担当者の負担

成績や出欠の入力、調査書や指導要録などのデータを校務支援システムで一元化して処理するようになって、各担任や教科担当の負担は一部削減されたが、様々なトラブルに対応する担当者の負担は増大している。

3 入学生確保に向けて工夫していること

7月後半の高校見学説明会では、生徒会と放送部が主体となって運営し、学校紹介プレゼンテーションや校内見学を実施している。説明会自体は30分程度であるが、訪れた中学生や保護者の感想を見ると、「生徒が主体的に活動する学校」という本校の特長の一つを直に感じられる機会になっていることが伺われる。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程編成の工夫・改善

ア 普通科

- 1 年次 …全8クラスを均等クラスとする。
 …「化学基礎」、「地学基礎」を履修する（各2単位）。
 2、3 年次 …文型、理型各4クラスとする（A B B B 習熟度別クラス編成）。
 3 年次（文型）…「地理探究」、「倫理」、「政治・経済」より1科目履修させ、地歴2科目の選択も可能とする。
 …学校設定科目「生物探究」を履修するとともに「化学探究」、「地学探究」より1科目（各2単位）選択する。
 …学校設定科目「数学探究B」、「音楽Ⅲ」、「美術Ⅲ」、「書道Ⅲ」より1科目（3単位）を選択する。

学校設定科目「STEAM探究」

…データ利活用型課題研究に取り組み、課題発見・解決能力を備えた新しい価値を創生する人材に成長することを目指す。

イ 理数科

学校設定科目「スーパーサイエンス」

…観察・実験を重視した課題研究に取り組み、外国人研究員の指導を受けながら英語プレゼンテーションにも挑戦する。科学的国際性を養い、ハイレベル科学技術人材に成長することを目指す。

(2) 学習評価の在り方

3 観点についてそれぞれ100点法により、A、B、Cの評価を行い、これらを総括して評点を算出する。評定は、評点と観点別評価を基に決定する。

授業評価の結果を教科会で分析・検討し、授業改善に役立てるとともに、学習評価の在り方や観点別評価を意識した課題、考査問題の作成を行うよう各教科に促している。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 個別最適化の指導を行うため、習熟度別授業の開講数を増やして実施している。効果的な反面、時間割作成・変更の困難さ、教員の過重負担や教室の確保が問題となっている。
- (2) 校務系担当者の負担を軽減したくても、どうしても一人が主担当にならざるを得ず、主担当者の負担軽減や業務の引継ぎが難しい。

3 入学生確保に向けて工夫していること

- (1) 生徒会中心の学校見学会運営及び体験授業の実施を通し、本校の魅力をアピール。
- (2) コンテスト等でレベルの高い課題研究を発表し、未来創造型人材の育成実績をアピール。
- (3) 「オール松山南」体制の芸術文化発表会を通して、豊かな人間性の育成実績をアピール。

令和 7 年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程の編成の工夫・改善

令和 7 年度からゲームクリエーションコースを新設し、教育課程を大幅に変更した。1 年次は全生徒がゲームやデザインの基礎を平たく学び、それぞれの適性を見極めたうえ、2 年次からデザインコースとゲームクリエーションコースを選択できるようにしている。デザインコースでは進路希望等に応じて、更に 3 つ領域に分かれて学習する。ゲームクリエーションコースでは、工業（情報）系の大学進学も視野に入れ、プログラミング技術やソフトウェア技術といった科目を開講することにした。また、昨年度までは「工業情報数理」で「情報Ⅰ」を代替していたが、今年度からは「情報Ⅰ」を開講、更に、再来年度には「情報Ⅱ」を開講することになっている。多くの実技科目で、少人数指導やティームティーチングを実施し、個に応じたきめ細やかな指導を行っている。

工業科の学校設定科目として「デザイン探究Ⅰ～Ⅲ」を設け、デザインの基礎的な内容から発展的な内容まで、継続した学習ができるようにしている。また、「ゲームデザインⅠ～Ⅲ」を開講し、ゲームクリエーションコースにおいて、ゲーム作りのための基礎的な内容から発展的な内容までを継続して学習できるようにしている。1 年次の「工業技術基礎」においては「陶芸」のワークショップを、デザインコースのやきもの工芸デザイン領域では砥部焼を基盤として広い視野でやきものを学び、地域の特色を生かした授業を行っている。

「総合的な探究の時間」のうち、1 単位を 2 年次に地域の課題解決型学習とインターンシップとして実施している。2 単位は 3 年次の「課題研究」で代替している。総探の時間に探究した内容が、3 年次の進路決定時に有益なものとなるよう研究を進めたい。

(2) 学習評価の在り方について

学習評価については、観点別学習状況の評価を総括し、学期ごとに評点を算出している。その際、観点ごとの点数の平均を学期末の評点としている。学年末においては、各学期の観点別評価を総括し、評点を算出する。その際、学年末の観点ごとの点数の平均を学年末の評点にしている。「主体的に学習に向かう態度」については、授業実施後の感想等から見とることが多いが、その際にコメントやアドバイス等を返すことによって、生徒の学習意欲や、学びを調整する力の向上を図る工夫をしている。

2 教務関係実務に関する問題点

本校は他校と兼務している非常勤講師が多く、また、多くの科目でティームティーチングを取り入れているため、時間割編成の際に特定の教員に負担がかかり、バランスの取れた時間割を組むことが難しい。すべての曜日に他校と兼務している非常勤講師の授業が入るため、年間の授業の偏りを修正するための曜日を入れ替える対応はほぼ不可能である。出張に伴う時間割変更についても、選択科目の多さから非常に困難となっている。大学受験を希望する生徒には放課後及び長期休業中に進学補習を行っているが、国語科、数学科

の教員が1名ずつであること、また理科、社会科、情報科については非常勤講師のみのため、十分対応できているとはいえない。長期休業中の進学補習を、総合教育センターと連携した遠隔授業（令和7年度、協力校として指定されている）で実施できないか模索中である。

本校は学級数が少ない故、教員数も十分ではない。通常の業務に加え、学校振興計画による様々な事業を行うにあたって、一人一人の負担が増加している。入試業務においても、特色入試を導入かつ募集定員を倍増、全国募集の開始により、受検生の数が激増したが、最低限の人員で運営しているため、一人でも欠けると立ち行かなくなることも想定され、外部から応援に来てもらわないと業務をこなすことが困難な状況にある。

3 入学生確保に向けて工夫していること

中学生を対象に、体験入学（全4回）の他、「実技講習会」（2回）「CG・プログラミング教室」（2回）「陶芸教室」（3回）を実施している。体験入学では、素描やゲームクリエーションなど、5つのコースに分かれた実習の他、施設見学や在校生との座談会も行っている。並行して、教員・保護者・砥部町との懇談会も実施しており、特に砥部町担当者からの教育寮の説明は、県外生や県内遠隔地の生徒に対して有効であった。

また、デザイン科教員が、中学校出張説明会（中予地区）を実施し、希望者に対して、学校や在校生の作品の紹介をしている。また、中学生持参作品の講評も行っている。

昨年度から全国募集を開始し、地域みらい留学の参画校として東京フェス、大阪フェスへの参加、オンライン説明会の実施等を行っている。オンライン説明会には、県外の中学生のみならず、東南予の中学生の参加も見られた。また県のバスツアーも好評で、たくさんの参加があり、入学生の獲得につながっていると思われる。

その他、広報活動として、日常の教育活動をSNSで頻回に発信している。文化祭ではポスター、卒業制作展ではポスター及びダイレクトメールを制作し、中学校や関連施設に送付している。また、文化祭・卒業制作展を公開し、デザイン科ならではの高い品質の作品や活動を広く知っていただく機会にしている。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 類型について

1年次は全員同じ類型であるが、2年次からⅠ型（文系）とⅡ型（理系）の2つの類型を設けている。さらに、3年次は、Ⅰ型（文系）をⅠ－A型（国公立文系コース）とⅠ－B型（文系特化コース）に分けている。

(2) 学習習熟度別学級編成について

2・3年次には、類型別に習熟度別学級編成を実施し、生徒の学習意欲と学習効果を高めるよう工夫している。3年次の理系の数学では2クラスを進路希望と習熟度による3講座に編成することで、生徒の理解度に応じた授業を行っている。

(3) 各教科・科目の単位数、履修時期について

ア 授業時数の確保の観点から週当たりの授業時数を34単位時間としている。

イ 基礎学力の定着と学習意欲を高めるため、必修科目のほとんどを1、2年次に履修させ、3年次に進路実現に必要な科目を重点的に学習できるようにしている。また、演習中心の学習が必要な教科については、学校設定科目を設けて対応している。

ウ 文系生徒にも、看護系の進路希望に対応するため、3年次に学校設定科目「探究地学」と「探究化学」を開講し、選択履修できるようにしている。

エ 地理歴史では、Ⅰ型（文系）において、1年次に「総合」（2単位）、2・3年次に「探究」（5単位）を履修した後、グローバルな課題解決能力を目指し研究する学校設定科目「研究」（2単位）を設定した。「探究」科目は国際社会の一員としての資質を十分に身に付けさせるため2単位増で実施し、さらに「研究」科目において、身に付けた知識を土台として生徒一人一人が主体的に思考を深め、表現できる能力を育めるよう工夫した。

オ 3年次には各コースともに、学校設定科目「情報探究」（1単位）を設置し、生徒の進路希望に応じて発展的に学習できるように編成した。その際の学習のつながりを考慮し、「情報Ⅰ」を2年次に履修することとした。

(4) 学習評価の在り方について

各教科の年間学習指導表やシラバスに評価の観点を記載している。3観点から評価規準に従って評価をしていくが、細かな方法は教科ごとに検討して行う。全ての学年が新学習指導要領での学習評価となって2年目を迎えたが、これまで研究し、実施してきた観点別評価の手順等を基に、全ての教科・科目において適正な評価規準を作成し、更に研究に力を入れていく。

2 教務関係実務に関する問題点について

(1) 教育課程上の問題について

特定の期間にまとめ取りを行う科目を設けているが、該當時期に集中して欠席した生徒への対処の仕方を明確にしなければならない。

(2) 校務支援システムについて

成績処理や成績・出欠一覧表、通知票の作成を校務支援システムで行っており、業務の効率化が図られている一方で、未だに円滑に業務を進めることができない教員が多く、教務課担当者に業務が集中する点が課題である。

3 入学生徒確保に向けて工夫していること

(1) 高校説明会の実施

昨年度は7月24日から26日の3日間、高校説明会を実施した。中学3年生が約1,200名、保護者が約600名参加した。内容は、生徒会が作成する動画の視聴と部活動の見学が主となっている。動画視聴の教室運営や案内等は生徒会やボランティアの生徒が行い、休憩室を兼ねて質問ブースも設けた。生徒が前面に出て、中学生と直接コミュニケーションができるようにしている。

(2) ホームページによる情報発信

ホームページを見やすく、利用しやすいトップ画面に改善するとともに、保護者向けのコーナーや新聞掲載記事コーナーを設け、タイムリーな学校紹介に努めている。「部活動日記」を開設し、日々の学校の様子や部活動の結果等を発することで、多くのアクセス数を保っている。

令和 7 年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程編成の工夫・改善について

ア 全校生徒 72 名の小規模校である。1 学年 1 クラスのため学力差のある生徒や進路希望の異なる生徒が同じクラスにいる。また、中学校で不登校であった生徒や学び直しが必要な生徒も多い。そのため、習熟度別学習や共通科目と専門科目(家庭、商業)との選択科目を設置して、多様な生徒の学力や進路希望に対応できるようにしている。

イ 英語(1～3 年)では習熟度別講座編成をして、生徒一人一人の習熟度に応じたきめ細かい指導と資格取得を目指している。1 年生の授業を中心に教育業務支援員を配置するなど、分かりやすい授業と生徒の学習意欲の向上に努めている。

ウ 総合的な探究の時間については、1 年生は学年で、2、3 年生は二つの研究テーマから選択してグループで様々な企画や体験活動を行う中で、生徒の地域への理解と興味が高められるようにしている。

(2) 学習評価の在り方について

ア 各教科・科目のシラバスに学習の方法や評価の観点を明示し、年度初めの授業で配付している。保護者に対しては、入学予定者説明会や P T A 保護者懇談会等で資料を配付して教育課程や評価について説明している。評定は、年度末に観点の組合せを総括して以下のように算出する。

観点別評価	A A A A A B	A B B A A C	B B B A B C B B C A C C	B C C	C C C
評定	5	4	3	2	1

イ 全ての科目において生徒による授業評価を実施し、評価結果を踏まえた授業改善に努めている。また、生徒による自己評価も実施している。

ウ 総合的な探究の時間は、学年を超えたグループ分けの過渡期であるため、評価についてまだ手探りの段階である。

2 教務関係実務に関する問題点

(1) 教職員数が少ないことから、校務分掌の負担が大きい。校務支援システムから学校魅力化推進、図書館も教務課が担当しており、負担感が増している。

(2) 不登校傾向の生徒や特別な支援の必要な生徒について配慮すべき点が多いため、個別の対応に非常に時間がかかる。一方で、進学希望者の学力定着のための補習や個別指導にも時間が必要である。しかし、ほとんどの生徒と教職員が船舶で通っているため船の時間の制約があり、時間のやりくりが難しい。

(3) 外国語以外は教科の教員 1 名体制で、出張や年休への対応や年度替わりの引継ぎが難しい。

(4) 分校かつ離島であることから、文書の決裁に時間がかかる。締切に近い文書への対応が非常に厳しい。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) 中学生やその保護者に対する情報発信・情報交換

- ア 分校通信「赤嵐・青涛」発行（毎月1日に発行）
生徒の出身中学校等34校へ送付、その他学校関係者や地域の方々へも配布
- イ 視覚に訴える学校案内の作成
- ウ 中島分校のホームページ、Instagram等による情報発信
- エ ICTを活用した情報発信（地域活性化へ向けた取組）
360°カメラで撮影したVR動画をホームページ上にアップ、動画にリンク
できる観光マップを作成して港に設置
- オ 松山市内外の中学校への訪問（中学校の教職員対象）
校長、分校長、教務課長が松山市内の中学校を訪問し、学校の魅力を紹介
- カ 公民館での学校説明会の実施
7月に10か所、11月に5か所で中学生とその保護者を対象とした説明会を実施
- キ 中学校等における進路説明会への参加
- ク オープンスクールの開催
- ケ 中学生、保護者を対象に高校見学説明会の開催
希望者を随時受け入れ、学校説明と校内見学を実施
- コ 本校とともに中高連絡協議会の開催

(2) 地域の特色を生かした、特色ある学校づくり

- ア 芝生・校内作業
毎月1回程度、芝生のグラウンドを生徒と教職員で手入れ実施
- イ ボランティア活動等の参加
 - ・中島こども園や中島みらいクラブでの保育ボランティア
 - ・トライアスロン中島大会関連のボランティア
 - ・柑橘収穫アルバイト
 - ・中島文化財サイクリングツアーなど

(3) 同窓会、後援会、地域等との緊密な連携

- ア 振興対策協議会
中島分校存続を目的に、後援会長を中心としてそれぞれの立場から意見交換
- イ 松山市からの支援
 - ・「中島分校通学者支援補助金制度」があり、フェリー通学生には定期券購入代金の8割を補助
 - ・1食250円で給食の提供
- ウ 全国募集
全国募集を実施しているが、学校の寮がないため、県外からの入学生に対して後援会を中心に島内で下宿を探し、学校からは松山市に住居費の補助を申請している。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価のあり方

(1) 教育課程編成の工夫・改善について

ア コースと選択科目

本校は、「英語系コース」「人文系コース」「医療看護系コース」「理数系コース」の4つのコースを設置して、2年次より選択できるようになっている。近隣の普通科高校には見られないこのコース設置は、本校の大きな特徴となっている。2年次におけるコース選択は、生徒の進路希望とも大きな関連性があるため、各コースの教育課程もそれぞれの特性を生かし、生徒の希望する学びに対応できるよう編成されている。

「英語系コース」では、2年次に「ディベート・ディスカッションⅠ」、3年次に「総合英語Ⅰ」「エッセイライティングⅠ」「時事英語（学校設定科目）」を開設している。

「医療看護系コース」では、大学・専門学校の入学試験や進学後に求められる学力を考慮し、国語や理科を深く学ぶ機会を設定している。「人文系コース」「理数系コース」においても、生徒の進路希望や学びにおける興味・関心に応えられるよう教育課程が編成されている。

また、各コースの教育課程や各コース独自の行事等を踏まえてコース選択するため、共通科目を学ぶ1年生の間に各コースの特徴を理解する機会が複数回設けられている。

イ 習熟度別クラス編成

令和6年度より、2・3年生で「人文系コース」4クラスをABBB、「理数系コース」3クラスをABBとするクラス編成を行っている。なお、3年生の「人文系コース」では、Ⅴ型（主に国公立文系進学者）とⅢ型（主に私立大学文系進学者）に分かれるが、習熟度が高いクラスはⅤ型のみ、標準3クラスでⅤ型とⅢ型の混成クラスとなっている。令和2年度入学生より始まった習熟度別クラス編成は、生徒の進路実現に大きな効果があったが、生徒が生き生きとした学校生活を送り、意欲的に進路実現に向かっていけるようにするための適切なクラス編成を今後も工夫し続けなければならない。

(2) 学習評価のあり方

ア 観点別学習状況評価

令和4年度入学生より始まった新しい学習評価については、今年度4年目となり全学年における実践の4年目となっている。シラバスとともに、教科・科目としての評価規準、単元別の評価規準を生徒に明示することで、生徒自身が何をすべきか理解した上で、学習に取り組める仕組みが定着しつつある。教員側も観点別学習状況評価をしながら授業方法の改善につなげるようにしている。

イ 評定への総括について

評定については、観点別学習状況評価（A, B, C）の組み合わせを優先し、そこに評点による総括を考慮する形で評定を算出することとしている。評価方法、評価の算出方法については、協議を重ねて構築されてきているので大きな問題はないが、成績処理が煩雑になり、教科担当者も教務の成績処理担当者も対応に時間が多くとられている。今後も評定の算出方法については、生徒の学習状況を可能な限り反映できるよう検証と工夫を重ねていきたい。

2 教務関係実務に関する諸問題について

(1) 時間割編成・変更

生徒の学習状況や学びの多様性に対応するため、習熟度別講座編成や選択科目による複数クラスの同時開講を実施する授業が多く、年度当初の時間割編成や年休・出張等に伴う時間割変更・使用教室の調整等が困難である。

(2) 校務支援システムに関する教務負担

校務支援システムの導入により、担任の業務負担が軽減された部分が多分にある。一方で、年度当初のマスタの管理設定、生徒の履修登録、毎週の時間割変更等、教務課のシステム管理担当者への負担は極めて大きい。また、学期末や年度末の出欠処理や成績処理等で教科担当者、クラス担任等の入力ミスや事後変更などがあった場合、処理対応に時間がとられ大きな負担につながっている。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) 校内見学会の実施

7月末に中学生とその保護者を対象に3日間の日程で実施している。当日の運営を2年生が担当し、本校の魅力や現状を生徒自身が伝えることにより、中学生が親近感を持ちやすく、気軽に質問しやすい雰囲気で行っている。

(2) 中学校における進路説明会への参加

参加依頼のあった中学校に管理職1名と教務担当1名の2名で参加している。学校独自のコース制や特徴的な学校行事、部活動の様子などの紹介や、卒業生の進路など中学生が知りたい情報をプレゼンテーションソフトでまとめ、提示している。

(3) ホームページでの情報発信

休校日を除き、日替わりの担当者がホームページを更新している。学校行事の様子や部活動の結果など、中学生が進学先を考える際に参考となりそうな内容を多く含めるよう工夫に努めている。

令和 7 年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 幅広い進路実現に対応した教育課程編成

本校卒業生の進路状況は、全体では 60%前後が就職、40%前後が進学である。ただ、各小学科間でその比率は大きく異なる（例：情報電子科・建築科は進学が 60～70%、機械科・電気科・工業化学科は就職が 80%）そのため、2 年次から選択科目を設け、個々の進路希望に応じて履修できるようにしたり、2 年次から類型を分けて履修する科目に変化を持たせるなどして、生徒の幅広い進路希望に対応できるようにしている。

(2) 習熟度別授業の実施

情報電子科 2 年生において数学Ⅱ（それぞれ 1 クラスを 2 グループに分けて）の習熟度別授業を実施している。定期考査はすべて共通問題を用いて実施し、考査の成績等を基に年 4 回編成を替えている。

(3) 本校の学習評価について

3 観点評価の導入 4 年目となる本年度は、これまでの反省を生かし、年度始めから教務規定を改定し、より一層、系統的な学習評価が実現するように努めている。また、これまで 3 年間の運用実態を明らかにし、その課題を整理し、研究を進めている。すでに生徒・教員にアンケートを実施しており、このアンケートの回答を分析し、各観点が本来意図する、学びと育成を促進する評価方法のあり方を探っていく。

2 教務関係実務に関する問題点

昨年度から、教務課内に「教務 G」「広報 G」「ICT-G」のグループ制を開始した。それ以前と比べ、教務課内での役割分担は明確になり、より一層組織的な対応ができるようになった。また、ICT や AI の活用にも挑戦しながら、業務の質の改善と課員の負担軽減を図っている。しかし、事務仕事に掛かる時間は依然多く、業務の均等化、スリム化を意識して実行する必要があると感じている。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) 体験入学等

オープンスクール 1 日、体験入学 3 日の計 4 日間、中学生を招いて本校を紹介する機会を作っている。オープンスクールは、8 学科を 4 学科ずつ 2 つのコースに分けて、希望したコースの見学を行う。体験入学は、希望する 1 つの学科に参加し、半日かけてものづくり体験を実施している。

(2) 中学校訪問

昨年度は計 35 校を訪問し、中学校の生徒・保護者・教員に対してアピールした。

(3) 情報発信

テレビやラジオへ積極的に出演し、本校の魅力をわかりやすい形で伝えるよう努力している。学校ホームページ、ブログ、YouTube 等で本校の特色や日常について情報発信を行ってきたが、今年度からは新たに Instagram も開始した。学校紹介リーフレットも、今年度全面的に刷新した。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

本校は商業科の専門高校であり、商業科・流通経済科・地域ビジネス科・情報ビジネス科の四つの小学科（各学年9クラス）が設置されている。高等学校学習指導要領及び本校の教育目標に従い、各小学科や類型において特色ある教育課程の編成に努めるとともに、生徒の幅広い学力や多様な進路希望に対応するため、習熟度別学習や選択科目、学校設定科目を設定し、生徒の実態に即した学習指導の実現を図っている。

(1) 各学科の特色を生かした商業教育の推進

ア 「商業科」は、ほとんどの生徒が4年制大学・短期大学等への進学を希望している。簿記会計関係科目の履修に重点を置き、商業科目の基礎・基本を習得させるとともに、普通科目の充実も図り、生徒の進路希望に対応している。また、3年次には習熟度別学級編成を行い、国公立大学の受験指導など多様な進学希望に対応している。

イ 「流通経済科」は、商品の仕入れ、販売の流れや仕組みをはじめ、事務や流通の仕事並びに企業の経営活動に役立つ知識や技術を習得させ、流通分野の指導的役割を担う人材の育成を目指している。2年次の「マーケティング」や「ビジネスマネジメント」で理論を学習するとともに、ビジネス実習により実際の・体験的学習ができるよう工夫している。

ウ 「地域ビジネス科」は、平成29年度に設置され、産官学の連携のもと、学校内外の様々なフィールドで、実践的・体験的要素を多く取り入れた学習を行い、地域を愛し、地域に生き、地域のリーダーとなる人材の育成を目指している。特に、学校設定科目「松山学Ⅰ」「松山学Ⅱ」「松山学Ⅲ」においては、松山ロープウェー商店街、道後商店街、道後温泉周辺の施設等、様々な場所でフィールドワークを実施している。さらに、大学や専門学校等と連携した活動を行い高度な専門知識に触れるなど、獲得した知識や技能を適切に活用する力を育成している。

エ 「情報ビジネス科」は、情報活用能力の育成に主眼を置き、コンピュータを活用するための知識や技能を身に付け、多様化したビジネスの諸活動において指導的役割を担う人材の育成を目指している。経営情報関係科目を重視する教育課程を編成し、2年次から二つの類型に分けて多種目1級や高度資格取得を目指すなど、生徒の多様化する進路希望に対応した取組を行っている。

(2) 新学習指導要領に対応した観点別評価導入のため、教科会等で研修・検討を行った。なお、本校では、シラバスと年間指導計画表の中に観点別評価の欄を設けており、シラバスについてはホームページで公開している。

2 教務関係実務に関する問題点

(1) 校務支援システムを新年度に円滑に運用するためには、準備に莫大な時間が必要である。新年度の準備と並行して校務支援システムを運用するにはどのような協力体制を構築すべきか検討している。

また、本校では中学生への学校PRを教務課が担当している。そのため、中学校での説明会への参加、本校での説明会の開催などの膨大な業務をいかにこなすかに翻弄され、松山商業の魅力を中学生や地域に十分にアピールすることができていないのが現状である。

(2) 同時開講の講座で教室を固定した授業、連続授業、習熟度別授業等の制約が多く、また、講師等の勤務制限等により時間割編成に苦慮している。

教務課全員で時間割変更を担当しているが、出張者や本校会場の研究会等が非常に多いため、変更は困難を極め、変更担当者にとって多大な負担となっている。

(3) 学校行事や祝祭日等により、曜日間で授業実施時数に差が生じるため、年度当初に計画を立て曜日の振替を適宜行うようにしているが、今後とも学校行事等の精選が必要である。

3 入学生確保に向けて工夫していること

- (1) 例年 10 月中旬に本校主催の「中高連絡会」を開催している。まずは中学校の先生に本校の特徴を理解してもらうことを念頭に、各課から本校の概要説明等を行っている。特に、本校の小学科の特徴や専門高校独自の進学方法等について、普通科高校との違いを説明している。
- (2) 例年 8 月下旬に中学 3 年生を対象に「学校説明会」を三日間実施している。全体説明の後、中学生には小学科別の座談会に参加してもらい、本校生徒と直接交流してもらっている。保護者・引率教員には進路説明会に参加してもらい、本校生徒の卒業後の進路を詳細に説明している。
- (3) 6 月～11 月にかけて約 40 の中学校で開催される「進路説明会」には教務課員や小学科長で分担し、可能な限り参加している。15 分程度の割当て時間であるが、小学科の特徴等、本校の特色が効果的に伝えられるプレゼンテーションを心掛けている。また、本校の概要を説明したパンフレット「松商ガイド」を配布している。
- (4) 10 月中旬に「地域ビジネス科」独自の学科説明会を予定している。同科の魅力が直接入学希望者やその保護者に伝わるよう「1000 日実習」や地域内外の諸団体との連携協働活動を在校生徒自らが発表している。
- (5) ホームページに「本校で学びたい方へ」のコーナーを設け「松商ガイド」を掲載している。また「学校説明会」「入学案内」に関する情報もホームページに掲載している。
一昨年度から、学校紹介動画をトップページに掲載し、学校説明会に参加できなかった中学生にも本校の様子が分かるようにしている。
- (6) 昨年度シン・松商魅力化プロジェクトを立ち上げ、制服や体操服の変更の検討を行った。また、松山商業高校での学びを中学校の生徒に伝えるために、松商簿記塾を月 1 回行った。日商簿記初級の講座であったが、簿記を学んだ中学生に好評だった。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程編成の工夫・改善について

本校生の実態に即した特色のある教育を実現するために、普通科5類型（理数、人文Ⅰ、人文Ⅱ、生活文化、スポーツ健康）、1コース（ライフ・サポートコース）、商業科では、2コース（ビジネスコース、マネジメントコース）を設けている。普通科では、これらの類型・コースを生かし、生徒の進路希望に対応するための学校設定科目を設け、教育課程を編成している。商業科においては、2年次にビジネスコースでビジネス・コミュニケーション、マネジメントコースではグローバル経済、3年次にはビジネスコースでビジネス法規を履修するようにしている。また、マネジメントコースでは、高校で学んだことを大学等で生かすことを目的に、ビジネス・マネジメントを履修できるよう工夫した。

(2) 学習評価の在り方について

ア 観点別学習評価の総括について

年度当初に定めた教科、科目の内容や目標に照らし、各観点の達成状況を100点法の評価値で数値化し、観点別学習状況の評価をA・B・Cの3段階で総括している。基準は年度初めに設定し、その基準は以下の表1が基本であるが、各科目の目標や科目の特性等を考慮し、科目、観点ごとに基準を設定してもよいことにしている。学期末及び学年末の各教科・科目の評点は、3観点で、あらかじめ定めた比重で算出し評価する。3観点の比重は1：1：1を基本とし、各科目の特性等を考慮して科目ごとに変更してもよいが、その際は、4：3：3（3：4：3／3：3：4）までを許容としている。なお、各学科・類型の評点平均は60点以上を目標としている。

イ 5段階評定への総括について

<表1>

学年末に、各学期の評点の平均値から、表2にしたがって5段階評定へ総括する。100点法による評点基準と観点別評価が一致しない場合は観点別評価を優先する。

評価	学習の状況	評点
A	「十分満足できる」状況と判断されるもの	100 ～70
B	「おおむね満足できる」状況と判断されるもの	69 ～35
C	「努力を要する」状況と判断されるもの	34 ～0

ウ C評価の扱いについて

各学期末において、観点別学習状況の評価がCであった場合は、学習内容や指導方法の工夫・改善を行い、評価改善に努めるよう共通理解を図っている。

<表2>

評点	観 点 別 評 価	評 定
100～75	A A A A A B	5
74～60	A A B A B B B B B	4
59～40	A B B B B B B B C	3
39～30	B B C B C C	2
29～ 0	C C C	1

エ 校内学習到達度テストについて

従来の定期考査を「校内学習到達度テスト」として実施し、学習評価における位置づけを、単元テストや小テストと同じにしている。実施回数は年4回とし、テスト結果は観点別評価に反映させている。また、校内学習到達度テストに対する生徒の学習意欲を喚起するために、全ての回毎に個人成績票を作成している。

オ 学習意欲向上のための工夫について

本校の生徒は、基礎学力の定着が不十分な生徒が多く、入学当初から高校の授業についていけず、学習意欲を低下させることが多い。そこで、全クラスに「スタディ・サプリ」を導入し、「学び直し」の機会を設けている。基礎から学ばせることで学習に対する抵抗感を和らげ、高校での学習に対する意欲を向上させるように努めている。

2 教務関係実務に関する問題点

(1) 学力検査について

学力検査の実施に伴う業務が勤務時間外に及ぶことが多い。特に学力検査当日では、採点業務が夜遅くまでかかり、教務課員の負担は大きい。入試日程と卒業証書授与式の重複も避けたいところである。今年度から入試の出願手続等のデジタル化が導入される。これを機に、入試日程等の見直しや自動採点システムの補助的な導入など、大幅な改善を期待したい。

(2) 自動採点システムについて

このシステムにより、採点業務の大幅な負担が軽減されている。しかし、採点ミスによるトラブルも生じている。システムを過信せず、あくまでも補助的な役割として認識したうえでの利用を促したい。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) 学校見学会（授業・部活動体験会）

中学生対象の学校見学会（授業・部活動体験会）を7月下旬と8月下旬に実施している。

(2) 学校案内

来年度からの新学科への移行に向けて、本校の魅力を伝えるために、従来の学校案内を全面的に変更した。また、新しいキャッチフレーズや学校公式キャラクターを設けて、より分かりやすく、充実した学校案内を作成している。

(3) 総合学科準備室の設置

昨年度設置した魅力推進課を発展させ、「総合学科準備室」として設置し直した。広報活動の充実化を図るとともに、今年度は新学科の説明会を、地域の公民館等で行う予定である。

(4) 公式Instagram

本校の公式Instagramを開設し、学校行事や部活動等における生徒の活動の様子を随時配信している。

(5) 地域との交流活動

東温市唯一の高等学校として、地域の行事等に積極的に参加している。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程編成の工夫・改善について

ア 普通科

2年次からコース選択を行っている。総合実学コースは、体育・音楽・家庭・商業などの実技、実習を中心とする科目を多く取り入れており、生徒の資格取得や検定合格などに挑戦しやすく、多様な進路希望にも対応できるようにしている。総合文理コースは総合実学コースより1単位多くすることで、大学入試にも対応できるようにしている。

イ 農業科（森林環境科）

進路希望が就職や国公立大学進学など幅広いため、進路実現ができるよう、農業科目と国語・数学・英語などの教科を選択できるようにしている。普通科との共通選択科目を導入することで、体育・家庭・芸術などの科目選択が可能となり、進路選択の幅が広がるように工夫している。また、専門科目においては、全員が履修する科目を増やすことで、農林業系の進学率の向上や就職者数の増加を期待している。

(2) 学習評価の在り方

シラバスに評価の観点・評価規準・方法を明示し、それに沿った評価を行っている。また、授業評価アンケートによる生徒の自己評価や教員への評価を学校全体で検討することで、授業改善に生かしている。新学習指導要領における評価の在り方については、評点を基に総括することとしている。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 電子黒板や空調設備など、設備が整っている教室とそうでない教室の差が激しい。また、給食専用の教室が2室あり、選択科目によっては、教室の確保やICTを利用した授業の実施が難しくなっている。
- (2) 2年連続で公共交通機関（バス）のダイヤが変更となり、時程の変更が続いた。休憩時間が5分に短縮する部分が増え、生徒のゆとりがなくなっている。

3 入学生確保に向けて工夫していること

- (1) 本校では、普通科、森林環境科とも全国募集を実施している。また、久万高原町内の中学校からも多くの生徒が入学している。ホームページだけでなく、オープンスクール、オンライン説明会、地元中学校との連携を通して、次のような情報を発信している。
 - ・ 海外研修補助（9割）、通学補助（7割）、資格・検定料補助（5割）などの久万高原町からの支援制度
 - ・ 少人数指導のメリットを生かした学習指導
 - ・ 地域との交流活動（町内の小中学校や幼稚園など）
- (2) 森林環境科では、商品開発や環境保全活動を通して、本校生が地域と一体となった活動に取り組んでいることを紹介している。
- (3) 総合的な探究の時間「くまたん」を活用した人材育成や特色のある魅力的なカリキュラムの構築を進めている。有志生徒によるチーム「きらくま」などでも地域と連携して活動している。
- (4) 昨年7月、Instagram本校公式アカウントを開設した。令和7年4月現在、フォロワーは780人を越え、在校生や卒業生、地域住民や県外の方にも多く閲覧されている。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程編成の工夫・改善点

各教科・学科において教育課程について常時検討を行うとともに、年3回開催する教科指導委員会を通じて、問題点や改善すべき点を協議し、本校生徒の実態に即した教育課程が編成できるように努めている。本校教育課程編成における工夫・改善点は以下のとおりである。

ア 教育課程編成の趣旨

令和4年度以降入学生教育課程編成において、「社会で求められる資質・能力を育む」、「時代の進展に対応したより高い専門性の探究」及び「生涯にわたって能動的に学び続けることができる力の育成」を目指して、教科・科目等の構成を見直した。

イ 1年次に「進路探求」を設定

「総合的な探究の時間」として1年次に「進路探求」を1単位設定している。これは、できるだけ早い時期に自らが所属する学科における学習内容の到達点を具体的に示し、何を学び、何を指すかを生徒に理解させることが重要と考えたためである。これにより将来の進路目標を早期に持たせるための一助となっている。

ウ 問題解決学習の充実

全ての学科に「課題研究」「総合実習」を配置し、その中で生徒自らが課題を設定し、解決するためのプロセスを学ぶプロジェクト学習に取り組んでいる。この学習を充実させることで、問題解決能力や自己表現力の育成を図っている。

エ 特別講座の設定、基礎学力の定着と向上

2・3年次に国語・数学・理科・英語と専門科目との選択が可能な選択枠「特別講座」を設定し、大学等へ進学を志望する生徒に対し進学後の学習にも対応できるように学習指導の充実を図っている。また、令和3年度入学生までは、3年次における数学・英語の授業が専門科目との選択でしか設定されていなかったが、基礎学力の定着・向上を目指し、3年次にも数学・英語の授業を組み込んでいる。

(2) 学習評価の在り方

年5回設定している定期考査において、家庭学習時間調査を実施し、生徒自身に学習への取組を省みさせるとともに、集計結果の分析を行い、生徒の実態を把握し学習習慣の確立に向けた工夫に役立っている。

また、保護者や生徒からも授業の評価や意見を求めるため、学校評価に関するアンケート項目に教育課程や学習活動についての質問を設け、生徒・保護者からの評価を得て授業改善に生かしている。さらに、生徒による授業評価を年2回実施し、それらの結果を総合し、分析・検討することで、より適切な学習評価となるよう努めている。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 専門科目に教科の特性上、「生き物」を取り扱う実験実習を伴う科目が多くある。さらに、本校は実習地が校外に点在していることもあり、移動に時間がかかるために2時間連続や曜日・時間の指定等、数多くの時間割編成上考慮しなければならないことがある。また、大学等への進学希望者に対しては、特別講座（専門科目と国語・数学・英語・理科の選択）を設けている。さらに、教科によっては非常勤講師に頼り何とか授業を分担している現状がある。これらの条件を踏まえて編成した時間割では、

自由度が低く、出張や休暇時の授業変更が極めて困難な状況であるが、各教科・学科内で対応をしてもらっている。

- (2) 校務支援システムの運営において、出欠処理や成績処理、指導要録、調査書などにおいて業務の軽減につながる部分も多い。しかし、操作権限の関係で一部の先生に負担が集中している部分もある。校務分掌間での連携を強化し、適正な業務分担が必要である。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) 学科の専門性を高める

本校にある6学科において、学科の目標を達成するための教育課程を編成し、毎年学科の特性を生かした教育活動を進めている。昨年度の主な成果は次のとおりである。

○第2回石積み甲子園 優勝（環境開発科）

○第19回全国高校生パンコンテスト 地産地消高配合部門 最優秀賞（食品化学科）

○第75回日本学校農業クラブ全国大会 プロジェクト発表 出場（生活科学科）

(2) 広報活動

○学校見学会の実施（6月）

○中高連絡会の開催（6月）

○中学校訪問（6月下旬）

○学校説明会（体験入学）の実施（7月下旬）

○中学校説明会への参加（6月～12月）

○農業祭での学習体験（11月中旬）

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

本校は令和5年度から習熟度別のホームルームを編成している。実施形態は1学年5ホームルーム（AABBB）、2学年5ホームルーム（ABCCC）、3学年5ホームルーム（ABCCC）である。

平成30年度入学生から総合的に科目を選択できるよう教育課程を編成していたが、令和8年度の理数情報科及び芸術科の設置に向けて令和5年度入学生から教育課程を変更した。2年次以降は、従来の芸術クリエーションコースに加え、文系コース、理系コースを設置した。総合的な探究の時間は3年間で計5単位履修することを踏襲している。特に、3年次の1単位については4月から9月まで週2時間の1単位を配置し、10月以降は情報と英語から1科目を選択することで生徒の進路希望に応じた指導ができるよう工夫している。さらに、学校設定教科「総合」では、教科横断的な内容を取扱っている。

評価については、全ての科目について評価規準を作成中である。学年末の評定については、3つの観点の組合せと評点を併用して総括している。

2 教務関係実務に関する問題点

成績処理や進級・卒業等の処理について、教務課の校務支援システム担当者に負担が集まることは避けられない。しかし、教務課関係以外の処理についてもマスタ設定等を含めた他の課の業務を行うことが多く、管理権限がある教員に業務が集中する点は大きな課題である。

時間割作成では、専用のソフトのみで作成するようにしたため、業務の軽減につながりつつある。しかし、習熟度別の講座編成などにより時間割が固定化しているとともに、非常勤講師の勤務条件も伴って時間割の作成や変更が年々困難になっており、教務課担当者の負担は大きい。

3 入学生確保に向けて工夫していること

校務分掌に「情報・魅力課」を設置し学校の魅力化に努めている。令和6年度の中学校訪問は4月、6～7月、9～11月に延べ68回行った。中学校主催の説明会だけでなく、本校から依頼して開催した説明会に学校長が自ら情報発信したことで、本校の取組の本気度が伝わったと考えている。学校見学会は6・7・8月に3回実施し、在校生との交流、学校紹介、体験授業を実施し、高校生活への理解を深められるよう工夫した。また、保護者のみを対象とした学校概要説明も行った。学校見学会の告知や申込方法については、近隣の中学3年生一人一人にチラシを用意し、二次元コードや本校HPを通じて生徒個人で申込み形式を採用した。その結果、延べ789名の参加（中学生561名、保護者・中学校教員228名）があり、中学校側も各校での取りまとめ作業がなくなったことで業務負担軽減につながったとの意見が寄せられている。

本校は、地域資源と協働した探究活動が充実しているが、入学生へのアンケートによると、「地域と協働した探究活動があるため」を志望理由とした生徒が83名（回答数197名）となっていた。情報発信を通じて本校の特色について理解を深めてもらったことが、志願者増加につながったと考えている。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程編成の工夫・改善

ア 普通科について

第1学年においては類型を同一にしている。第2学年から、文系（Ⅰ・Ⅱ類型）、理系（Ⅲ類型）の進学類型を設け、さらに、第3学年においては、Ⅰ類型（私立文系コース）とⅡ類型（国公立文系コース）に分けている。また、1年次においては国語、数学、英語で習熟度別講座編成、2・3年次には類型別に習熟度別学級編成を実施し、生徒の学習意欲と学習効果を高めるように工夫している。2・3年次では、進路希望と習熟度による習熟度別講座編成も実施しており、生徒の理解度に応じた授業を行っている。

イ 商業科について

各学年で特色ある教育課程の編成に努めるとともに、多様化する学力や進路希望に対応するために、科目選択の幅を広げ、生徒の適性・興味・関心に応じた多様な選択を可能にしている。

(2) 学習評価の在り方

年間学習指導計画に即し、指導内容と評価が一体化するように心掛けている。新教育課程における学習評価に関しては、3観点についてそれぞれ100点法によりABCの評価を行い、その組み合わせを基に5段階評定を算出・総括している。適正な評価方法について教員間で共通理解を図り、生徒の意欲につながる評価、「公正」かつ「信頼性」のある評価ができるよう各教科で様々な観点から工夫している。

また、学力差が大きくなっているため、テストの作問や評価の方法にも考慮が必要である。校内で実施している教育課程委員会において評価についての研究を各教科等で充実するよう申し合わせている。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 同時開講講座編成(習熟度別講座編成)による授業時数の増加で、教員の負担が大きい。
- (2) 同時開講講座編成(習熟度別講座編成)によって、時間割編成作業が著しく難しくなっている。
- (3) 生徒の学力差が大きくなっており、学習に対する意欲が低い生徒も見られる。「確かな学力」を生徒に身に付けさせるため、基礎基本を徹底し、学習意欲を喚起するために、ICT機器の活用等を積極的に進めていく必要がある。
- (4) 校務支援システムの各種設定や成績・出欠処理において、担当者は時間外の業務が常態化している。ただ、それを利用する担任や教科担任の処理雑務は簡略化され負担は減少している。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) 中学生の体験入学

7月下旬に本校で中学生体験入学を実施している。模擬授業、部活動体験、商業科説明会、在校生との座談会などを通して、本校への進学意欲を高めている。今年度は、農業科も同時に開催し、新校の魅力発信につなげていきたい。

(2) 中学校での学校説明会・中高連絡会

カリキュラムの内容や本校スクールミッション、スクールポリシーを詳細に説明し、積極的に活動している生徒の様子や進学・就職状況など、パワーポイントを利用し説明している。

(3) ホームページの活用

生徒たちの日々の活動をリアルタイムで確認できるように、各課、学年、教科において魅力発信委員を選出し、それぞれが取材・記事化したものを、毎日担当者を割り当て更新している。

(4) 部活動での中高の連携

各部活動で積極的に合同練習会や発表会等を開催し中高の連携を図っている。本校独自のカヌー部や経済調査部等の全国・四国大会での活躍などが、地域との連携の活性化につながっている。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程編成の工夫と改善点

本校は農業の専門高校として生産科学科と食品デザイン科の2学科を設置している。2年次からは生産科学科では「食糧生産コース」と「環境創造コース」、食品デザイン科では「食品ビジネスコース」と「生活デザインコース」に分かれ、より専門分化した学びができる教育課程となっている。両学科ともに1年次は普通科科目を多く履修し、学年が上がるにつれて専門科目を多く取れるようにしている。また、選択科目も多く設定しており、生徒の興味や進路に応じて柔軟に対応できる教育課程を編成している。

生産科学科では、作物・野菜・果樹などの栽培と経営に関する知識・技能を習得させるとともに、農作物の品質と生産性の向上や流通に関する実践的な能力を系統的に身に付けさせ、地域社会の担い手として活躍できるように工夫している。

食品デザイン科では、食品の加工・栄養・調理・生活に関する基礎的・基本的な知識や技術を複合的に身に付けるとともに、社会に貢献できる豊かな人間性と応用力のある優れた職業人を育成することを目標としている。

両学科ともに、現場実習や職場見学、先進農家の見学等の地域と結びついた実践的・体験的な授業やプロジェクト学習を効果的に取り入れ、地域からの要請や生徒の実態に応じることのできる教育課程を編成している。大学進学を目指す生徒については、「数学Ⅱ」「英語コミュニケーションⅡ」を選択科目として設置するなど、進路選択の幅が広がるように工夫している。

また、課題研究や総合実習を通して身に付けた知識や技術を生かして、各種コンクールや農業クラブ主催の生徒研究発表大会、鑑定競技等に参加したり、地域行事に積極的に参加したりすることで、学習意欲の向上につなげている。活躍の場を得ることで自己肯定感が増し、より意欲的に学習に向かう好循環が生まれることを期待している。

(2) 学習評価の在り方

年3回の教育課程委員会を実施し、全教職員が評価方法や評価基準について共通理解を持つことに努めている。特に、総合実習や課題研究などの複数の教員が講座に分かれて担当する科目については、教科会において進度や評価について情報交換を頻繁に行い、担当教員間で差異が生じないように気を付けている。

新学習指導要領の開始とともに導入した本校作成のエクセルシートによる評価によって、客観的に評価が行えるようになっている。しかし、エクセルシートによって

換算された観点別評価と教員の感覚的な評価に差があることもあり、今後も微調整を進めていく必要があると感じている。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 選択科目や複数講座に分かれる授業が多いため、特に農業科の授業時数が多くなっている。農場への移動や校外での活動も多いため、負担が大きい面もある。
- (2) 時間割を編成する際に、専門科目の特性によって曜日や時間帯、2時間連続等の指定が多く、全体的に偏りがでてしまう。また、時間割変更への対応が難しい。
- (3) 習熟度別や少人数講座などを取り入れて、基礎学力の向上を目指しているが、学力差が大きく対応しきれていない部分もある。個別での支援が必要な生徒もあり、教育相談課やスクールカウンセラー、養護教諭と連携して授業を行っていく必要がある。生徒の状況を全教職員間で共有し合い、生徒にとって必要な支援をしていく必要を感じている。
- (4) 校務支援システムにより、成績処理や要録作成などの時間が短縮されたが、システムに習熟している教員に限られているため、担当者の負担が大きい。特に年度末の作業や授業変更、一人一台端末の更新や管理などが負担となっている。

3 入学生の確保に向けて工夫していること

- (1) 中学生1日体験では、昨年度から全員が生産科学科と食品デザイン科の両方の体験をできるように変更した。生産科学科の志願者が減少傾向であったため、より多くの中学生に生産科学科の魅力を知ってもらうために、農業機械の乗車体験やフラワーアレンジ体験、バイオテクノロジーの作業体験などの体験ブースを複数設置し、自由に体験できるように工夫を行った。
また、中学校主催の高校説明会とは別に、希望者対象の少人数での説明会も行っており、本校生徒と農業科の教員が中学校を訪問して説明をしている。全体での説明会とは違って質問もしやすく、本校についてより具体的に知ってもらうことで入学前のミスマッチを防止することもできていると感じている。
- (2) 地域行事やイベントに積極的に参加することで、地域の方へ本校の活動を周知し、地域とともにある学校として親しまれるよう努めている。また、昨年度は近隣の中学校に花や野菜の販売に行く回数を増やし、本校の活動に興味をもってもらう機会を多くしている。
- (3) ホームページの更新を多くし、日常の実習風景や行事の様子をこまめにアップするようにしている。昨年度からはInstagramも開設し、より生徒の生き生きとした様子を発信できるようにしている。
- (4) 振興計画による大洲高校との統合に向けて、相互交流を積極的に行っており、両校の魅力をお互いに理解し合うとともに、外部への発信を行っている。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程編成の工夫・改善

教育方針「地域社会や家庭と連携をとりながら、知・徳・体の調和のとれた高校教育を推進し、人格の形成と社会の担い手として必要な資質の向上を図る。」に基づき、下記の点に留意して教育課程を編成している。

ア 生徒の個性を伸ばす課外活動との両立を図るとともに、7限目に通級指導を実施するため、週30単位を上限としている。

イ 1学年は、基礎的・基本的な教科・科目を履修させることを重視し、芸術以外は全て共通履修としている。2学年からは、生徒一人一人の多様な能力・適性及び興味・関心、進路希望に対応した学習活動が展開できるように、ビジネス・総合・SS(スペシャル・スタディ)コースの3コースを設定している。

ウ 1学年では、学習習熟度の差を踏まえ、一部科目において習熟度別授業も実施している。国語・数学・英語は3講座、生物基礎は2講座編成とし、生徒一人一人を見つめた授業を展開し、学習意欲を喚起するとともに、個に応じた指導にも配慮している。また、習熟度の低い講座では、通級指導担当者等とのTTを実施するなど、手厚い指導も行っている。

エ 3学年ビジネスコースの商業科目などでも、習熟度別授業やTTを実施するなど、手厚くきめ細やかな指導を行っている。

オ 特色ある学校づくりとして、学校設定科目を多数開設している。1学年が全員履修する「マリンアクアリウム1」は、「長高水族館」を活用した教育を行っている。さらに、2・3学年には「地域研究」「理科研究」「マリンアクアリウム2」「音楽探究」「美術探究」「家庭探究」「英語探究」等の選択科目を設け、研究及び探究活動に基づく多様な学びができるようにしている。

カ 全般的には生徒の実態に即した基礎的・基本的な内容の指導に重点を置きつつ、近年増加している上級学校進学希望者にも対応するため、講座編成やコース・科目編成の見直しを随時行っている。

(2) 学習評価の在り方

入学時に配布する冊子「長高NAV I」に、教科ごとのシラバスを掲載し、高校3年間で学習する科目の内容や勉強方法、学習評価の観点等を生徒・保護者に周知している。また、各授業においても、勉強方法や評価方法を詳しく説明することとしている。

学習指導要領については、「学習評価の手引(令和4年3月)」等を参考に対応しており、評定算出は素点合計方式を採用している。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 生徒の多様化(不登校、特別支援、大学進学希望等)や教員配置等にも対応可能な教育課程の編成には苦慮している。
- (2) 小規模校であるため、非常勤講師の人数や勤務条件、他校との兼務、選択科目の拡充、習熟度別授業やTTの実施等により、時間割が硬直化している。
- (3) 校務支援システム活用による業務軽減の裏で、設定・運用担当者への業務一極集中、操作手順が多くて煩雑等々あり、小規模校ゆえに個人負担が増大している。

3 入学生確保に向けて工夫していること

- (1) 長高魅力化推進室を中心として、全国募集に向けた企画・PR活動等を実践していく。
- (2) 学校体験への参加者を増加させるため、実施内容の見直し・拡充を図っていく。
- (3) 中学校で実施する高校説明会等には、校長自ら出向いて本校の魅力をPRしている。
- (4) 地元中学校との交流活動を企画・実践していく。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 進路希望に応じた類型選択

1年次は共通類型とし、全生徒が同じ科目を履修している。昨年度までは3クラス体制で、1クラスを習熟度の高いクラス、残り2クラスを均等割の編成としていた。しかし、今年度は入学者数が80名以下となり、2クラス編成となったため、2クラスとも均等割とした。2年次からは、生徒の進路希望に応じて「一般類型」と「進学類型」に分かれる。さらに、一般類型は「普通科目選択コース」と「商業科目選択コース」、進学類型は「文系コース」と「理系コース」に細分化され、それぞれに必要な科目を履修する仕組みとなっている。

(2) 「主体的に学習に取り組む態度」の評価

日々の課題提出の状況を通して、知識・技能の習得に粘り強く取り組む姿勢を評価している。また、毎時間、振り返りシートを活用し、自己評価や学習内容、質問等を記入させることで、生徒が自ら学習を調整しようとする態度を捉え、評価対象としている。このように、「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、生徒の学習姿勢を多角的に捉え、評価することにより、学習意欲の向上を図っている。

(3) 多様化する生徒の評価の在り方

近年、義務教育段階で基礎学力や学習習慣が十分に身に付かないまま入学してくる生徒が増加していると感じる一方で、国公立大学を目指して大学入学共通テストを受験する生徒も毎年一定数在籍している。このような学力差の大きい集団に対し、限られた教員数・講座数の中で適正な評価を行うには限界がある。また、観点別評価においても、従来の定期考査中心の評価方法を見直し、日常の学習活動をこれまで以上に重視する必要がある。各教科において試行錯誤が続いており、今後も継続的な研究・改善が求められる。生徒一人ひとりの真の学力や努力の過程を、どこまで細かく、かつ公平・公正に評価できるかが課題であり、「これで完璧」という評価方法は存在しない。したがって、今後も不断の工夫と改善が必要である。

2 教務関係実務に関する問題点

(1) 校務支援システム設定・運用の業務

校務支援システムの設定や運用など、教務関係の業務は年々多様化・専門化している。教務課の専任は主任のみで、他の課員は教務以外の校務分掌も担っており、業務の多忙化が進んでいる。システムに関わる業務を担当教員に適切に分担させるとともに、担当者の異動によって業務に支障が生じないように、業務の分担方法に工夫が必要である。

(2) 観点別評価

新教育課程の初年度では、3観点すべてにおいて達成状況に基づいた5段階での評価を実施した。その結果、教科・科目間で達成状況の平均値に差が生じたことや、旧教育課程と比較して5段階評定の値が低くなったことが課題として挙げられた。様々な修正を加えた結果、現在は概ね旧教育課程と同程度の5段階評定に調整されている。今後もより妥当で納得感のある評価となるよう、継続的な検討が必要である。

(3) 中間考査発表から終了までを短縮

昨年度は2学期中間考査を実施せず、その代替として単元テストを積極的に実施した。単元テストでは出題範囲が狭く、生徒が計画的に家庭学習に取り組むことが可能で、一定の成果を上げた者も多く見られた。一方で、家庭学習の習慣が定着していない生徒にとっては、十分な成果を出すことができなかった。これに対して、一部の教員からは「中間考査を実施することで、短期間でも生徒に集中して学習させることができる」との意見もあった。そのため、昨年度末に「中

間考查を必ず実施したい科目」について各教科にアンケートを行った結果、いずれの類型・コースでも6科目以内に収まることが分かった。今年度は中間考查を2日間に縮小して実施することとし、考查発表から終了までを1週間とした。また、考查がない科目が多いクラスにおいては、3限目まで授業を行う予定である。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) 中高連絡協議会・内子高校見学会の実施

中高連絡協議会は公開授業週間に合わせて実施し、授業参観の後、意見交換等を行い、中学校との交流を深めている。その後、新入生と中学校教員の懇談会も行っている。また、内子高校見学会は、夏季休業中に中学3年生とその保護者を対象にして実施している。体験授業や部活動見学を行い、生徒会が内子高校の良さを説明することで、内子高校をアピールする機会にしている。

(2) 町内の各種行事への参加

地元を大切にすることが、入学生確保の第一歩であると考えている。吹奏楽部が中学校の行事や地元のイベントでの演奏、美術部が内子笹祭りで作品を展示、郷土芸能部が五十崎大風合戦で演奏、各部活動や教職員有志が内子町駅伝大会への参加、家庭クラブや生徒会が地元の施設や団体と交流するなど、地元の中学生や住民との交流を積極的に行っている。今年度も、積極的に町内の各種行事に参加し、内子高校をアピールする機会を設けたい。

令和7年度 県立学校教務主任研究協議会 資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程編成の工夫・改善

小田分校は全日制普通科で1・2学年各2学級、3学年1学級（定員各学年2学級）の小規模校である。生徒の学習習熟度の差はかなり大きく、進路希望が多様である。グローバル人材の育成を目指し、課題発見・解決型学習の充実や、進路実現に結び付けるために三つの類型の特色をより明確化しながら、教育課程の編成を行っている。

1年次では義務教育段階の学習内容の確実な定着を図っている。2年次より、応用的な学力の向上をねらいとした類型選択を行い、生徒の適性や多様な進路希望に対応できるよう可能な限り多くの選択科目を設置するとともに、学校設定教科「探究」をビジネス類型とグローバル類型に開設し、起業家精神の育成を目指している。

(2) 学習評価の在り方について

ア 3観点におけるABC評価については、各教科会で教科・科目の特性を生かした評価の在り方について毎年検討してもらい、教育課程委員会において、情報交換を行うようにしている。

イ 授業評価について、公開授業時（保護者他対象）、年度末時（生徒・保護者・教職員対象）にアンケートを取り、その結果を教科で話し合ったり、学校関係者評価委員会において意見を伺ったりすることで、授業改善に生かしている。

2 教務関係実務に関する問題点について

- (1) 科目の選択幅を広げる一方で、時間割作成や出張の際の時間割変更が難しくなり、授業で使用する教室も不足する傾向にある。また、教員一人当たりの持ち時間数が増加し、教科担任には大きな負担を掛けている。
- (2) 基礎学力の定着が難しい生徒や、学習支援の必要な生徒への指導をどう行っていくか、進路課主管の「高校生のための基礎診断」等との連携を図りながら学校全体で今後も継続して検討していくことが求められる。

3 入学生徒確保に向けて工夫していること

- (1) 習熟度別指導・少人数指導の学習指導等の本校の特色を多くの方に理解していただけるよう、高校説明会や中学生体験入学の説明、ホームページの日記の掲載等、担当課である魅力化推進室を中心に日々の情報発信に努めている。
- (2) 「地域みらい留学」への参加や「えひめ高等学校全国募集促進事業」の活用など、県外志願者に対して、積極的にアピールするようにしている。また、教育魅力化コーディネーターの方の学校への積極的な参加や町営「小田寮」の施設・設備の充実など、内子町役場との連携を密にしながら対応している。
- (3) 地元や県内外の方々と協力した地元小田をフィールドとした地域デザインへの取組等を行い、学力保障や進路実現につなげ、学校の魅力化に取り組んでいる。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 普通科の工夫・改善

ア 生徒の進路希望に対応するため、Ⅰ型（3教科型国公立及び私立文系）、Ⅱ型（国公立文系）、Ⅲ型（理系）の三つの類型を設けている。

イ 3年次のⅠ型では、芸術系・家政系の進学希望生徒のために、国語科・芸術科・家庭科の科目を選択できるように工夫している。また、Ⅱ型においても、芸術系の大学進学希望者のために数学科と芸術科の科目を選択できるように設定している。さらに、1年次での芸術科目履修に関係なく選択できる学校設定科目「音楽探究」「美術探究」を設けている。

ウ 令和6年度入学生から、情報教育を強化すると共に大学入学共通テストにも対応できるように、「情報Ⅰ」の履修を1年次から2年次とし、3年次に学校設定科目「情報探究」を設置した。

エ 多様な生徒に対応するために、類型編制・教育課程編成だけでなく、習熟度別講座編制に取り組んでいる。1年次に数学・英語で、2・3年次には数学で実施している。特に数学においては、基礎力の定着を図るため、習熟度別講座編制を強化している。

オ 2・3年次には次の学校設定科目を実施している。

カ 昨年度1・2年次の教育課程全体を見直し、今年度から週33単位とした。

(2) 商業科の工夫・改善

商業科は1クラスであるが、入学してくる生徒の進路希望は就職、専門学校・短期大学・四年制大学への進学希望と多岐にわたっている。そこで選択科目や学校設定科目を編成し、また、選択科目の組み合わせや単位数を毎年見直し、より幅広く商業に関する分野を学習することで、進学及び就職のどちらにも対応できるよう、また資格取得も可能になる教育課程を編成している。

(3) 学習評価の在り方について

観点別学習状況の評価について、評価方法等の研究を各教科で継続し、教育課程委員会等で問題点等を共有・検討している。

2 教務関係実務に関する問題点

(1) 校務支援システムの初期設定作業など、教務関係の業務は増加し専門化しているが、教員数は増えておらず、他の校務分掌も多忙化しているため、教務課専任がほとんどいない。業務の分担を工夫し、一人当たりの仕事量を分散すると同時に、担当者の異動等によっても業務に支障をきたさないようにする必要がある。

(2) 多数の講師の諸条件、習熟度別講座編制や選択科目の増加、使用教室等の諸条件の問題から時間割編成が困難である。また、出張・休暇による時間割変更も困難になっている。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) 体育祭や文化祭、そして芸術文化発表会等の学校行事は土日開催を基本としており、中学生だけでなく地域の方も参加しやすいように実施している。

(2) 中学校へ出向いての学校説明会や体験入学において学校の特色を紹介できるよう工夫・改善に努めている。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

- (1) 普通教科においては、国語・数学・理科・英語・家庭・芸術で生徒の学力差への対応と基礎・基本の定着を目的として少人数講座で学習を行っている。また、進学希望の生徒の進路実現のために、2・3年次に数学や英語の選択授業の講座を数名の生徒であっても開講している。
- (2) 工業科においては、地域の企業への理解を深める取組や企業と連携した生徒の実践的な取組などを実施して、企業とのマッチングを推進するとともに地域産業を担うことのできる工業技術者の育成を図っている。また、1年次より職場見学や講演を体験することで職業人として必要な能力・態度、望ましい勤労観・職業観を育成している。「課題研究」では、少人数の班編成で、ものづくり等、自ら課題を見つけ、企画及び実践を行っている。
- (3) 学習評価の在り方については、授業改善につなげるための研究を行う中で、指導と評価の一体化を図ることにより、指導の過程や評価方法を見直している。また、継続的な実践を積み重ね、改善及び効果的な指導に向けて取り組んでいる。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 時間割編成上の問題
本校は機械土木工学科に機械コースと土木コース、電気技術科に電気コースと情報コースを設定している。同じ学科でもコースによって座学と実習の単位数が異なることがあり、時間割編成において制約を受けている。
- (2) 授業時数の確保に向けての学校行事の精選等の問題
過去長い間、実施してきた伝統的な行事があり、学校行事がまだまだ多い。そのため、授業時数の確保が十分でない状況がある。
- (3) 校務支援システム運用に関する諸問題
校務支援システムの運用は教務課がそのほとんどを行っている。システム運用における負担が一部の教員に集中している。
- (4) 校務分掌の兼務等による問題
本校では、課長以外は校務分掌を2つ以上兼務している。今後、閉校に進むにつれて教員数の削減による影響が心配である。

3 入学生確保に向けて工夫していること

本校は統合により募集停止となるため、八幡浜高校、川之石高校と連携をとって新しい八幡浜高校の入学生確保に向けた取組を行う。

- (1) 学校見学会の開催
今年度は夏休みに学校見学会を実施する予定である。内容は、工業科の説明、工業科3年生の実習見学、本校生徒による部活動紹介である。
- (2) 中学校主催の高校説明会への参加
カリキュラムや本校で育てたい生徒像、生徒の実習風景や進学・就職状況などの情報を説明する。
- (3) ホームページの活用
生徒の授業や行事、部活動などの取組を、各課や学年、部活動顧問などが機会を見てホームページに掲載するようにしている。
- (4) 地域に開かれたものづくりの実践
夏休みには中学生を集めたものづくり教室を実施している。また、近隣の小中学校への出前授業や、八幡浜市の科学の祭典にも毎年出展している。
- (5) 高校生ものづくりコンテスト・各種競技会への取組
身に付けた技術を競う高校生ものづくりコンテストにも毎年参加している。また、本校の電気技術部の自律型ロボットによる国際的なロボットコンテストであるWRO (World Robot Olympiad) における実績などを中学生に紹介している。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程編成の工夫・改善について

ア 本校は、平成27年度から福祉系高校となったため、1年次で福祉の科目を選択できるように教育課程を編成した。3年間で介護福祉士の国家試験資格に必要な福祉に関する科目を53単位取得することで、3年次の1月に介護福祉士の国家試験の受験が可能となり、卒業後に「介護福祉士」の国家資格が取得できるようになった。

イ 基礎学力の確実な定着のため、全生徒が3年間に渡り、継続して国語・数学・英語の3教科を履修できるように科目選択群のバランスを工夫している。また、面談を通して、科目選択の重要性を認識させ、2年次からの科目選択の履修指導を行っている。

ウ 教育課程編成と同時に、群に配置する科目の設定が重要になってくる。群の科目設置状況によって、生徒の科目選択や進路実現に大きな影響が出てくるため、講座ごとの受け入れ可能人数の事前調査をし、科目を履修する人数のシミュレーションをしながら審議している。

(2) 学習評価の在り方

ア きめ細かい学習指導の充実と生徒一人一人の学習内容の定着を図るため、観点別学習状況の評価が適切に行われるように、各教科会等で研究、検討を重ねている。

イ 「産業社会と人間」・「総合探究Ⅰ」・「総合探究Ⅱ」では、それぞれノートを利用し、毎時間自己評価をさせている。自己評価・生徒の学習状況・感想から総合的に評価を行っている。

2 教務関係実務に関する問題点

(1) 総合学科の特長を生かすために、多様な科目を開講し、選択科目群の配置を工夫しているが、時間割にかなりの制限が加わり教員の負担が増えている。

(2) 教員数の減少により教務課員も減っており、それぞれの業務が増加している。また、校務支援システム担当者への業務が集中しており、担当者の負担が大きくなっている。担当者が転勤した場合の引継や、校務支援システムを担当できる人材育成が必要であり、定期的に研修会等を開催してもらいたい。

3 入学生確保に向けて工夫していること

本校は、今年度から新入生募集停止となっている。

ただし、新八幡浜高校に総合学科が設置されるため、八幡浜高校と連携は取っている。

令和 7 年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

本校は、四国最西端の佐田岬半島の先端にあり、生徒数 151 名の社会共創科を主とする高校である。隣の八幡浜市からは 40km 以上離れており、従来は在籍するほとんどの生徒が伊方町内（旧三崎町、旧瀬戸町、旧伊方町）からの入学者であったが、平成 20 年度に再編整備対象校に認定されたことを受け、学校、地域、行政が連携を取り合いながら、入学生確保に向けた取組を積極的に行ってきた。平成 30 年度から全国募集も開始し、伊方町とも協力し、学校の魅力化に尽力した結果、町内だけではなく、県内の他の市町からの志願者や県外からの志願者も増加している。定員割れが続いていたが、令和 2 年度並びに令和 5 年度の入試では定員を超える志願者を募ることができた。国公立大学の受験を目指す生徒から高校入学時に基本的な生活習慣や学習習慣が身に付いていない生徒までが在籍しており、学力の差がかなり大きい。令和 6 年度から新設された社会共創科では、これまでⅠ型（就職）、Ⅱ型（進学）の二つの類型に分けて、生徒の進路希望に応じた教育課程の編成を行っていたが、新たに「地域探究」「人文探究」「科学探究」の 3 コースを編成し、探究活動に特化した学習を行うことで、幅広い進路選択に対応できるように工夫した。

(1) 教育課程の工夫・改善について

ア 新学科の設立（令和 6 年度）

令和 6 年度から「社会共創科」を設置し、新しい教育課程での授業を実践している。具体的には、「トライブ・ラーニング」「せんたんコミュニケーション学」などの学校設定科目を設置し、今まで以上に地域探究活動などの教育活動を行いながら、その効果や改善点などの確認を行っていく。1 年次は共通類型として、1 年間学習しながら自分の進路や適性について考え、2 年生進級時にコースを選択させる。

(ア) 地域探究コース

地域に根差した探究活動を核として各教科において探究的な活動を主とした学習活動を行うコース。

(イ) 人文探究コース

地域探究活動や探究的な活動を基に主として人文社会分野の学習を行うコース。

(ウ) 科学探究コース

地域探究活動や探究的な活動を基に主として科学分野の学習を行うコース。

イ 習熟度別講座編成

多様化する生徒の学力と進路希望に対応するため、可能な限り習熟度別授業・少人数学習を実施し、学力向上に努めている。1 年生は、国語・数学・英語の 3 教科で 2 段階（A 講座、B 講座）の習熟度別講座に分けて授業を実施している。定期考査の成績や生徒の進路希望を加味して、年に 3 回程度編成替えをしている。

(2) 学習評価の在り方について

校内の教育課程委員会（校長、教頭、教務課長、教務課員、教科主任）及び各教科内において、協議・検証している。また、授業公開時の参観者アンケート調査、学校教育に対する保護者アンケート調査及び生徒による授業評価等の結果を分析・検証し、生徒の実態に応じたより良い教育課程になるよう検討している。

愛媛県教育委員会の『学習評価の手引』を参考に、生徒の学習を多角的・多面的に評価し、学習指導の充実や学校における教育活動全体の改善、発展に結び付けていきたいと考え、年間学習指導計画やシラバスに観点別評価の規準及びその指導計画を加えている。

本校では全校生徒に「スタディサプリ」を採用し、オンライン学習等で有効活用している。生徒が日々の学習活動や部活動、学校行事、探究活動について、いつでも活動メモを記入でき、ポートフォリオ評価を学習評価にも加味していきたい。また、本校学校設定科目「未咲輝学」で用いているルーブリック評価に関しても、今後他教科でも研究していきたい。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 小規模校ゆえの多岐にわたる業務内容
 - ア 校務支援システムの管理・設定・運用
 - イ 全国募集、学校魅力化を含む生徒募集・学校説明会
- (2) 全国募集に伴う入試業務の煩雑さ
- (3) 時間割作成・時間割変更について

出張等による時間割変更についてその数が多いこと、選択授業が多いこと、また同一科目の同時開講等により、変更が困難でやむなく自習（課題学習）になる場合が少なくない。その影響で、特定クラスの進度が遅れるなど、学年全体での進捗調整に苦慮するケースが生じている。

3 入学生確保に向けて工夫しているところ

- (1) 全国募集の実施
 - ア 定員 60 名の 35%、21 名まで、受け入れ可能
 - イ 本校HPによる公開、SNSでの情報発信（Facebook、YouTube、Instagram）
 - ウ 広報活動の活性化
 - (ア) 『学校案内』の見直し（広報内容を重視）
 - (イ) 広報ポスター、チラシの作成
（全国募集イベントで活用、八幡浜市や伊方町内の施設に掲示）
 - エ 「地域みらい留学」に参画
- (2) 伊方町の支援（寄宿舍・通学費補助等）
 - ア 寄宿舍
 - (ア) 土曜日・日曜日・祝日も原則的に開寮
 - (イ) 平日は3食付（土曜、日曜は、外食・弁当・自炊等）
 - (ウ) 寮費（食費・光熱費等を含）の半額（1万5千円程度）を教育振興会より補助
 - (エ) 令和2年度に町営の寄宿舍「未咲輝寮」が建設、令和3年4月から供用開始
 - イ スクールバス
伊方町、同窓会との連携により、八幡浜～三崎高校間の通学バスを運用開始
（生徒の負担なし、登下校便、公営塾後下校便の2便）
 - ウ 公営塾「未咲輝塾」
 - (ア) 講師5人（町のパートタイム会計年度任用職員）
 - (イ) 月～金の学校終了後から午後9時頃まで開塾
 - (ウ) 自学自習、不明な点は講師に質問するスタイル
 - (エ) 全生徒の約70%が入塾
 - (オ) 個人負担は1月3,000円
 - エ その他
 - (ア) 入学時に伊方町地域商品券5万円の支給
 - (イ) 伊方町より給食提供開始（R4：38食、R5：45食、R6：80食、R7：90）
- (3) 教育課程等の充実
 - ア 学校設定科目「未咲輝学」スタート（令和2年度）
 - イ 総合的な探究の時間の工夫
地域の魅力や課題について考察し、類似する課題を持った生徒がマイプロジェクトとして班活動を実施。年度末にSENTAN発表会として成果発表を実施。
 - ウ 外部人材の活用
カリキュラム開発専門家の配置、地域住民ボランティア
- (4) 「みさこうデイ」の取組
「みさこうデイ」とは、「カジュアルデイ」と「ノーチャイムデイ」を掛け合わせた本校独自の取組で、月に2回程度実施している。また昼休みを利用した「みさラジ」と呼ばれるラジオ番組や、「ライブハウス MISAKO」と呼ばれる体育館を利用した生徒企画も実践している。この「みさこうデイ」を通して、生徒は、社会性の向上と主体的に行動できる力を身に付けるとともに、次世代の地域を担うリーダーの育成に努めている。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程編成の工夫・改善

本校生徒の高校卒業後の進路希望は、約35%が4年制大学・短大等へ進学希望、約45%が専門・各種学校への進学希望、約20%が就職希望となっている。そのため、普通科では、Ⅰ型を短大等進学及び就職志望者向けの類型として設定し、教科を越える選択科目を設けることで、進学に必要な科目や商業科目等を進路希望に応じて選択できるように工夫している。また、Ⅱ型は、国公立大学への進学も可能な科目設定にし、更に3年では文理の選択ができるよう工夫している。

農業科でも、課題研究の時間を活用して高大連携活動を実施し、過年度には愛媛大学農学部や他の国公立大学へ進学する生徒を輩出しており、現在も進学希望の生徒がいる。また、基礎学力向上のために学校設定科目「実践数学」を全員履修にし、進路希望に応じて教科を越える選択科目を設定している。さらに、農業の実習科目では、少人数の班に分かれて活動をしており、希望した学習内容に意欲的に取り組んでいる。

令和8年度からの総合学科開設に向け、教育課程を編成している。1年次では、必修科目を配置し、多様な生徒の入学が予想されることから、国語、数学、英語において習熟度別講座による授業を実施する予定である。また、2年次からは、4つの系列の専門的な科目を配置するとともに、教科を越えた選択科目を設定し、生徒が興味・関心を持つ学習内容を受講することができるよう工夫している。教育課程の工夫と同時に、これらの運用面からも学習に対する向上心の育成につながると考えている。しかし、この運用に関しては、教員人数の影響も大きく、今後も生徒のためになるように工夫をする必要があり、場合によっては教育課程の修正をしなければならないと考えている。

(2) 学習評価の在り方

学習面から向上心を育み、継続して努力する力を付けるためには、教科ごとの取組に頼る側面が大きい。そのため、本校では年間3回定例で実施している「教育課程研究委員会」において、教科主任を通じて学習指導や評価の改善などについて意思統一している。また、評価方法についても検討し、各教科の特色を確認している。また、教科会が定期的開催できるように、時間割の中に組み込む工夫も行っている。

成績等については、適宜、教科会を開き、評価の観点や評価方法における基準を明確にし、適切な評価となるよう努めている。また、シラバスを活用し、評価方法について生徒・保護者への周知徹底を図っている。「観点別評価」については、年間学習指導計画に観点を記入欄を設け、各教科で内容の具体化を図り、教科の特性に応じて、観点を項目ごとに評価の何%に値するかを明確にし、学期末などの評価方法を生徒へも周知している。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 農業科の授業の持ち時間が張っており、時間割の制約が多く、教諭への負担が増加している。また、教員数の関係で、授業以外の業務分担に片寄りがみられる。
- (2) 多様な進路希望に対応するため、選択科目を多く開講しており、複数教科の同時開講や2時間連続授業による制限などもあり時間割編成が難しい。また、出張・年休時の時間割変更も困難である。
- (3) 多様な生徒が入学しており、何らかの支援を要する生徒も少なくない。全校一斉個別面談などを通して生徒理解に努めているが、小規模校の場合、学習支援計画や担当教員配置などで教員の負担が大きい。生徒のための体制作りに、校内各課での調整が必要となっている。

3 入学生確保に向けて工夫していること

ここ数年、定員割れが続いているが、増加傾向にある。引き続き、中高連絡協議会、中学校向け進路説明会、中学生体験入学、公開授業週間(年2回)、ホームページなどで、各学科の特徴や魅力を広報しているが、南予地域全体の中学生人数の減少に伴う定員割れは、大変難しい問題となっている。令和8年度からの総合学科開設を前向きに捉え、総合学科のフライヤーの配付や西予市の魅力化コーディネーターの協力のもと、今後も継続した情報発信を積極的に行う予定であり、マスコミ等を活用した方法も継続していきたい。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 普通科の教育課程について

多様な進路希望に対応するため、2年次から類型分けを行っており、ⅠA型（理系進学）・ⅠB型（文系進学）、Ⅱ型（私立大学、専門学校、就職）としている。

Ⅱ型については、普通教科と専門教科（主に商業科目）にわたる選択科目群を設けている。また、今まで開設していた「社会人基礎」に加え、昨年度から2年次に普通科の生徒が理科、家庭科、商業科に加え、農業科という異なる教科を組み合わせ、総合的に学ぶことのできる「アグリデザイン」を開設し、生徒の多様な進路希望が実現できるように工夫している。

(2) 畜産科の教育課程について

1年次には、学校設定科目「高校基礎」（1単位）を開設し、義務教育段階の学び直しと基礎・基本の学力定着を図りながら、高校での学習にスムーズに移行できるように配慮している。3年次においては、数学科、英語科、芸術科、家庭科等を含む科目選択の幅を増やし、多様な進路希望に対応できるよう工夫している。

(3) 学習評価の在り方について

教科別に、各科目における評価の観点の趣旨、内容のまとまりごとの評価規準を作成し、共通理解を図っている。客観的かつ公正・公平に評価していくことが原則であり、評点を基に観点別学習状況の評価を実施している。

2 教務関係実務に関する問題点

習熟度別講座編成や選択科目の増加、使用教室の条件等の問題から、理想的な時間割作成が難しくなっている。同時に、環境の整備された教室の割り当てが難しい状況にある。また、複数クラスの同時開講や選択科目が多いため、行事・出張等による時間割変更が難しくなっている。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) 愛媛県県立高等学校入学者選抜における全国募集を実施している。

(2) 西予市の協力を得て、野村高校活性化連絡協議会を設置し、本校へ通う生徒への支援を行っている。主な取組として、通学費や通学に係る物品購入費の補助、下宿生・寮生への経済的支援がある。

(3) 中高連絡協議会を年間2回実施し、近隣中学校及び出身生徒のいる中学校教員との交流を図っている。連絡内容や情報交換をするだけでなく、参観授業も行い教員や生徒の様子を見てもらうなどの工夫をしている。

(4) 毎年7月末にオープンハイスクール（主に中学3年生の体験入学）を実施している。2学期には、野城フレンドリースクール（中学2年生を対象とした交流会）を実施している。また、部活動で合同練習などの交流を行い、本校への進学に興味を持ってもらうよう努めている。

(5) 学校案内のパンフレットや生徒目線で発信する動画、YouTube、InstagramなどSNSを利用した学校紹介等、情報発信に努めている。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

令和7年度の教育課程の編成において、普通科・理数科の総単位数を34単位から33単位にすることで生徒・職員にゆとりを生み、その時間を有効に活用し、学習評価の充実、さらに、それらの実践と授業改善をPDCA化し、生徒の多様な適性や進路希望により柔軟に対応する組織を形成するよう配慮した。主体的・対話的な深い学びを通して「何ができるようになるのか」を明確にしつつ、これからの時代に必要な能力・資質の育成を目指している。同時に、活用・運用能力などの「学ぶ力」、感性・自己肯定感を含む「学ぼうとする力」、「自らの学びを調整する能力」を育む教育活動とカリキュラムの編成・運用を研究し、実践している。また、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）事業（3期3年目）により、理数科、普通科、商業科のすべての学科において必修科目の単位数一部削減や代替、SSH学校設定教科・科目を開設していることが教育課程の特徴である。さらに、STEAM教育・ICEモデル推進委員会を設置し、全ての授業に探究的な学びを導入し、全教員が教科等横断型授業を実践し、課題発見・解決や社会的価値の創造に結びつけていく資質・能力の育成に努めている。

(1) 普通科

ア 平成21年度入学生から理数科と普通科のくくり募集を実施している。

イ 2年次からは、Ⅰ型（文系）とⅡ型（理系）の二つの類型に分けることで、進路に対応した教育課程を編成している。また、習熟度別講座編成を行い、学習意欲の向上や基礎学力の定着を図っている。

ウ 令和5年度から、1年次理数科・普通科では、学校設定教科「スーパーサイエンス（SS）」における学校設定科目として、「STREAM探究基礎」、2・3年次はⅠ型に「GL探究Ⅰ・Ⅱ」を、Ⅱ型に「STREAM探究Ⅰ・Ⅱ」を、開設し、「STREAM探究基礎」を継続研究できるようにした。

(2) 理数科

普通科と同様に、1年次に「STREAM探究基礎」、2・3年次に「STREAM探究Ⅰ・Ⅱ」、「STREAM探究応用」を開設し、教科等横断的な探究活動を継続研究できるようにした。

(3) 商業科

商業科は、小学科として商業科と情報ビジネス科を設置しており、さらに両学科をまたいで進路希望に応じた二つの類型（Ⅰ型・Ⅱ型）に分けている。Ⅰ型は就職・進学希望者コース、Ⅱ型は国公立四年制大学進学希望者コースとしている。Ⅰ型では3年次に進路目標や興味・関心に応じた科目の選択が可能であり、Ⅱ型では、国公立四年制大学受験にも対応するため、国語・英語を多く履修できるような教育課程を編成している。また、令和6年度の情報ビジネス科募集停止に伴い、令和6年度入学生から従来の類型（Ⅰ型・Ⅱ型）を廃止し、2年次より新たなコース（会計ビジネスコース・情報ビジネスコース・地域ビジネスコース）を設け、進路指導のいっそうの充実を図っている。さらに、令和6年度から、商業科も学校設定教科「スーパーサイエンス（SS）」における学校設定科目として、「地域探究」を3年間継続的に履修し、職業人として必要な豊かな人間性と主体的に将来の町づくりを担うために必要な論理的思考力や表現力を養っている。

(4) 学習評価について

評価は、各教科・科目の指導目標に照らして、「関心・意欲・態度」、「知識・理解」など学習状況を観点ごとに評価している。令和4年度入学生からは、新学習指導要領に基づいた観点別学習状況の評価が行われるようにシラバスを作成している。評価基準の設定、単元の目標に基づく授業実践、観点別学習状況の評価の実施のサイクルをPDCA化し、恒常的に授業改善が推進されるシステムの構築を目指している。年間5回の定期考査に加え、単元評価を実施する時機を年間4回設置し、評価機会の増加による指導と評価の一体化に取り組んでいる。体育祭や文化祭などの学校行事にもルーブリック評価を取り入れ、多角的な評価を行っている。また、「思考力・判断力・表現力」を問う考査問題の研究を学校全体で実施し、その質の向上に努めている。さらに、ICEモデルを基軸とした授業デザインや学校独自の評価基準の策定に努めている。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 講座別授業や選択科目、複数教員による授業、また、再任教員の増加により、時間割編成条件が年々複雑になっており、各教科の要望を満たす時間割が困難になっている。
- (2) 講座編成や習熟度別学習、選択科目の増加により、教員の出張等による時間割変更（交替）が困難になっており、出張する教員が多い週などは特別時間割を編成せざるを得ない。
- (3) 本校の教育課程の複雑さが、校務支援システムの完全運用に影響している。

3 入学生確保に向けて工夫していること

- (1) 中学校が主催する高校説明会
高校説明会のプレゼンテーションにおいて、高校での生活が伝わるよう動画や図表を多用している。SSH事業や商業科の紹介プリント(カラー版)を配布することで周知に努めている。
- (2) 体験入学における座談会
普通科・理数科では、体験入学時に本校生徒の進行により、中学生との座談会の時間を設け、中学生の質問に答えるなど直接交流の機会を設けている。
- (3) 体験入学における課題解決型グループ学習の体験
異なる中学校の参加者で班を構成し、本校生徒がファシリテーターとなり、特定の地域課題について解決するためのプランを、協働的なディスカッションを通して作成させ、参加した中学生が入学後の主体的・協働的な深い学びの楽しさを体験できるように工夫をしている。
- (4) 体験入学におけるアドミッションポリシー、特色入学者選抜の周知
また、(3)の活動により、本校のアドミッションポリシーと特色入学者選抜の概要について、体験型学習を通して伝えられるよう工夫をしている。
- (5) 小学生を対象とした科学教室などの交流会（SSH）
小学生との交流の機会を持ち、SSHの活動を発信することで、本校に興味・関心を持ってもらえるような取組を続けている。

令和7年度 県立学校教務主任研究協議会資料

ア 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

宇和島東高校津島分校は宇和島市郊外に位置する普通科高校で、分校となって現在4年目である。1学年2クラス定員60名で、今年度は募集停止のため2, 3年生、1クラスずつの計2クラスで編成されている。

生徒の学習習熟度や進路志望は多種多様であるため「確かな学力と豊かな心を育て、社会に役立つ力を身に付けさせる教育の推進」を重点努力目標に掲げ、基礎・基本の徹底を図りながら生徒一人一人のニーズに即した学力の定着に努めている。教育課程の編成においても、知・徳・体のバランスのとれた生徒の育成と多様な進路希望に柔軟に対応することを念頭に置き適切な教科・科目の選択ができるよう配慮している。

なお、令和9年度より本校に統合される予定である。

- (1) 募集停止のため新入生はいないが昨年まで1年次は共通履修であり、国語、数学、英語で習熟度別授業を実施して生徒の学力に応じた分かりやすい授業が実施できるよう配慮していた。
- (2) 2年次からは、ビジネスコース（就職型）、カレッジコース（進学型）と称する2つのコースを設置している。ビジネスコースは主に就職や専門学校への進学希望に対応しており、カレッジコースは主に4年制大学への進学希望に対応している。コースの選択については1年次の2学期に生徒と保護者に対して十分に説明をした上で選ばせている。進路選択については早期からの意識啓発にも努めている。
- (3) 各教科で教育課程について検証や評価を行うとともに、校内における教育課程審議会において問題点や改善点等について更に協議を行い、教育目標や生徒の実態に即した教育課程となるよう工夫・改善に努めている。その他、学校評価に関しては、生徒、保護者、教職員を対象にアンケートを実施しているが、その中に教育課程に関する事項を設定して評価を行い、改善にも役立てている。

イ 教務関係実務に関する問題点

教員配置定数の減少により習熟度別及び少人数による講座編成が難しくなっていることや、選択科目等の同時開講授業の実施等もあり、年々時間割の編成や公務出張等による授業交替が難しくなっている。また、教員減に伴い教務課担当の教員が減らされ専属は課長のみになる予定である。校務支援システムの管理も課長が行っている。

ウ 入学生確保に向けて工夫していること

令和7年度より募集停止により記述なし。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程編成の工夫・改善について

「基礎学力の充実」及び「水産業・海洋関連産業・海運関連産業を通じ、地域や社会の持続的発展を担う職業人として必要な豊かな人間性を育成する。」ことをねらいとして教育課程を編成している。

ア 習熟度別講座の編成

本校には多様な生徒が入学しており、特にここ数年は学力が低下傾向にある。そのため、学力差が特に大きい「数学Ⅰ」、「英語コミュニケーションⅠ」については、個別指導の機会を増やして学習意欲を喚起し、基礎学力の定着を図るため、各クラスを2講座に分けて習熟度別授業を実施している。また、1年次の「現代の国語」と「言語文化」、3年次の「文学国語」についても、特に学力差が大きいクラスのみ2講座に分けて実施している。

イ 各学科の特色に応じた教育課程の編成

将来の水産・海洋のスペシャリストを育成するため、海洋技術科、水産増殖科、水産食品科の各学科の特色に応じた専門科目を配置し、実験・実習を重視した実践的な学習を行っている。

実験・実習においては、校内の施設・設備はもちろん、大型実習船「えひめ丸」や小型実習船、養殖いかだなど、校外における施設・設備も最大限に活用するとともに、現場実習などにおいては関係企業にも御協力いただき教育効果を高めている。

ウ 選択科目の編成

3年次には、選択科目を「専門類型（より専門性の深化した学習をする）」、「進学類型（大学等進学を希望する生徒が学習する）」、「商業類型（商業系資格の取得のための学習をする）」の3類型に分けて編成し、進路希望等に応じて選択できるよう配慮している。

特に専門類型においては、水産業や海洋関連産業への就職を希望している生徒が選択するため、より専門性の高い社会の実態に即した科目を配置している。具体的には、人材不足が指摘されている船舶職員の養成や、県内で力を入れて取り組まれている水産物の養殖、魚価の低迷や後継者不足等の課題を発見し解決するための活動など、実践的・体験的な学習を通して地域産業に貢献できる力を身に付けるよう工夫した学習を行っている。

(2) 学習評価の在り方について

評価規準や評価方法については、「愛媛県県立学校 学習評価の手引」を元に各教科・科目担当者が年度末に見直し、改善したものを次年度の学習評価に反映させている。また、シラバスに各単元の評価規準を記入し、指導と評価が年間を通して計画的に実施されるよう努めているが、「指導と評価の一体化」が図られるよう今後も研究を進める必要がある。

2 教務関係実務に関する問題点

専門科目における実験・実習のための曜日や時間指定、講師の勤務形態による制約、教員不足等のため、時間割作成がかなり難しい状態が続いている。また、出張や休暇等による時間割変更ができないこともたびたびあり、自習を行わざるを得ない場合も多い。

教務課の業務は膨大である上に、今年度は旧魅力推進課の業務も増えたため、負担軽減を図っているが、まだまだ十分でない。

3 入学生確保に向けて工夫していること

昨年度は、中学生とその保護者を対象とした体験入学、中学校における学校説明会や出前授業等を実施することができた。また、愛媛県産魚のPR活動や企業と連携した新製品の開発についても実施することができた。それらの活動については、ホームページやメディア等を通じて情報を発信するとともに、各科の実験・実習の様子をカラー写真で掲載した広報パンフレット「水高通信」を年4回程度県内中学校に配布するなど、本校について理解していただく機会を増やしている。

また、今年度から全国募集を開始することになっている。他校の事例を参考にしながら、本校独自のPR活動を積極的に行っていく予定である。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

本校は県下で唯一、普通科と工業科(機械建築工学科・電気電子科)で構成される併設校である。生徒の個性・適性・能力・興味等も様々であり、生徒の進路状況も多種多様である。教育課程の編成においては、本校の重点努力目標である「自ら考え、行動する生徒を育成する」を図るため、新学習指導要領の改訂のポイントである「言語能力の育成」・「理数教育の充実」・「伝統や文化に関する教育の充実」・「外国語教育の充実」・「職業教育の充実」等に則した教科・科目等の構成を見直すとともに、次のような工夫と配慮を行った。

(1) 普通科の教育課程

普通科においては、基礎学力の向上を図るとともに、生徒の多様な適性と進路希望状況を考慮した教育課程を編成している。1年次で共通科目を履修させ、2年次からⅠ型・Ⅱ型(文系・理系)の2類型から生徒の進路希望に応じて選択できる類型を設置している。Ⅰ型は、就職や各種専修学校への進学を希望する生徒に適した類型となっている。商業科や家庭科の専門科目の充実を図るとともに、生徒の進路希望や興味・関心に応じた科目が選択できるようにしている。Ⅱ型(文系・理系)は四年制大学や短期大学等を希望する生徒に適した類型となっている。Ⅱ型文系ではA・Bの2コース制をとっており、Aコースは短期大学、医療系専門学校への進学を希望する生徒、Bコースは四年制大学への進学を希望する生徒が中心となっている。文系においては基礎学力の定着と向上を図ると共に、進路希望及び習熟度別に応じたきめ細やかな指導を心掛けている。また、Ⅱ型理系は、理系四年制大学への進学が明確な生徒に適したコースとなっており、数学・理科・外国語を特に重視し、理系大学進学希望者のニーズに対応している。

(2) 工業科の教育課程

1年次より「機械建築工学科」と「電気電子科」で専門科目を履修させ、2年次より小学科別で更に専門性を高めたコース設定としている。機械建築工学科は、2年次より「機械コース」と「建築コース」、電気電子科は、2年次より「電気コース」と「電子コース」に分かれる。それぞれ、生徒の進路希望に対応するとともに、指導内容の充実を図っている。また、どちらの学科も生徒の興味・関心や進路希望等を考慮し、2年次から3年次にかけて、「数学Ⅱ」と学校設定科目「実践数学」の継続履修としている。更に、3年次から四年制大学への進学希望者に対して、専門科目の代わりに「数学A」を履修できるようにしている。

(3) 学習評価の在り方

定期考査から教科の特性や単元に合わせた「知識・技能(技術)」と「思考・判断・表現」を問う内容の出題、更に小テストやレポートの作成・発表活動、グループでの話し合い、作品制作などの活動から評価、「主体的に学習に取り組む態度」としてノートやレポートなどの記述、授業中の発言、行動観察などから評価をし、各100点の計300点とした。その点を平均した点数を評点とし、今まで使用してきた5段階評価基準からの評定とした。また、3観点の達成度「A・B・C」の評価については、観点別に各

100 点で評価した点数を利用し、0～29 点を「C」、30～69 点を「B」、70～100 点を「A」とした。「A・B・C」の達成状況評価の説明を少しでもしやすいうように「B」の内訳として 30～39 点を「B－」、「A」の内訳として 90～100 点を「A＋」とし、「A＋・・・特に程度が高い」、「A・・・十分満足できる」、「B・・・おおむね満足できる」、「B－・・・努力を要する」、「C・・・一層の努力を要する」とする評価基準を作成し、共通理解を図っている。

5 段階評定を出すために、各観点を 100 点法で評価し平均した点数を評点とすると、考査素点と違いが出てくる。そのため、生徒・保護者への説明時には十分に注意する必要がある。したがって、教科担任は、評価をする際に公平・公正を期するため、より細かい資料と記録を残し、単元ごとの学習に対する生徒との個人面談の必要性がある。また、「主体的に学習に取り組む態度」の評価が難しく、ルーブリック評価、振り返りシートの利用など今後とも各教科で研究を続けなければならない。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 習熟度別学習や選択科目の考査の在り方や評価法について、公平・公正を期するため、より細かい検討が必要である。
- (2) 時間割作成時において、工業科の実習が時間割内で固定されており、さらに一部教科で時間講師の勤務形態による授業日の限定や、多様な進学先に対応した教育課程に変更したことにより、各教科の週当たりのバランスを考えた時間割編成や出張に伴う時間割変更が非常に難しくなっている。

また、授業時数を確保しながら生徒の学力の向上をさせるためには、平常時や長期休業中の補習、家庭学習習慣の確立などが今後の課題である。

3 入学生確保に向けて工夫していること

- (1) 中学生一日体験入学において、普通科は体験授業、工業科は体験実習を行っている。工業科の体験実習においては、できるだけ多くの体験ができるように体験実習内容を複数準備している。また、体験実習後に中学生が持ち帰ることのできる「ものづくり」を行っており非常に好評である。
- (2) 高校説明会において、中学生に馴染みの少ない工業科については写真や動画を多く使い、分かりやすいように説明している。また、本校工業科は就職希望者が多いことから卒業生の就職先についても説明している。
- (3) 地元の吉田中学校に対して、工業科に関する説明会を中学校主催の高校説明会とは別の日程で訪問し、機械建築工学科と電気電子科 3 年生による「ものづくり」の実演や体験を行っている。
- (4) ホームページの「吉田高校日記」の更新を全教員に割り当てることにより、毎日の学校の活動状況を発信している。
- (5) ホームページの「中学生のみなさんへ」に学校紹介と工業科に関する説明会の動画を掲載している。
- (6) 本校横の河川の景観復元活動や地域のボランティア活動へ積極的に参加している。また、地域の意見を調査し防災に関するものづくりを行い地域へ貢献している。
- (7) 吉田高校の公式 YouTube 上で各種活動の動画を公開している。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程編成の工夫・改善

ア 普通科

1 年次は2 クラス均等のクラス編成を行っている。国語・数学・英語に関しては、習熟度別学習を実施しており、2 クラスを国語、数学・英語は2 講座（AB）に分かれて授業を行っている。2 年次から就職類型（Ⅰ型）1 クラスと進学類型（Ⅱ型文系・理系）1 クラスに分かれる。就職類型では2 年次に商業科目を履修し、就職の際に必要な資格取得にも力を入れている。3 年次には商業科目以外にも、地歴や家庭科の選択科目を設定し、自分の進路に適した授業が受けられるように工夫している。進学類型は、四年制大学への進学に対応した、普通科目を重点的に履修する授業構成になっている。

イ 農業科（生産食品科）

1 年次は国語で習熟度別授業、数学・英語ではチームティーチングを取り入れ、生徒に応じたわかりやすい授業が実施できるよう工夫している。2 年次から生産類型と食品類型に分かれ、生徒の適性や進路希望等に応じた教育課程を編成している。進学希望者に対しては、英語・理科の選択科目を取り入れている。総合的な探究の時間は、3 年次に履修する、課題研究3 単位に代替している。

(2) 学習評価の在り方

各教科・科目の内容や目標だけでなく、学習を深めるためのアドバイスを併記したシラバスを作成し、ホームページに掲載している。それを通じて、評価の規準となる観点の趣旨を、生徒・保護者に周知し、育成すべき学力を教科内で共通認識している。観点別評価では、考查問題を研究し「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」の内容をバランスよく出題する工夫をしている。「学びに向かう力」についてはノートやレポート、活動状況を総合的に判断した評価をおこなっている。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 非常勤講師や、分校と兼務をする教員もあり、時間割の制約が多くなっている。
- (2) 不登校傾向のある生徒や、学校生活に順応しにくい生徒に関する共通認識を持ち、その対応について検討していく必要がある。

3 入学生確保に向けて工夫していること

- (1) 6 月の平日に、中学生一日体験入学を二日間で実施
- (2) 学校 PR 動画の作成と学校案内リーフレットの作製
- (3) 生産食品科で、鬼北町内全ての小・中学校との連携学習を実施している。
- (4) PTA 通信「北辰」やホームページ、インスタグラム等によるタイムリーな情報発信
- (5) 地域みらい留学事業への参加
- (6) 県外生徒バスツアー事業への参加、県外生徒に日程を合わせたオープンスクールの実施
- (7) 鬼北町と協力のもと公営塾や学生寮の設置

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 農業・普通科のくくり募集について

1年次に全員が農業科目「農業と環境」、「野菜」、「総合実習」を履修することで、農業に関する基本的な知識・技能を身に付けさせる。その上で、2年次以降の「総合的な探究の時間」（普通科）や「課題研究」（農業科）において、現代の農業や地域が抱える課題を見つけ探究する活動を通し、地域に貢献できる人材を育成することを目指している。

(2) 普通科の教育課程

2年次に「文学国語」、「論理・表現Ⅰ」、3年次に「文学国語」（継続履修）、「論理・表現Ⅱ」、学校設定科目の「英語探究」、「理科探究」を選択履修できるようにしている。進学面での進路実現に向け学力を向上させるとともに、面接や作文等で自分を表現することができるようにしている。

就職希望者に対応し、2年生で「ビジネス基礎」、「簿記」、3年生で「ビジネス・コミュニケーション」、「情報処理」が選択履修できるように編成し、ビジネスに関わる多くの検定資格に挑戦できるようにしている。

(3) 農業機械科の教育課程

農業機械科では、生徒及び地域の実態を踏まえ、機械類型と生産類型の2つの類型を設定している。今後の社会における持続可能な農業の在り方について学習する必要性に対応している。

両類型の共通科目として、2年次に「農業機械」、「草花」、3年次に「機械工作」を配置している。機械類型では、2、3年次に継続して「自動車工学」、3年次に「機械設計」が学習できるようにしている。生産類型では、1～3年次までに「野菜」を合計6単位履修できるように配置している。

両類型とも上級学校への進学を目指す生徒に対応するため、「論理国語」、「論理・表現Ⅰ」を選択履修可能としている。

(4) 「総合的な探究の時間」（コスモスタイム）の実施

地域に学び、自己の進路意識を高める中で、自他の意見を取り入れ、即戦力の人材として、地域に貢献できる人材の育成を目指している。

1年生は3日間の就業体験を行い、生徒の進路意識を喚起している。2年生では地域を題材にしたテーマ別研究やスピーチを行うなど、地域課題の解決に向けた探究活動を通して進路学習に結びつけている。3年生では、面接試験対策講座や資格取得講座等を計画し、地域の方との対話を通して、地域の人材として必要な知識や技術を学び、進路実現に向けての効果的な学習を行っている。

(5) 通級による指導（自立活動）について

1 年次は教育課程に加える履修方法で、2・3 年次は選択教科の一部に替えて履修できるようにしている。進学希望により選択できない生徒や追加の必要性がある生徒に対しては、教育課程に加える履修方法で2・3 年次にも1 単位をそれぞれ配置し、自立と社会参加に向けた「生きる力」の育成を目指すために必要な、資質と能力を身に付けさせることを目指している。

(6) 学習評価の在り方

観点別学習状況の評価の確実な実施に向けて、年間指導計画や考查問題に評価の観点を明示するなど学習評価・指導の改善を行っている。その中で、学習意欲向上のために、視覚的に理解しやすいようなスライドの投影や I C T 機器の活用に努めている。また、学習支援の必要な生徒に対して、支援員やサポートに入る教員と連携して教科指導にあたり、少しずつでも「できた」という自信を持たせるようにしている。こうした成功体験を積み重ねることで、学習への取組が改善している生徒もいる。一方で、クラスの中での習熟度に関差が見られ、授業内容が理解できている生徒への対応が不十分になることがあるので、発展的な課題なども用意しておく必要がある。

現在、支援を必要とする生徒が増えている中で、評価についての職員間の共通理解をもとに生徒の状況に即した評価規準の策定に難しさを抱えている。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 時間割作成の際に、農業科、保健体育科、家庭科、他校との兼務教員、時間講師、特別教室を使用する授業等を優先に組む必要があるため、それ以外の教科のバランスを取ることが難しい。
- (2) 教員数の関係から、校務を担当するすべての教員が複数の校務分掌を兼務しており、校務負担の平均化が難しい。
- (3) 北宇和高校との兼務の教員が増え、両校での授業準備や生徒指導、時間割変更などのスケジュール調整などで苦労している。

3 入学生確保に向けて工夫していること

令和7 年度募集停止のため取組は無し。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程編成の工夫・改善について

農業科においては、1年次に基礎科目を、2・3年次には地域に根ざした専門科目を履修させ、生徒の能力や適性が十分に発揮できるように配慮している。「食品製造」や「地域資源活用」の科目では、特産品を生かした加工品作りやフィールドワークを通して地域の魅力を再確認するとともに、地域に貢献できる人材の育成を目指している。また、数学においては1・2年次で数学Ⅰ、3年次で数学Ⅱを設定することで、進学希望する生徒にも対応できるようにしている。

普通科においては、2年次より主に就職や専門学校への進学希望者を対象とするⅠ型、四年制大学や短期大学への進学希望者を対象とするⅡ型の二つの類型を選択できるようにしている。さらにⅡ型は文系・理系の大学進学希望者の多様な進路希望に応じて科目が選択できるように工夫した。Ⅰ型では芸術科目や家庭科目、商業科目を選択でき、Ⅱ型では国語・地歴公民・英語に重点を置いた文系類型と、数学・理科に重点を置いた理系類型を設定している。

また外国語教育の強化として、愛南町教育委員会と連携をとることで、本校には常駐のALTが配置されている。英語の学力向上に貢献するとともに、南宇和高等学校教育振興協議会の支援による海外研修を実施する際も、ALTによる事前学習指導を行っている。

(2) 学習評価の在り方

愛媛県県立学校学習評価の手引をもとに、各教科にて観点別評価を行っている。授業担当者が生徒に学習の評価方法について説明するとともに、シラバスを作成し、学校ホームページに載せている。また、教科会や教育課程委員会等を実施し、評価の在り方や方法についても改善に努めている。

2 教務関係実務に関する問題点

校務支援システム担当者への業務が集中しており、特に、年度末・年度初めの処理やトラブル時に対応する担当者への負担が大きい。支援システム担当者を常駐していただくか定期的に研修会等を開催してもらいたい。また、昨年度より出欠席の管理を「日々入力」に移行している。毎日退勤前に、忘れず入力していただくよう声掛けを行っている。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) 体験入学・出身中学校訪問

普通科及び農業科ともに、中学3年生とその保護者を対象として体験入学を実施している。授業や部活動の体験や、施設案内等を行い、本校への進学意欲を高めている。また、管理職や担当者とともに、各中学校の卒業生がその中学校に出向き、本校の魅力を話すことで中学生・保護者にアピールしている。

(2) 南高通信・ホームページ等での情報発信

「南高通信～風は南から～」を作成し、地元中学3年生全員へ配布し、積極的に広報している。また、学校の公式ホームページでの情報発信を充実させ、中学生・保護者に本校の様子を知らせるとともに、地域に対しても開かれた学校を目指している。

(3) 地元との交流

地元の各種イベントに、学校として、部活動として、ボランティアとして積極的に参加している。地域に貢献する生徒を育成しつつ、地元の児童生徒へのアピールにもつなげている。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 本校の教育課程の工夫・改善

ア 前期課程

(ア) 学校設定教科「コミュニケーション」

1年次は、言語活動を通した「適切に表現する能力」の育成。2年次は、英語によるコミュニケーション能力の基礎を養う。3年次は、英語による様々な言語活動を通して聞く、話す、書く能力を高める。

(イ) 高等学校科目「数学Ⅰ」の先取を実施している。

(ウ) 習熟度別学級編成

2・3年次は4クラスをABBB型の習熟度別に編成している。

(エ) 少人数講座編成、習熟度別講座編成、ティームティーチング

1年次の数学、3年次のコミュニケーションでティームティーチング。

1・2年次の英語、2・3年次の数学で少人数または習熟度別講座編成（1クラスを2講座）。

イ 後期課程

(ア) 5・6年次における類型の設置

サイエンス、ヒューマニティーズ5教科型、ヒューマニティーズ3教科型2類型3コースを設置。

(イ) 習熟度別学級編成

4年次は4クラスをABCC型の習熟度別に編成している。

(2) 学習評価の在り方

学習評価については、生徒の学びの評価にとどまらず、学習状況を適切に捉えるために、評価の観点について、各教科会で研究を深めている。また、教師の指導改善や生徒の学習改善につなげていくために、各教科における学習評価の在り方を踏まえ、教職経験豊富な教諭による師範的研究授業の実施後、他の教諭による研究授業を実施している。相互の研究を重ねて実践力を高め、授業力の向上を図っている。

授業に関するアンケートの結果を踏まえ、成績評価だけでなく、授業の改善に生かすことができるように各教科の特性に応じた研究を重ねている。

2 教務関係実務に関する問題点

(1) 教育課程の充実に反して時間割編成の硬直化

生徒の適性や多様な進路希望に対応できるように、後期課程では選択科目を増やし、前期課程では少人数講座・習熟度別編成講座を編成している。充実した指導ができている反面、複数講座の同時開講等の増加により、時間割編成が硬直化している。令和8年度にスポーツコースが開設されると、ティームティーチングや複数学年同時開講の授業等も増えるため、さらに複雑化する可能性がある。

(2) 日程・時程の調整

教員小集団による会議の回数に限りがあり、教育課程編成のための会議も限られた回数で話し合い、結論を出す必要がある。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) 学校説明会、体験入学の実施

学区内の全ての小学校に案内を配布し、6月に学校説明会、10月に体験入学会を実施している。体験入学会では、学習への興味関心を持たせる教材を工夫し、好評を得ている。また、サッカー部をはじめとする部活動見学にも多く参加している。

(2) 小学校における学校説明

管理職と教務課が学区内の小学校に学校案内を持参し、本校の特徴などを説明し、その結果として(1)における参加者の増加につなげている。

(3) 地域に出向いての説明会

地域の公民館などを利用して夕刻などの時間帯に学校説明会を開催し、個別相談にも応じている。

(4) 学校ホームページの活用

全職員の当番制にし、毎日学校ホームページを更新し、学校の様子を公開している。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

本校は、前期課程（1年～3年）は「中学校学習指導要領」に、後期課程（4年～6年）では「高等学校学習指導要領」に基づいて教育課程を編成している。ただし、文部科学省告示「中等教育学校並びに併設型中学校及び併設型高等学校の教育課程の基準の特例を定める件」によって、一部教科において高等学校の指導内容を前期課程において先行して実施している。

(1) 類型・コースの設定に関する工夫

第3学年の11月に、後期課程への進級意志の確認と芸術科目の選択希望調査を行う。第4学年では、自分の進路と適性に対する理解を深めながら各教科をバランス良く学習し、学年の終わりに文理のコース選択を決定する。第5学年からは人文、理数のコースに分かれたクラス編成を行い、それぞれの適性と進路に応じた学習に特化する。

(2) 各教科における工夫

ア 第3学年の数学科、理科、英語科では、第4学年で使用する教科書を副教材として利用している。

イ 国語科では、第3学年の学習事項と関連を持つ第4学年の学習内容を、先取りで取り入れて学習させている。

ウ 生徒の多様な能力・適性、興味・関心、進路希望等に対応し、その個性の最大限の伸張を図るため、第6学年人文コースでは、「国語探究」「世界史研究」「世界史考究」「数学総合」「化学探究」「音楽表現」「美術表現」「書道表現」「情報探究」等の多様な学校設定科目を開設して、特色ある教育課程を編成している。

エ 平成30年告示学習指導要領に基づく新しい教育課程については、大学入学共通テスト「情報」の各大学の採用状況等を研究し、校内教育課程委員会を定期的に開くことで、より洗練し完成度の高い教育課程を目指している。

(3) 学習意欲向上のための工夫

ア 前期課程では、まず全教科が連携して基本的な学習習慣の定着を図る指導を行うとともに、各授業では生徒自身が活動する場面を多く設けること、教材・教具を工夫し興味を喚起すること、生徒の学習意欲を高める評価の研究を進めること等と呼び掛けている。

イ 後期課程では、国語、数学、理科、英語で習熟度別講座を設け、生徒の学力や進路希望に細やかに対応した学習指導を行っている。

ウ 中高一貫教育校の課題である、3・4年の中だるみ現象をなくすため、令和2年度から第4学年で学習習熟度の高いクラスを1クラス設けた。これにより、3・4年生徒の学習意欲や競争心を高めるとともに、第4学年でそれぞれの学力に応じた学習指導の効率化と個に応じた進路の意識付けができ、よりきめの細かい指導が実現できることを目指している。

(4) 学習評価の在り方について

ア 生徒に対して授業アンケートを実施し、結果を教科会で分析・検討して授業改善に役立てるとともに、学習評価の在り方や教育課程の改善点についても話し合っている。

イ 2学期末に生徒、保護者、教職員対象に学校評価アンケートを行い、結果を全教職員で共有するとともに、各課で分析・検討して次年度の改善に生かしている。

ウ 前期課程では、観点別評価を想定して課題及び考查問題を作成している。学習指導計画表とシラバスに観点別評価の基準及びその指導計画を掲載し、学習目標を明確化するよう工夫している。評価の通知については、観点別評価を基に評定を決定し、通信簿で生徒・保護者に通知するとともに、個々の生徒の学習状況を文章で記述することで生徒の学習意欲の向上を図っている。

エ 前期課程は、令和3年度から各教科の評価の観点点が3観点に変更された。各教科において評価方法の工夫・改善を継続するとともに、学習評価を通して教科指導の充実を図っていききたい。後期課程は新教育課程が段階的に施行されていくため、各教科で観点別評価の基準と具体的な評価方法について研究を進めながら、生徒の学習改善と教員の指導改善につなげていきたい。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 生徒間の習熟度の差が大きい本校の現状に対応するため、数学科においては第3学年、英語科においては第4学年から、少人数・習熟度別指導を行っている。また、国語科は第5学年以降、理科は第6学年において、2学級2講座の習熟度別指導を行っている。このため、時間割の編成及び変更が極めて難しい状況である。
- (2) 後期課程、前期課程それぞれに総合体育大会、修学旅行（前期では研修旅行と呼ぶ）などの行事があることに加え、第2学年は「えひめジョブチャレンジU-15」に5日間参加するなど、多様な行事が実施されており、年間行事の配置や考査日程の設定が難しい。一方で前期課程では、総授業時数1015時間を確保するために、より一層の行事の精選が必要となっている。また、一日の時程についても、前期課程の給食指導の時間を確保するため、時程の設定や諸行事の実施にも格段の注意を必要とする。
- (3) 校務支援システムは、指導要録や出欠管理で担任の仕事量軽減に一定の成果を上げているものの、中等教育学校では前期課程と後期課程で別々のシステムとなっていることをはじめ、複雑さや不便さが残っている。後期課程の新教育課程実施に伴う評価に関する機能に変更されて3年目になったが、システムの利活用については教員への周知徹底が引き続き必要である。

3 入学生確保に向けて工夫していること

- (1) 例年は、学校説明会、学校見学会、授業体験講座を開催し、本校への入学を希望する小学生及びその保護者に対して、本校の特長や魅力を伝えるよう努力している。
 - ア 学校説明会は、例年6月中旬から7月初旬にかけて、中予各地区の公民館を会場として開催している。昨年度は、E S推進課の進行の下、学校紹介のプレゼンテーション、説明及び質疑・懇談を行った。
 - イ 学校見学会は、7月下旬に小学生及び保護者を対象に本校で開催し、教職員・生徒による学校紹介、学校施設見学、ステップアップゼミ（夏季補習）見学等を行った。
 - ウ 授業体験講座は10月上旬、小学生(高学年)の希望者を対象に本校で開催している。例年、本校教職員による授業体験講座（11講座）、学校紹介、生徒の体験発表、質疑応答を行っている。昨年度は各グループに分けて実施し、見学会で実施できなかった在校生参加の座談会も行い、参加児童・保護者からも好評であった。
- (2) 文化祭及び運動会の地域への公開
 - 6学年が一緒になって学校行事に取り組む本校の魅力を伝えるため、運動会は9月に、文化祭は「陽光祭」と名付け3月に、それぞれ2日間で実施している。昨年度は、陽光祭を平日に開催し、食品バザーを再開し保護者の入場を可能としたが、引き続き感染対策に留意しながらの対応となった。
- (3) ホームページでの情報発信の取組
 - 学校ホームページは、教育活動や学習活動等に関する情報発信手段として、保護者や地域からの理解や協力を得るためだけでなく、入学生の確保にも有効である。本校では、当番の教員がほぼ毎日記事をアップロードしており、生徒の活躍の様子をタイムリーに掲載することで本校の魅力の発信に努めている。

令和7年度 県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程編成の工夫・改善について

本校は、令和4年度末を以って、「地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る事業特例校」の指定が終了したが、今まで培ってきた成果を生かし、「総合的な探究の時間」において、課題研究の学習活動や探究活動を継続して実施するとともに、6年間の計画的かつ継続的な教育を推進し、生徒の多様な適性や進路希望に柔軟に対応できるよう配慮している。

ア 類型の設定

5年次から、「文科系」、「理科系」の二つの類型に大きく集約し、各類型の中にⅠ型とⅡ型のコースを設けている。Ⅰ型は、基礎科目の履修に重点を置いた進学コースであり、Ⅱ型は、共通教科を平均的に履修し発展的な学習を行う進学コースである。いずれも生徒の個性が生かされるよう配慮している。

イ 学校設定教科

6年次には選択教科として学校設定教科「グローバル・スキル」を設置して、英語での会話力・表現力・コミュニケーション力の向上を目指している。

ウ 学校設定科目

「数学研究Ⅰ・Ⅱ」、「探究理科Ⅰ・Ⅱ」、「実用数学」などの学校設定科目を設置し、学習内容の理解を深めるとともに、社会の一員としての資質の向上を目指している。

エ 専門教科・科目の開講

専門教科「家庭」のうち、「保育基礎」、「ファッション造形基礎」、「フードデザイン」の各科目を開講し、生徒の多様な進路希望に対応できるよう配慮している。

オ 少人数指導及び習熟度別授業の充実

前期課程では、必要に応じて数学・英語において、基礎・基本の定着を図るための少人数指導や習熟度別授業を展開し、きめ細かな指導を推進している。

後期課程では、数学・英語において少人数の習熟度別授業を実施し、確かな学力の定着・向上を目指している。

(2) 学習評価の在り方について

前期課程では「観点別学習状況の評価」が定着している。

後期課程では、定期考査や小テストの成績、課題・レポート、実験・実習、平常の学習状況を総合して評価を行っている。客観的かつ、公正・公平に評価していくことが原則であり、評点を基に観点別学習状況の評価を実施している。近年、観点別評価の在り方について多くの教科から意見が出ており、現在評価の在り方について検討しているところである。

2 教務関係実務に関する問題点

(1) 授業運営上の問題

生徒の学力差は大きく、学力保障・進路保障を視野に入れた場合、授業実践力の向上が求められる。また、反復練習など、習熟活動が重要である。

(2) 時間割編成について

前期課程での少人数指導・習熟度別講座編成や、後期課程の各コースの特色を生かした時間割などから、生徒に対する細やかな指導が行えるようになった反面、時間割編成が困難である。また、中高一貫教育校は学校行事が多く、特別時

間割編成に多大な労力を要する。

(3) 校務支援システムについて

校務支援システム導入以後、担任としては、かなりの業務改善につながっている。今年度から、担任の負担軽減を目的に出欠の日々入力に切り替えた。しかし、実際に運用できるまでの準備や管理・点検面で膨大な時間と労力を要するため、教務関係者にとっては、業務量が増加している。

(4) 授業時間数確保について

前期課程では年間 1,015 時間の授業時数確保のため、学校行事の精選、考査発表中の 7 限目の授業の実施などによる対応が必要である。

また、後期課程では長期休業中にセミナー(補習)を実施することで、学力の向上に向けて取り組んでいる。

(5) 中等教育学校における問題

校内に二つの学校が存在している状況で、それぞれ学校行事等の内容も異なっているが、それを全校で実施しなければならない場面が多く、学校行事の精選は難しい。そのため、前期、後期それぞれの特色を生かす取組ができにくい。

また、高校入試が行われないことにより、中だるみの状態や、前期課程から後期課程への接続がうまくできていないなどの問題点がある。そのため、進級説明会や年度当初のオリエンテーションにおいて、後期課程での学校生活に対しての生徒・保護者への働きかけを行っている。

3 入学生確保に向けて工夫していること

本校は、新入生募集停止となっており取組はなし。

編入学については、本年度から「部活動の取組・成果等を重視した選抜」を採用し、部活動の活性化を図ることとした。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

本校は総合学科として、2、3年次に多くの選択科目を設定している。また、高大連携授業を各学年で開講しており、大学・高校教育の円滑な接続方法の研究・開発を進展させ、国際交流にも力を注ぎ、持続可能な開発目標SDGsへ向けた取組への意欲を高めることによって、グローバルな人材の育成を目指している。

(1) 選択科目について

進路希望に応じて選択する科目を示したモデルとして、生命科学系列、物質科学系列、教養文化系列、社会文化系列の4つの系列を設定している。特に3年次には2単位制の選択群を7つ、合計14単位分の選択群を設置している。

(2) WWLコンソーシアム構築支援事業について

令和4年度に最終年を迎えたが、引き続きグローバル人材の育成を目指し、学校設定教科として「グローバル・エデュケーション」の設置を継続している。生徒自らが興味関心のある分野を見つけ、進路希望の決定に役立たせている。特に3年次選択制2単位の「グローバル・スタディーズⅡ」と「課題研究Ⅱ」では、大学進学後の学習を見据えた学習内容となるよう令和4年度より実施し、今年度も継続している。

(3) 学習評価の在り方について

昨年度より全学年で実施している観点別評価について、100点法での学習評価を辞め、3つの観点での評価から評定を算出するように変更した。それによって日頃の授業の様子や単元別テストなどから評価を行い、生徒一人ひとりを見て絶対評価ができるようになった。また日頃の学習評価から授業展開の見直しを行い常に改善を意識し、教科ごとに検討している。また、校内における観点別評価の一定の基準を統一するため、観点別評価シートを作成し、各教科で使用している。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 非常勤講師や高大連携科目による時間割作成上の制約が多くある。そのため、時間割において、1日の授業数が曜日によって差のある教員が多い。また、高大連携科目のない曜日に学校行事を実施しているため、曜日により年間授業時間数に差が生じるが、調整が困難である。
- (2) 3年生の授業では、選択群が多く複数教科の教員が同時間に授業を行っているために時間割変更ができない。そのため出張等の場合は自習や他の教員へ負担をかけることになっている。

3 入学生確保に向けて工夫していること

大学の附属高校という、本校の特性を活かしたPRに力を入れている。例えば、夏期休業中に中学生や保護者を対象に行う学校見学会において、生徒が高大連携授業等による成果を発表する場を設定している。また、2年生が愛媛大学の教員の指導で実施した「課題研究Ⅰ」の成果発表会を愛媛大学の施設で行い、中学生やその保護者にも案内している。本校での学習内容を理解していただき、本校で学習したいという意欲向上につなげてもらいたいと考えている。

令和7年度 県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

- (1) 学習能力の多様な生徒に対し、実態に即した教育課程を編成している。
- (2) アドバンス・美容・チャレンジ・特進コースの各4コースの特色を生かすべく編成している。
- (3) アドバンスコースでは、進学と就職のどちらにも対応できるように調理・福祉等、の授業内容を精選して教育している。
- (4) 進路に関して早い時期から意識付けをさせるため、総合的な探究の時間の精選、ホームルーム活動での活用、また進路ガイダンスや進学相談会等の学校行事の充実を図っている。
- (5) 学習指導要領の弾力的な運用を最大限に生かし、私立学校としての特色を随所に活かしたカリキュラムになるように考慮している。
- (6) 学習評価は、生徒の能力を伸ばすためのものとして捉え、生徒の意欲を引き出せるような授業展開、評価を心掛けている。
- (7) わかる授業の実践に向けてスタディサブリを導入し、進学に対応した学力および、基礎学力の定着を図っている。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 合格者招集日まで入学者数が確定せず、クラス編成や補助教材の数等、新年度の準備が遅れる。
- (2) 遠隔地からの通学生が多いため、始業時間・終業時間に制約を受ける。
- (3) 教員数が限られているため、出張等に伴う時間割の変更に苦慮している。
- (4) 生徒によって習熟度の差が大きく、学習評価の基準に苦慮している。
- (5) 生徒の多様な進路を踏まえて、教員数が限られているため、選択科目の精選に苦慮している。

3 入学生確保に向けて工夫していること

- (1) オープンキャンパスや入試個別相談会を通じて、本校の魅力をアピールしている。
- (2) 各地区の担当者が定期的に中学校を訪問し、信頼関係を構築できるように努めている。
- (3) 中学校教員を対象とした入試説明会を実施し、募集要項等の説明の前に、授業参観を行っている。
- (4) 学校案内を各中学校に配布している。

令和7年度 県立学校教務主任研究協議会資料

1 教務課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

本校は、普通科（Ⅰ・Ⅱ）と調理科を設置し、3学年計9クラスの学校である。近年の少子化による入学者数の減少や、価値観の多様化などの課題を抱える中、20s' Plan をテーマに、生徒一人ひとりの可能性を伸ばし、地域社会から信頼される学校づくりに教職員全員で取り組んでいる。

- (1) 普通科Ⅰ・Ⅱは、就職や大学・短期大学・専門学校への進学を目指し、多様化する社会に対応できる知識と技術を養成し、各種検定に挑戦し資格を取得できるよう授業を展開している。
- (2) 調理科は食品や調理に関する専門的な知識と技能を習得するとともに、調理師免許を取得し、卒業後調理に関わる職業に従事できる人材を育成することを目的としている。
- (3) 普通科Ⅰは2年生で既定の成績をもとに国語・数学・英語の授業に習熟度別学習を取り入れ、3年生では希望する進路に応じて商業科目と入試対策科目の選択履修を可能としている。
- (4) 基礎学力の定着を目指すため、国語・数学・英語3教科において学びなおしを目的とした「マナトレ」を導入し、朝学を実施している。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 入学生徒数が毎年新入生招集日当日まで確定しないため、時間割等、新年度の準備が遅れる。
- (2) 教員数が確保できず、通信制課程の教員にも数時間授業を担当してもらっている。
- (3) 非常勤講師や調理科の実習等の制限があり、時間割の編成が難しく科目の配分にアンバランス及び画一化を発生させている。また曜日によって教員の担当時間数に偏りが見られる。
- (4) 学校行事との兼ね合いの中で、授業時数をいかにして確保していくかの問題がある。
- (5) 教員数が少ないため、出張等で時間割変更が生じたとき、同日に同じ科目が重なる場合がある。
- (6) ICT 機器の積極的活用を推奨しているが、技術面のみならず環境面でも課題があり、一部限られた教員のみに偏っている。

3 入学生確保に向けて工夫していること

- (1) 体験入学(8月)とオープンスクール(11月)に参加することで出願権が得られる参加体験型の入試を導入している。体験入学は夏休み中に2日間開講することで門戸を広げ、オープンスクールにおいて集団面接を実施している。
- (2) 中高連絡会や学校説明会・校内見学会等、学校生活の様子を中学生に知ってもらう機会が多く取れるよう、広報活動を充実させている。
- (3) 部活動を充実させるとともに、中学生を対象とした部活動体験入部を実施することで、本校を希望して入学する生徒の確保を図っている。
- (4) ホームページや本校紹介ビデオの充実を図っている。
- (5) 調理科生徒を中心に、公民館行事等地域の活動やボランティア活動、せとうちみなどマルシェに積極的に参加し、本校の教育活動を地域にアピールできる機会としている。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

本校は普通科・美術科の2学科で構成されており、普通科には11のコースがあるため、それぞれの学科・コース特徴ある教育課程を編成している。

(1) 普通科のコースの特徴

ア 入学時より特進プレミア・特進エクセレント・特進スタンダードコースがあり、教育課程は1年次においては共通であるが、それぞれのコースに応じた学習指導を行っている。

2年次からは、文系3教科型コース・文系5教科型コース・理系コースに分かれ、それぞれの進路に応じた教育課程を編成している。

イ 特進国際コース・特進スポーツ科学コースは、それぞれ英語に特化したコース、運動部生のためのコースという特徴があり、その特徴を意識した教育課程を編成している。また、2年次からは、国際コースは3教科型と5教科型が選択できる。スポーツ科学コースは選抜クラスを設け、進学に特化した教育課程を編成している。

ウ 総合進学コース・情報コース・食物科学コースは、それぞれの特徴に応じた教育課程を編成するとともに、進学・就職のどちらでも選択できるような指導を行っている。

(2) 習熟度別クラス・授業

特進コースにはそれぞれ1年次より選抜クラスを設けている。2年次からは、さらに科目によっては習熟度別に分かれての授業を実施しているクラスもある。

(3) 学習評価の在り方

観点別評価の基準に沿って評点を算出し、評定に換算する方法で学習評価を実施しているが、細かな方法は教科やコースで検討して行っている。課題としては、上記のように多くのコースに分かれているため、評価をすべて公平にできているか疑問に思われる点が存在している。評価基準の見直しも含めて、検討を重ねている

2 教務関係実務に関する問題点

(1) 校務支援システムを令和4年度より導入しており、校舎改築と並行して使用環境の整備を図っているが、システムの変更や運用に関わる教員の負担が大きい。また、進学課など他部署との連携も今後の課題である。

(2) 時間割作成において、多様なコースや授業選択、特別教室、非常勤講師の条件など、多くの制約があるため、時間割の柔軟性に欠ける点がある。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) 募集要項を充実させ、各学科・コースの特長や卒業後の方向性を明確にする。

(2) 生徒のニーズにあった学科・コースを設置することにより、多様化する生徒の進路先に少しでも対応できるようにする。

(3) 学校説明会を夏季休業中に数回実施する。何回か実施することにより、1人でも多くの中学3年生生徒に参加してもらう。

(4) 2学期には入試相談会や入学試験対策講座を実施し、学科・コースの説明はもとより全体会終了後、保護者の個々における質問内容に対応できるコーナーを設置する。

(5) 保護者対象の相談会開催において、平常日、日曜祝祭日も仕事のある保護者のために、日時を設定した上で、保護者のためのナイト説明会を実施している。

(6) ホームページの更新頻度を上げたり、インスタグラムを利用したりすることで、学校生活が目で見えてわかるように工夫している。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

- (1) 生徒が個々の特性を把握し、それを伸ばして行くために、希望する進路に応じた多彩な学科やコースを用意し、教育課程を編成している。また学科・コース・系列により進路希望が異なるため、進路実現と直結した教科指導を行う。

普通科

- ・スポーツコース → スポーツ進学コース/スポーツ特進文系・理系コース
(スポーツと勉強を両立させ、大学進学への道を拓く「文武両道」コース)
- ・文理特進コース(文理選択で大学進学を目指すコース)
- ・国際特進コース(英語の学習時間を確保し、留学や探究など英語に親しみ学ぶコース)
- ・総合コース
 - 進学コース
(推薦入試による四年制大学等への進学を目標に、合格に向けた対策に力を入れる)
 - 保育コース
(保育実習、高大連携で大学の講師の授業等を通し、保育系大学等への進学)
 - 福祉系列
(「介護職員初任者研修」を修了し、医療・福祉関連への進学や就職を目指す)
 - IT・情報コース
(情報技術の学習やITパスポートの修得、情報関係の進路を目指す)
 - 調理コース
(調理実習などを通じて食物に関する多様な知識の習得を目指す)
 - ビジネス・公務員コース
(ビジネスの現場で必須の上級検定を取得し、企業や公務員就職を目指す)

看護科(5年課程)

- ・5年間かけて正看護師を目指す

- (2) 上記主旨を生かすために多様な学校設定科目を上限近く設けている。
国際特進コース「英語探究」、福祉コース「福祉総合演習」、保育コース「ピアノ」「子どもの発達と保育」、調理コース「フードコーディネーター」IT・情報系列「ネット動画クリエイター」などがある。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 出欠席管理や成績処理など生徒管理に業者のシステムを採用しているが、本校の仕様に合わせていく工程に時間がかかり、修正したくてもすぐに編集ができない。
(2) 観点別評価を適切に処理するため、Excelでの入力シートを準備しているが、確認などの労力と時間が十分に割けない。評価法が煩雑になり、統一が難しい。

3 入学者確保に向けて工夫していること

- (1) 生徒の多様なニーズに応えるため、複数の学科、コースを設置している。2年次の選択肢も多い。
(2) 学校説明会や体験学習会を開いて中学生に本校のことを知ってもらい、本校を志望校の1つとして意識してもらう。
(3) ホームページ/Instagram等SNSでの発信を充実させ、本校の教育活動を生徒・保護者に広く情報発信している。
(4) ロイロノートを活用した学習に必要なICT教育設備(1人1台端末・全教室プロジェクター設置)を充実させている。
(5) 不登校生に対しては補習授業を実施するなど、高校卒業を支援できる体制を整えている。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程編成の工夫・改善

本校は、生徒の能力・適性・希望進路に応じた指導を行うため、特別進学コースと進学コースを設置している。特別進学コースは、国公立大学・難関私立大学の合格を目指すコースとして、一方、進学コースは、主に推薦入試や同系列の大学・短期大学への内部進学などを目指すコースとして設定している。どちらのコースも国語と英語に習熟度編成による授業を取り入れている。また、英語の授業には、クラスごとに外国人講師と連携した英会話の授業を取り入れ、英語におけるコミュニケーション能力が高められるようにしている。

(2) 学習評価の在り方

観点別学習状況については、完全移行したことで、各教科ともさらなる改善を行なっている。評価方法については実技教科などの教科間で多少の差異がみられるが、定期考査、課題考査、単元小テスト、板書ノートや作品などの提出物、授業態度といった項目を総合的に判断している。しかし、適切な評価が行えているかどうかという点については、まだまだ課題が山積している。例えば、考査重視の教科と実技教科の平常点の割合、選択教科による成績の差異、特別進学コースと進学コースとの平均点の調整など教務上の問題が散在している。

2 教務関係実務に関する問題点

(1) 本校では、コース選択や科目選択は、ともに生徒の希望で実施している。そのため、希望人数が年度によって異なるため、クラス編成、講座編成、時間割編成に多大な労力を要している。また、「総合的な探究の時間」について、3年間を通じてカリキュラムを作成するが、系列大学との連携も踏まえ手探りでやっている現状である。

(2) 成績処理など実務ではコンピュータ処理をすることが多くなっており、必然的に情報処理技術にたけている教員がそれらを担っている。他の部署との兼任をしている教務課教員が多く、また受け持つ仕事量も増加している。そのために、教務課教員の多忙も恒常化し、教務関係実務をこなすことが困難な状態にあるため、仕事の効率化・軽減化を強く進めている。

(3) 年度末は、中学・高校の入試業務と成績処理・卒業認定会議など業務が多く、またミスの許されない状況であり、肉体的にも精神的にも負荷が多くかかっている。他にも、指導要録の確認、新入生の受け入れ準備などをしつつ、時間割の編成に当たっている。時間割編成は、3月下旬から4月当初の限られた期間で、時間割編成をしなければならない。その編成作業は、教務課教員が中心となっていて行っている。習熟度別授業、同時開講授業の増加、それに伴う教室調整、非常勤講師の増加、その条件などから時間割が硬直し、時間割編成をしたものの、その変更は年々困難な状態になってきている。

3 入学生確保に向けて工夫していること

本校では、入試広報課が中心となって、生徒募集を行っている。その主な業務は、生徒募集ポスターや学校案内のパンフレット作成である。そのパンフレットを持参して中学校や塾へ定期的に訪問している。また、6～8月の各月に1回ずつ、小中学校の児童生徒や保護者を対象としたオープンスクールを実施している。その主な内容は、本校の概要を説明し、授業参観や部活動体験などである。さらに、中学校教員を対象とした学校説明会や受験生を対象とした入試対策講座（3教科）などを実施している。また、部活動ごとでも体験教室などを行い、本校の生徒とのふれあい活動も行っている。ふだんの校内の様子をInstagram等のSNSを活用して、発信している。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成上の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 本校創立の趣旨に基づく学校設定教科・科目の設定

本校は、キリスト教主義に基づき、1891年に設立された高等学校である。そのことに基づき学校設定教科宗教を設け、学校設定科目として、聖書を設定している。また、毎朝、礼拝の時間を設けている。

(2) 生徒の興味関心に対応した教育課程の編成

職業科（調理科・福祉科）においては、資格取得のために必要な科目が決まっており、選択科目を自由に設定することは難しいが、普通科において、生徒の学習意欲向上に向け、生徒が興味関心を持ちやすくする科目の設定を行うよう選択科目において工夫している。

(3) 学習評価の在り方

学習評価においては、今まで知識偏重の考査の点数を基に評価を行っていた。学習指導要領が変わり、小中学校の学習評価に合わせた観点別学習状況の評価に基づいた評定を行うようになったが、今までの考査の点数を基に評価を出す方法から切り替えられない教員もいる。学習評価についての研修を繰り返し、3つの観点（知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体的に学習に取り組む態度）に基づく評価が行えるよう授業自体を変えていく必要がある。高齢の非常勤教員も多く、歩調を合わせるのが難しい。

2 教務関係実務に関する問題点

(1) 生徒指導要録の電子化

業務の効率化の観点からの校務支援システムの導入もあり、生徒指導要録については、電子化を図ろうとしているが、電子化した場合の校長印、担任印の扱い等細かな点で不明なことがある。

(2) 教員確保

教科・科目により教員が不足しており、一部の教科の教員に負担をかけている実態がある。高齢の非常勤講師、臨時免許や特別非常勤講師で対応しているが、なかなか根本的な解決に至らない。対応については、校長はじめ管理職が教員確保に奔走している実態がある。

(3) 働き方改革

教務と直接かかわる問題としてとらえにくいですが、上記（2）とは非常に関係していると考えている。働きやすい環境を整えるため、プロジェクトチームを作り、メリハリのある勤務ができないか検討を行っている。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) ブランディング

本校のイメージアップを図り、生徒、保護者やご家族が入学したいと考える学校づくりを行っている。高い授業料を払ってでも通いたい、通わせたいと思っていただける学校にするよう努めている。

(2) 科・コースの設定

中学生が学びたい、入学したいと思うような科・コースの設定を行っている。県立学校と違い迅速に行うことが可能であり、特色を出しやすい。

(3) 情報発信

保護者・家族に向けて、また、中学生に向けて、テレビ、新聞、ホームページ、インスタグラムやティックトック等を使った情報発信に積極的に取り組んでいる。担当者を設け、メディアに向け活動を発信するなど、情報を積極的に発信し、魅力をアピールするよう心掛けている。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程編成の工夫・改善について

本校には、普通科・工業技術科に、次のコース・系列がある。

- 普通科スーパー特別進学コース（文科系列・理科系列）
- 普通科特別進学コース（文科系列・理科系列）
- 普通科総合進学コース（文科系列・理科系列・情報系列・体育系列）
- 工業技術科（電気技術系列・機械制御系列）

第1学年はコースごとに共通履修、第2学年からは各系列に分かれて、各自の希望進路実現を目指した教育課程を編成している。必修科目をできるだけ第2学年までに履修し、第3学年で資格取得や進路実現のために必要な教科・科目を履修できるよう編成している。また、普通科特別進学コースの3年文科系列に文系特化類型（3教科型）を設けている。

工業技術科では、2年生を対象にインターンシップを実施し、3年生で「課題研究」（3単位）を履修させ、学習成果の発表会を行っている。勤労体験による職業観形成や、就職への生徒自身の意識を向上させる上で大きな成果を上げている。

また、普通科総合進学コースでは、令和8年度第2学年より、情報系列をデジタル類型とビジネス類型の二系列とし、その開設に向けて準備を進めている。

(2) 学習評価の在り方について

ア 教科シラバスおよび年間学習指導計画に沿って、指導内容と評価が一体化するよう心掛けられているが、定期考査を中心にした「知識・理解」に評価が偏る傾向にある。教員間で共通理解を図り、生徒の実態に応じた評価、意欲につながる評価に努める必要がある。

イ 令和7年度より、第一学期中間考査を取りやめることにした。また、5段階評定の基準を変更した。昨年度、定期考査の学級平均点が、一部の科目やクラス間でばらつきが見られた。適切な考査問題の作成および学習指導の工夫や改善が求められる。

ウ タブレットを積極的に活用し、これまで紙媒体で行っていた小テストや授業の振り返り等を、グーグルフォームを用いて評価につなげている。

エ ニュース時事能力検定、実用英語技能検定、日本漢字能力検定を準会場受験できるようにし、全校生徒に受験を呼びかけ、学習意欲向上につなげている。また、技能審査の成果に応じて単位認定するようにすることで、生徒の資格試験取得を促すようにしている。

2 教務関係実務に関する問題点

- ア 校内独自のシステムとグーグルワークスペースを併用することで、成績・出欠管理や指導要録や調査書の作成、部活動の活動成績、教員間の連絡等に利用している。科・コース・系列によって、教育課程や学校行事の時間数が異なることもあり、システムを開発・整備・管理する教員の負担が大きくなっている。
- イ ほとんどすべてのホームルーム教室に常設型の電子黒板機能付きプロジェクタとW i - F i環境が整い、ハード面の整備が進行している。一方この数年で、ほとんどの授業において、プロジェクタの使用頻度は増えたものの、I C T機器を使える教員とそうでない教員との差がある。教員のI C T活用スキルの向上や研修が急務となっている。
- ウ 非常勤講師の割合が高いこと、同時開講講座が複数あることなどにより、時間割の制約が多い。そのため、偏った授業配当になったり、時間割変更が困難になったりしている。
- エ 科・コース・系列が多岐に渡っていることもあり、教科書や副教材の注文ミスが発生した。教科主任だけに頼らず、多くの教員の目で確認し、間違いのないように処理しなければならない。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) ホームページによる情報発信

本校のホームページは、学校パンフレットの役割を兼ねた構成となっており、中学生と受験生保護者の閲覧を強く意識し、受験生の関心の高い進学実績や部活動等についてアピールするものとなっている。「情報の鮮度」にこだわり、学校の日常の様子をこまめにブログで更新し、受験生に学校生活をイメージしやすいように工夫している。

(2) 学校見学会、秋の保護者相談会の実施

夏休み中に「部活動見学体験会」、9月下旬に「学校見学会および保護者相談会」を実施している。また、推薦入試で受験を考えている中学生・保護者に対し、授業参観・部活動見学・個別相談などの機会を増やすことで、受験生の増加を図っている。

(3) 学校全体としての取組

組織的には入試広報部が入試業務全般、学校ガイドやパンフレットの作成、学校見学会、中学校訪問や高校説明会、学習塾との連携等に取り組み、生徒募集活動の中心となって活動している。また、進学実績と学校長推薦による就職100%を受験生とその保護者にアピールしている。

県立高校の特色入学者選抜の導入に伴い、より多くの中学生に興味関心を持ってもらえるように、令和7年度入試より、これまでの入試制度に加えて、新たな入試制度を導入した。

令和7年度 県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方について

本校では2年時より進路志望に対応する形で文系・理系に分かれる。それに対応すべく、理科および社会は2年時から科目選択を行う。文理の選択は勿論のこと、理科・地歴・公民の選択肢も極力生徒の希望に応じて広げている。

2025年度 2年生：文系57名，理系174名 ＊文系・理系混合3学級，理系2学級を編成

2025年度 3年生：文系68名，理系名176名 ＊文系・理系混合3学級，理系2学級を編成

文理選択の傾向としては、理系志望(特に医学部志望)が多い。高Ⅲより行われるコース別授業は、英語・国語・数学・理科について編成した。

全員が国立大学受験ということを前提としているが、その志望大学・学部は多岐にわたり、当然それに合わせた学習指導も必要になってくる。近年、私立の大学を受験する生徒が増え、海外大学の受験を考える生徒も出てきており、その対応を考えていく必要がある。

土曜日を開校日とし、授業時数を確保することによって学習効果を高めている。

教育課程の評価については各教科会に加え、教科主任会議、進学会議、各種模擬試験の結果報告会、各学年で学期毎に行われる学年会議などの場で活発な議論を行っている。また、生徒による授業評価・教員による学校評価の結果に基づいて、各教科会において検討をしている。

2 教務関係実務に関する問題点

科目選択に関しては極力生徒の希望を尊重する為、各講座の受講生徒数にバランスを欠くことになる。また、高Ⅲコース別授業を展開することで、講座数が増える為、教室数がそれに見合わなくなり、時間割編成時にはかなり苦勞する。

中学校も基本的には同じ行事予定を組むが、どうしても学校体育行事をはじめ、ズレは生じる。

多くの寮生に加え、遠隔地から通う生徒を抱えている為、寮日課やスクールバスの運行時間による制約がある。特に放課後を活用する場合、そういう生徒に配慮した行事計画を立てる必要がある。

登校しても教室に入ることが困難な生徒に対する学習指導・生活指導などは生徒相談室を設け最大限の配慮および指導をしている。

中学校もあるので、体育施設、音楽・美術施設、情報・技術・家庭科施設など2学校分あるべきだが、実際には中高で併用するという事態がどうしても発生する。その結果、時間割編成にはかなりの制約を受けることになるが、創意と工夫で支障なく運営できている。

3 入学生確保に向けて努力していること

保護者・一般の方々に対して校内での活動を見ていただく機会を出来る限り設けるように努めている。また、校内の様子が良く分かるように、ホームページにて生徒の活動の様様やお知らせを伝えるようにしている。同時に、入学を希望する生徒・保護者・学校関係者等への広報活動を行っている。特に、広報活動については、新型コロナウイルスへの感染対策が変更されたことに伴い、以前と同じような形に戻している。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

本校は普通科（特進・進学・情報・スポーツコース）24 学級と工業科（自動車工学・機械・建築科）11 学級の併設校であり、計 35 学級で構成されている。多様化する生徒の進路・適性・能力などを考慮し、バランスの取れた教育課程の編成に努めている。

(1) 普通科

ア 特進コース

1 年次は共通科目を通じて基礎・基本の定着に重点を置いている。少人数制・習熟度別授業を展開し、生徒の学習意欲と学習効果を高めるよう工夫している。正規の授業として7 限目を設けており、授業時間の確保に努めている。

2 年次より、コースを細分化（私立文系、私立理系、国立文系、国立理系）し、生徒の能力や希望進路に対応するための教育課程となっている。

イ 進学コース

大学・専門学校等の進学を目指すコースで、主要5教科を中心に教育課程を作成している。探究活動にも力を入れ、生徒の自主性・思考力や判断力を伸ばすように努めている。

ウ 情報コース

情報教科に興味・関心が高い生徒や就職を希望する生徒で編成されたクラスで、パソコン実習を多く取り入れ、資格取得など情報社会に対応できるよう工夫している。探究活動においては、企業に対してプレゼンを行うなどしてその成果を生かしている。

エ スポーツコース

通常の体育の時間だけでなく、専攻体育という形で週2回、午後から部活動毎に活動できる時間を設け、部活動の強化を行っている。また、リーダーシップを発揮できる人材の育成を目指し文武両道を心掛けている。

(2) 工業科

実習を伴う専門教科と普通教科と調和を考慮しながら、各学科の特色を生かし、「ものづくり」において生徒が得意分野で専門性を追求できる教育課程を編成している。また、中学校での出前授業や校外で行われる工場見学や資格取得のための特別講習を通じて、より実践的な経験を得られるようにしている。

(3) 評価については、学科の特色や生徒の自発性を高める、意欲を高めるという本校の教育目標に沿って展開されているかを、科会・教科会・学習指導委員会を定期的に関き、問題点や改善点についての検討を重ねている。

(4) 基本的な学力が身につけていない生徒も多いため、土台となる義務教育段階の学習内容の確実な定着を図るため、特進コースを除く全1 学年対象に、国・数・英の学び直し教育を教員3人体制で実施している。

2 教務関係実務に関する諸問題

(1) 同時開講の選択講座や実習・体育など固定化の必要な科目が多く、バランスの取れた時間割作成に苦慮している。（曜日や時間帯の偏り。）また非常勤講師の出勤曜日・時間指定や教員の持ちコマの増加などが時間割編成を一層困難にしている。

(2) 成績管理システムが複雑になり、タブレット端末での各授業の出欠入力の実施、また、成績処理、調査書、指導要録作成まで大きく変更され教員の負担が大きくなっている。書類の用紙

変更が続いており、校内での基準作成に追われている。さらに、授業や生徒連絡用にはロイロノート、Classi 等の複数のツールが混在していることも教員の負担増に繋がっている。

3 入学生確保に向けて工夫していること

3月下旬の新入生招集日まで生徒人数やクラス数が確定しないことが時間割作成や新体制作りの妨げとなっているため、本校の魅力や特色を積極的に発信し、推薦入試での受験生増加を目指している。そのため中学生向けの学校見学会では、各科・コースや部活動体験など毎年工夫を凝らし参加者を増やしている。

また、工業科においては、生徒たちが防球ネットや木製・鉄製のトンボ、リヤカー等を実習の時間や放課後を利用して作成し母校に寄贈をしたり、出前授業として実習の紹介や体験の場を設けたりして、中学校訪問を行っている。実際の作業を見たり先輩の声を聴いたりすることでより分かりやすい学校の魅力発信を行っている。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

- (1) 本校では、大学進学を目指す普通科、5年一貫教育で看護師を目指す看護科、そして多様な進路希望に対応する総合学科の3学科を設置している。総合学科では、学びの多様化を図るために特色あるコース編成を進めており、一昨年度からは不登校経験のある生徒を支援する「トライコース」を新設するなど、学習意欲の喚起と多様な学びの場の提供に努めている。
- (2) 学習評価については、現在のところ教科担当者に任されており、全体として評価基準の統一が十分に図られていないのが課題である。

2 教務関係実務に関する問題点

- (1) 業務の細部までの割り振りや可視化が不十分であり、急な業務の発生や、1つの変更によって派生する様々な影響や規定の見直しに迫られる場面が多い。業務の流れが明確でないため、教務内の業務が一部の教員に依存している傾向にある。

3 入学生確保に向けて工夫していること

- (1) 中学校との連携を強化し、出前授業や学校説明会を積極的に実施している。加えて、SNSや学校ホームページを活用した広報活動を行っている。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

(1) 教育課程の編成

- ア 1年生から6年生まで中高一貫教育を実施している。1学年の定員は120名、各学年4クラス編成で、1クラス30名前後である。
- イ 1～4年生は、成績・男女比などさまざまな観点から均等に学級編成をしている。
- ウ 5年生からⅠ型（文系）・Ⅱ型（理系）選択を行う。5・6年生とも文理は2クラスずつである。例年、理系志望者が多いが、今年度の5年生は文理ほぼ半数ずつとなっている。
- エ 全員が国公立大学受験を前提にしているが、年度によっては志望大学に応じたコースを開講することもある。

(2) 工夫・改善

- ア 土曜日も開校し、授業時数を確保することによって学習効果を高めている。

(3) 学習評価の在り方

- ア 全学年の生徒に対して、全教科の教科担任の授業評価を年に2回実施し、生徒の学習意欲を向上させるために、授業や評価方法の改善に努めている。
- イ 長期休業明けには課題テストを実施し、生徒の努力が報われるような出題をしている。点数を平常点に加味することで、意欲向上に結びつけている。

2 教務関係実務に関する問題点

(1) 時間割編成

- ア 私学で教員の異動が少ないため、春休みの早い時期からの時間割編成が可能である。
- イ 教員の担当学年が6学年にまたがっており、前期課程（1～3年生）・後期課程（4～6年生）の両方の教科科目を担当する教員が多く、さまざまな選択授業で同時開講としているため、編成はかなり煩雑である。
- ウ 特定の曜日にしか勤務できない非常勤講師が多く、教科バランスの取れた時間割作成に苦慮している。

(2) 習熟度別授業

- ア 後期課程においては、国数英の3教科は基本、習熟度クラス(A・B)の編成を行っている。

(3) 地歴公民・理科の選択科目

- ア 開講できる下限は5人としているが、開講できない科目はほとんどない。

(4) 校務支援システム

- ア 出欠席・成績処理・帳票処理等に校務支援システム(BLEND)を導入している。帳票等にまだ不完全な面があるが、より効率的な処理・業務改善ができるよう、業者と連絡を取りながらシステムの改善を進めている。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) 在校生・保護者への働きかけ

- ア 学習指導・学級活動・学校行事・部活動と、様々な機会をとらえて、生徒の心身両面の成長を促し、生徒の充実感を増すよう努力している。
- イ 保護者との連絡もできる限り密にして、理解と協力をいただいている。

(2) 小学生への働きかけ

- ア オープンスクールでは、小学生への「おもてなし」を本校5年生が担い、参加者に楽しみながら「入学後の未来像」を描いてもらうようにしている。
- イ 学習塾へ通う児童が受験することが多いことから、市内の塾へもパンフレットを配付し、広報に努めている。

(3) 情報発信

- ア 従来から、ホームページでの情報発信に注力している。わかりやすく、また新しい情報を掲載するようにHP管理・運営の担当者を配置している。
- イ 校務分掌に広報広聴課を設置し、オープンスクール・学校説明会の企画・運営を担当している。また本校の特徴をわかりやすくまとめた学校案内パンフレットの作成、各メディアへの情報発信等も意識して、学校のPRに努めている。

令和7年度県立学校教務主任研究協議会資料

1 教育課程編成の工夫・改善と学習評価の在り方

1・2年次を習得期，3～5年次を活用期，6年次を探究期と3つの期間に分け，それぞれの期間において目標を達成できるように教育課程を編成している。

(1) 授業時間の確保

1・2年次は月・火・木曜日を7時限授業，水・金曜日を6時限授業，土曜日を4時限授業とし，週当たりの授業時間数を37時間としている。

3～5年次は月・火・木・金曜日を7時限授業，水曜日を6時限授業，土曜日を4時限授業とし，週当たりの授業時間数を38時間としている。

6年次は授業時間数を36時間としているが，空いた時間は補習授業として苦手科目の克服や，得意科目の伸長に当てている。

(2) 英語の活用に特化したコースの設定

前期課程の3年次から英会話を中心に，様々な事柄に英語を活用しながら学習を行うコースを作って，海外姉妹校との手紙のやり取りや英語を使ったプレゼンテーションやディベートの活動を行っている。また，英語以外の科目において，部分英語イマージョン指導を行ったりもしている。

(3) 学習評価の在り方について

① 観点別評価は3つの観点をそれぞれ数値化したうえで，その評点を総括する形をとっているが，主体的に学習に取り組む態度の数値化については各教科で工夫が繰り返されている。

② 活動の評価を数値化していき，電算処理によって一律に処理を行っていくと，観点別評価が「AAC」のように偏った出てくることが必ず起こり，その都度話し合うことになり，これは成績処理の際の業務の負担の増加につながっていると思われる。

2 教務関係実務に関する問題点

(1) 学校行事，定期考査について

定期考査の教科・科目数や日程が，前期課程と後期課程で異なる場合がある。また，前期課程と後期課程の両方の授業を担当している教員が多い。そのため，行事の予定の組み方や時間割変更，考査監督の割り振りが煩雑である。

(2) フルクラウド型校務支援システムについて

遅ればせながら，出欠や成績処理とそれらのデータの管理をクラウドコンピューティングで行うようになった。全体としての業務の数は減り負担は減ったように思う。しかしながら，まだ使い始めたばかりのことで，行った作業に信頼がおけず，心配が絶えない。さらに，それらの作業を他の教員をサポートすることも必要であり，現在のところは，担当者には心身ともに大きな負担がかかっている。

3 入学生確保に向けて工夫していること

(1) 学校説明会を実施し，体験授業を行うなどして，面倒見の良さをアピールしている。

(2) 小学校や学習塾の訪問を行い，本校の教育活動について説明している。

(3) グローバルプロジェクトというテーマのもと次のことに力を入れてアピールしている。

① 海外留学への環境を整えている。

② 前期課程から本格的なプログラミング学習を始めている。

③ 前期課程において日本文化として茶道、剣道、華道、柔道、弓道を学ばせている。